



TITLE:

中世民衆社会における造園職能民の研究(Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

林, まゆみ

CITATION:

林, まゆみ. 中世民衆社会における造園職能民の研究. 京都大学, 2001, 博士(農学)

ISSUE DATE:

2001-01-23

URL:

<https://doi.org/10.11501/3179177>

RIGHT:

中世民衆社会における造園職能民の研究

2001年

林 ま ゆ み

中世民衆社会における造園職能民の研究

目次

序章. 研究の背景と本稿の課題	3
0-1 問題提起	3
0-1-1 研究の目的	3
0-1-2 研究の方法	6
0-2 研究史の流れと本稿の課題	8
0-2-1 造園職能に携わった中心的階層に関する研究の展開	8
0-2-2 造園、土木職能について	22
0-2-3 河原者作庭論について	24
0-2-4 まとめと課題の抽出	26
第1章 造園職能民の形成・・・北野社に見られる事例から	30
1-1 はじめに	30
1-2 北野社の成立と社会的背景	30
1-3 造園土木職能の記述に関して	31
1-3-1 北野社関連史料にみられる清めの職能	32
1-3-2 造園土木職能に関して	34
1-3-3 造園職能に携わった人々の組織	40
1-3-4 生活と組織	42
1-4 まとめ	44
第2章 造園職能民の完成・・・善阿弥論の再検討	48
2-1 はじめに	48
2-2 善阿弥のたどった道	48
2-2-1 若年期の善阿弥	48
2-2-2 善阿弥の称号と義政の愛護	51
2-2-3 善阿弥と盆山の流行	53
2-2-4 善阿弥の発展と諸寺院との関係性	56
2-2-5 善阿弥の没年	57
2-3 善阿弥の社会的位置づけと集団	58
2-3-1 善阿弥と賃金	58
2-3-2 善阿弥と周辺の集団	61
2-4 まとめ	64
第3章 造園職能民の展開・・・京都にみられる他の事例を総合して	68
3-1 「散所」から「河原者」へ	68

3-1-1 呼称の変化	68
3-1-2 賃金	75
3-1-3 身分と職能集団	78
3-2 清めの職能から作庭へ	81
3-2-1 呪術的側面	81
3-2-2 技術の発展	84
3-3 「山水河原者」の最後	85
3-4 まとめ	87
第4章 造園職能民の発展・・・近畿に見られる石垣を積む職能	90
4-1 はじめに	90
4-2 史料や伝承等の記述に見られる石垣普請と穴太散所	90
4-2-1 穴太伝承への疑問	90
4-2-2 「散所」と職人の形成	91
4-2-3 織田信長以前の戦国大名構築の石垣	93
4-3 『兼見卿記』に見られる職能の分類	99
4-3-1 穴太の初見	99
4-3-2 「大工」、「河原者」及び人足に関して	100
4-3-3 他の事例にみられる職能としての穴太の位置づけ	101
4-4 他の事例にみられる穴太の発展過程	101
4-5 まとめ	102
結章	105
5-1 総括	105
関連する論文	112
Summary（英文要約）	113
あとがきと謝辞	125
付録 中世後期に作られた庭園や施設の写真	128

序章 研究の背景と本稿の課題

0-1 問題提起

近年、我々を取り巻く環境は刻々と変化している。造園にかかわる概念も、古くは作庭を、明治以降は公園緑地の計画という発想を持つようになり、景観設計や環境計画等さまざまな言葉で表現されるようになってきた。現在筆者が勤務する兵庫県立姫路工業大学では、景観園芸という新しい言葉を使って自然・環境科学研究所の景観園芸系設立され、同時に淡路景観園芸学校も併設された。新たな言葉と概念が構築されようとしている。造園という言葉の意味は時代につれ、生活につれ、変容してきたわけである。

さらにまた、これらの空間形成に携わってきた人々の歴史を過去へとさかのぼると、多様な階層が関わってきたことが検証されてきている。本論文では、わが国で初めて民衆が主体的に造園空間の形成に関わった時期として中世をとりあげ、それら職能民の形成に着目した。

近代まで造園という言葉は用いられてこなかった。しかし、造園に関わる職能の歴史を概観すると、指令する立場としての計画者或いは、意匠デザインの考案者として携わったのは朝廷或いは貴族や僧侶、武家であった。人夫の労働力や単純作業を行う職人¹としては、権門内に属する人的組織や夫役として借り出された農民、さらに下層の民衆等であった。中世後期に初めて、民衆が造園により主体的にかかわってきた事例が見られるようになった。

中世後期では、特に石立て僧が造園従事者として興隆をみた。これを境に民衆社会における造園労働従事者がより主体的に計画者の領域に踏み込んでこれらの職能に参加する。同時にこの時代は造園の分野を超えて、都市や自立都市民的な町衆の形成、条里制から発展し、棚田などにみられる田園景観の変容、山岳信仰や土着的アニミズムの集大成ともいえる神道の形成、茶の湯や能、狂言などにみられるように日本独特と位置づけられる歴史や文化の形成史上における意味性の高さにも注目される。

この論文は特権的な上層階級の歴史ではなく、造園という職域に固執しながらも、あくまで民衆、風土、生きること、みどりと人とのかかわりなどに着眼点をおいたもので、そこから導き出される職能民の形成における論考は中世後期の日本社会の底辺を生きながら風景や庭づくりに関わってきた人々の歴史でもある。

0-1-1 研究の目的

（1）仮説の提示

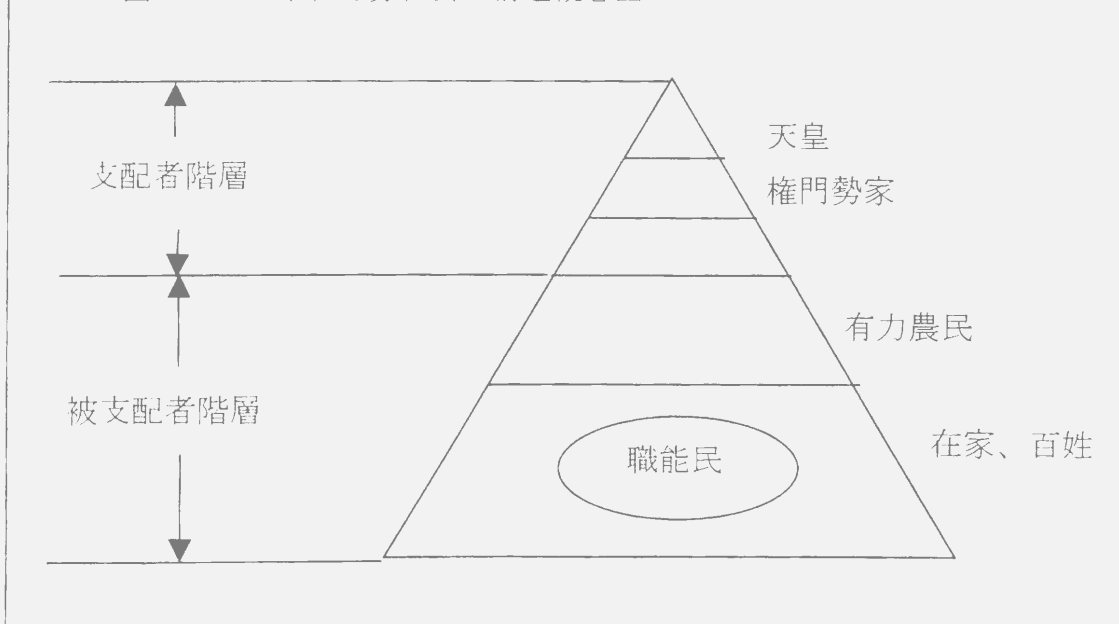
本論文は、各章における論証を積み重ねていくことにより、中世の民衆社会における造園職能民の形成について論じる。身分的には下層に位置づけられたこれらの階層が中世という時代の流れの中での必然性を持ちながら、分業化の中で集団化と組織化を発展させ、各々の主張を強めてきたこと、中世という独自の世界観を持つ時代の中でこれらの造園職能が他の職域と共存する形で形成されてきたこと、そして日本化と評価すべき文化的独自性が造園職能の形成の中で固有に発展してきたこと、権門との結びつきがこれらの職能の形成に寄与したこと、京都の各地でさまざまな固有の職能民がみられたこと、そしてまたそれぞれの地域における職能形成の過程の中で技術的側面の伸張が見られたこと、彼等独自の様式論や自然観などを検証することを目的としている。

本論文が目指すところは、階級社会における身分制や当時の社会概念、造園職能が形成されるまでのさまざまな職能の重なり等について言及し、その中で造園職能がその職域として、空間或いは大地に関わる技能としてどのように展開していったか、また造園にかかわる職能民がいかにその生き様の中で、彼らの生を表出していったかを論じるものである。

（２） 「中世民衆社会と造園職能」に関わる用語について

「中世民衆社会と造園職能民の形成」という主題に関わる用語の定義として以下の検証を試みた。これらは既存の概念とこの論考の中で明確になされた概念規定を総括して最初に提示している。すなわち、中世民衆社会、造園職能、職能民

図－１ 中世身分社会の構造概念図



についての３点に関して、それぞれに関する概念規定を行っている。

① 中世民衆社会

「中世民衆社会」とは何を意味するか。中世においては、一般的に民衆とは、被支配者階層を指す。対極にある支配者層とは、従来の天皇を頂点とする公家などの貴族の他、権門社寺、また鎌倉時代に台頭した武家勢力となる。

中世における民衆や庶民とは農耕民を主軸として構成されている。これらの農民は通常、年貢の徴収や夫役を徴発され、地域的に領有された土地に居住し、支配者層である権門によって人身的に掌握された存在であったといえる。

農民を主軸とする民衆社会の中で、ここで特に扱う造園土木的な職能形成に関わった階層は当然、租税の一部である土木的人夫役として徴発される在家と呼ばれる一般の農民も内包しているが、主としてこのような造園土木的職能に携わったのは、徴税の義務から離れ不毛の地に居住していた雑役や奉仕作業に従事した階層を指している。

造園土木的職能民の形成をみるうえでは、むしろ、非農業民、無縁の人々、定まった居処のない人々により注目する必要がある。なぜなら、いわゆる一般の農業従事者以外の民がこのような作業に従事していた事例が数多くみられるからである。結論としていえば、造園土木的職能民としては、中世民衆社会の中でも、無縁の人々ともいえる職人、都市民的階層、非農耕民に注目した。

② 造園職能

一般的に造園職能とは、今日においては環境を構成する景観の中でも特に水、緑、生き物、或いは小規模庭園から大規模公園や緑地環境を主軸としたオープンスペースに関する調査、構想、計画、設計、維持管理等の何らかの技術的職能を意味している。

しかし、中世における造園職能とは、現在における狭義的な意味としての造園職能では括りきれない。より、土木的職能である架橋、道普請、築地、堀、土堀、池造り、井戸掘りなども含まれている。中世においては造園や土木も含めて普請という言葉でも代用されうるが、この普請という言葉には中世においては大地に手を加えるという意味²がある。また、さらに重要なこととしては、いわゆる「清め」としてのさまざまな職能を内包している。「清め」とは、道掃除や池や井戸の掃除を始めとして、動物の死骸の処理、人間の死体の処理等も含んでいる。また、刑罰を加える作業をも含むのである。

以上の所見から、現代的な意味では造園職能とは段落の始めに述べたところの現代における技術的職能としての意味合いとなるが、中世における造園職能とは造園土木的な職能を意味し、また、それらの中には現代的意味合いとしての造園土木的職能以外の、呪術性をもつところの「清め」の作業と呼ばれる諸職能が含

まれるのである。これらを扱う職能民は、同じような階層、同じような職域として存在していた。但しこのような職能が、それでは同一のものであったと結論付けることも出来ない。以後この観点も含めた論証を展開することになる。

③ 職能民について

中世における職能民としては、いわゆる非農耕民を中心とする職人形成の機軸となった階層に関してをここで論証することとしている。しかし、この「職人」という語義の解釈に関しては、さまざまな歴史学的見解が議論されきており、ここで単純に結論付けられることはできない。

網野善彦は1980年に書き下ろした論文「日本中世の平民と職人³」の中で次のように述べている。「ここでいう職人は身分としての職人で、平民が負担しなければならない年貢や公事の負担義務を一部ないし全部を免除される特権を保証された人たち、いわば、自由を特権として保障された人たちである。」「この転換以前の社会（南北朝内乱期の大きな転換）は古代や原始社会になお通じるものをもっており、原始性、呪術性に富んだ社会であり、近世以降の常識ではたやすく理解しがたい要素がまだかなり支配的な意味を持っているのではないか。・・・異民族や非人、遊女などはまだ差別の世界に封じこめられてはいない。それぞれ自立した独自の集団として活動しているような開かれた一面を持っている。・・・南北朝の動乱ののち、室町期以降、文字がより深く社会に浸透し、都市が成立してくると、呪術性が次第に社会から消えていく。感性に変わって理性が社会の内部に浸透し始めると同時に差別の固定化が進む等々、違う現象が前面に出てくる。」

さらに、1988年の論文「中世前期における職能民の存在形態」⁴の中で「近年における被差別民の研究の進展はめざましいものがあり、これを職能民と捉えることが妥当であるか否かについて、なお、議論の余地が残っているとはいえ、この分野での研究の深化が、職能民全体の問題を考える上に重要な意義を持っていることは否定しがたいとしている。」と述べ、被差別民を職能民として捉えることを積極的に肯定している。

本論では中世後期から、近世初頭にかけて、非農業民として存在した彼らが、地歩を固めるべく、どのようにして造園職能者として発展をしてきたかと言う点に着目した。

0-1-2 研究の方法

（１） 研究の手順

本稿では、以下のようなフローで研究をまとめた。

当時の社会的背景や身分的変遷、地域の状況、住居形態、文化的蓄積に関する考証の中で、造園や土木的職能に携わったとされる階層が、①いかにして彼らの

地歩を固めつつ、②その主張を貫き通し、③技術を研磨し、④収入を増し、⑤そして社会的に認知されていったか、また、時代のうねりの中でこのような「河原者」や「散所」と呼ばれ、それでも職能を高めていった彼らが、⑥時代をどのように受け止め、時代にどのように扱われてきたか、等を検証した。

中世後期にかけて造園職能に携わったのはいわゆる被差別民・・・すなわち「散所」や「河原者」、或いは「非人」と呼ばれた人々が史料中に頻出する。貴族や寺社の僧侶、そして武士がプランナーとして造園に関わった時期を経て、造園職能により主体的に携わった階層は、主としてこのような階層から始まったわけである。なぜ差別を受けた人々が主として造園職能に携わったのかという経緯を考証し、中世という階級社会におけるの彼らの叫びともいえる主張にも耳を傾けながら彼ら造園職能民の発展過程を検証した。

研究の方法としては最初に、歴史研究における先達の研究分野を鳥瞰し、①既、対象とする事柄に関して論じられている先行研究の整理を行い、それから論を進めるにあたっての共通認識の確認と課題の抽出を行った。②さらに課題のうち、論を進めるにあたっての諸問題に対して批判を加えた。③そこで、さらに対象の絞込みと論じるべき道筋の提示を行った。④さらに文献史料の検討や現地調査などによる各種事例から、近畿を中心とした職能の形成を導き出した。⑤それらの共通項の中から、中世民衆社会における一般的な職能形成の流れを把握すると共に、⑥地域的、時代的差異の中から職能形成の特徴を探り、⑦最終的には職能形成に関して社会的側面も通じて結論付けることとした。

（２） 論文の構成とその内容

論文の構成は、以下ようになる。

序章の研究史の流れと本稿の課題では、室町時代から続く茶庭や禅宗における枯山水の庭園の創出に大きな働きをしたとされ、初めて民衆社会の中から造園プランナーとして大成した「山水河原者」などの造園職能民の形成についての興味をあげた。さらにこれらの論証の中で使う用語、すなわち「中世民衆社会」、「造園職能」、「職能民」などについての概念規定を試みている。また、研究の方法としては史料の収集と分析、現地調査等をあげている。

序章の0-2では「研究史の流れと本論の課題について述べている。特に前段の0-2-1、0-2-2であげる研究論文或いは著作等は、造園職能民の歴史という問題意識の上で書かれたものではない。むしろ中世民衆史、被差別民の歴史、或いは中世における土木技術史等を検証することを主眼としているものである。後段の0-2-3では、主として「河原者」の作庭論や足利義政を主眼として書かれた論文等を検証している。その上で0-2-4として従来の研究のまとめとその課題の抽出

を行った。

第1章以下では、歴史的史料の分析として、『北野天満宮史料』、『蔭涼軒日録』、『鹿苑日録』、『大乘院寺社雑事記』、『東寺百合文書』、『編年差別史資料集成第4巻中世編二』、『京都の部落史』（詳細は後述）等の文献史料を中心として中世後期における社会や技術的側面に関して考証した。さらに、現地調査として石垣の遺構の測量等、現地で保存されている造園職能に携わった人々の遺構等などの調査も行った。そして最終章では各章を総括し、まとめの作業を行った。

第1章の「造園職能民の形成・・・北野社にみられる事例から」では、1-1で問題提起を行った。1-2で北野社を取り上げた背景と北野社の概要を示し、1-3から北野社の中で見られる造園土木職能民の構成や仕事の内容を詳細に検討した。その上で、1-4でまとめとして北野社を中心とした造園職能民の構造的展開を考察している。

第2章の「造園職能民の完成・・・善阿弥論の再検討」では2-1で問題提起を行った。2-2では善阿弥のたどった道を検証しつつ若年期の善阿弥から義政との関係、盆山の流行、諸寺院との関係性、没年に関する検討を行い、2-3では善阿弥の社会的位置づけと集団という視点彼に関わる社会的背景を論じている。それらは賃金や集団の形成に関わる者である。善阿弥の時代を中心として論証することをこの章全体の大きな目標とし、2-4のまとめに至った。

第3章の「造園職能民の展開・・・京都にみられるた他の事例を総合して」では、3-1で呼称の変化について、3-2で清めの職能から作庭へという項目に関して被差別民の史料体系から造園職能を補填的に調査、検証を行った。また、3-3で山水河原者の最後を論じ3-4で造園職能民の生活や技術、歴史的変遷をまとめた。

第4章の「造園職能民の発展・・・近畿にみられる石垣を積む職能」では4-1, 4-2で石垣普請に特化して伝承への疑問から穴太と呼ばれる地域や職能者、そしてそれらの民衆によって構築された実際の石垣の調査からさまざまな考証を加えている。4-3では『兼見卿記』にみられる職能の分類を通じて穴太や「大工」、「河原者」など造園職能民の構成を検証した。4-4では他の事例にみられる穴太の発展過程を検証し、4-5でそのまとめを行っている。

結章は第1章から第4章までの多様な事例を総合化し、中世民衆社会における造園職能民の形成に関して、総括を行ったものである。

0-2 研究史の流れと本稿の課題

0-2-1 造園職能に携わった中心的階層に関する研究の展開

中世後期に造園職能に携わった中心的階層の分析においては、貴族社会や武家

社会、寺社等の権門勢家等における庭園の創生に関わる作者論や様式論的な研究では不十分である。善阿弥を頂点とした「山水河原者」や造園技術者集団が輩出される民衆社会史を振り返りながら、差別されてきた階層がいかにして庭づくりの名手として認知されるようになったかという社会的背景を中心とした考察が必要である。

関連する既往研究では、造園に関わる職能民が主として内包された階級や民衆生活等に関して初期段階に「散所」という概念を提示した森末義彰、古代律令制からの身分構成上の継続性を論じた林屋辰三郎、また職能論や無縁の民までアジュール⁵という概念の提示も含めて論じている網野善彦などの論を検証した。さらに、「散所」論の展開とその発展に関しては、林屋辰三郎と脇田晴子によって行われた論争、黒田俊雄、大山恭平等の論考を基に、丹生谷哲一による集大成、その後の論の発展や現時点における歴史研究の到達点を考察した。

造園土木職能に関する技術史的観点からは三浦圭一を中心とした中世における土木職能や職人に関する論の検討を試みた。その他、「番匠」など大工仕事も含めた職能論として、遠藤元男や大河直躬などの論考も参照した。

「庭者」或いは「山水河原者」や枯山水の作者に関してなどの、現代における意味での造園職能に関連しては、善阿弥を中心とする「山水河原者」についての研究など、長年に亘りさまざまな資料を提示して論考されている。その中でも吉永義信、森蘊、伊藤ていじ、芳賀幸四郎等を中心として考察を加えた。

（1） 階層に関する研究の流れ

中世後期における造園職能に携わった人々を論じるとき、当時の社会の最下層にいた人々の存在に目を向けざるを得ない。これは中世においては人夫的労働に従事した階層は、権門内に人身的に従属していた階層や、徴税としての夫役を担っていた農民以外には主として被差別民で構成されていた民衆であったからである。土を触る職能、植木や庭造りに従事していた階層を史料中に見出そうとすると、必ず「清め」という「穢」にさわる職能者として「散所⁶や非人⁷、河原者⁸、声聞師⁹」などの語彙と出会うこととなる。しかしこれらの語彙の中世における意味を現代から振り返ってみると、それらが正確に歴史的 개념を表わす語彙として確立しているわけではない。このような被差別民の系譜の整理を目的として様々な史料や論文、著作にあたってみた。

結論からいうと歴史的研究成果として確たる定説が成立されているとは言い難い。しかし、主だった議論について本論で紹介し、またその課題の整理を試みた。

① 「散所」という視点

前段にも述べているが、いわゆる造園職能に従事していた階層を中世社会の文

献史料から拾おうとすれば、まず「散所」という語彙が注目される。「散所」や「河原者」、「声聞師」などという人々や階層、職掌を意味する語彙が史料に頻出し、これらの人々が造園土木的職能に従事している例が多いからである。「散所」や「河原者」とは何を意味するか。この整理と定義をしておかないと本論の展開は困難となる。「散所」とは、不毛の地に居住し、身柄を権門に従属させて、人夫役などの雑事に従事している層という簡略な説明はできる。「河原者」とは不毛の地である河原に居住し、穢多、非人などという蔑称とともに使われてきたことが多い。

その歴史上の出現時点での正確な意味やその変遷に関しては、部落史研究からの観点からも、あまりにも大きな歴史的課題として長年研究が行われてきたものであり、本章で単純に結論付けられるような性質のものでもない。しかし、本論を進めていくためにはそれらの研究を整理し、課題の提起と共に自らの論考を進めていく必要がある。以下、これらの先達の本論による研究の整理と課題を示すこととする。

特に初期において、「散所」に関する詳細な研究を提示したのは、森末義彰¹⁰である。森末義彰はその論考の中で、「散所」を定義付けて、「本来は一定の居所なく、随所居住せる浮浪生活者を指す。また、同類相集まって一個の団体を形成し、その身柄を権門勢家或いは社寺に投じて、その所領の中に固着し、社寺或いは権門の雑役を勤めることによって生活の安定を得るに至ったものであろう。」としている。「散所」以外にも「声聞師」や「河原者」等にも言及しているが、これらは「社会的に同一階層に位置し、ところに拠っては同様な職務に従事していたが同一のものという認識はない。」としている。「散所」をそれぞれ、「院・摂関家・諸家の散所」、「諸社の散所」、「諸寺の散所」と分類し、また「散所と遊芸」に関しても論考を加えている。

「院・摂関家・諸家の散所」の例としては、まず、「院中に所属した散所として散所召次がある。」としている。また、「召次というのは院中の雑事を勤めたり時を奉じたりする役である。他に散所雑色や散所法師の名前が挙げられ、それぞれ院に所属している。」としている。特に「東寺の散所法師は文保2年(1308)に、同寺の掃除料として後宇多法皇によって寄進された。」と述べている。さらに「この寄進という行為で注目されるのは、散所召次や散所雑色、散所法師がその身分上の区別なく併記されていることである。」と述べ、「摂関家の散所に関しては長和2年(1013)の小右記の記載にある散所隨身が散所の記述の初出。」としている。

また「摂関家の散所は各地に散在していたが、元来散所が土地に即せずその人的結合団体をのみ指したものであったことを示す。」とも言及している。さらに、「諸家の散所に関しては三条家領淀別荘などが散所である。」としている。「諸家

の散所に関しては残されている史料がほとんどないことから久我氏の本領山城久我庄に僅かにその存在を見る。」ともあり、他には「応永12年6月11日(1405)の教言卿記に散所法師、熊の名前があがり、築地や祈祷のための地祭りを行っていた。」と述べている。この熊法師に関しては本論でも後に詳述するが、「散所」が築地などの普請に加わった例として頻出している。

「諸社の散所の例としては、諸社寺に所属して平常はその諸領内の田畑を耕作し、必要に応じて、所定の雑役に奉仕した散所」としても挙げている。「社寺の散所については摂関家散所のように遠く遠隔の所領内に居住することなく、殆どが所属の諸社の境内近くに居住しているところから見て、元来は神社への奉仕の人的機構の一要素として、雑役を専らとするものであったが、時代が下ると共に、生計のため社領の耕作を許され、中世の終わりには一般農民と異なる存在となったものと推測される。」としている。

さらに、「諸寺の散所」に関しては以下のように記述している。すなわち、「史料として多く残っているものは東寺の「散所」が掃除散所として有名であった。・・・東寺の「散所」は自発的身柄投入によるものではなく、寄進行為によって成立したものである。その起源は文保(1317)2年9月、後宇多法皇により院の「散所」が掃除料として寄進されたところにあり、当初は15人に過ぎなかったものが、建武元年(1334)頃には方々散所法師と称されるようになり、拡大してきた。」としている。また、「散所と河原者の関係」については¹¹「九条の河原者を誤って九条之散所と書し、次いで「散所」の二字を抹消して河原物と改書していることから九条「散所」が「河原者」と共同にか、或いは隣接して集落をなしていた。」と考えている。

また、「東寺散所の所役とその使役に関して、それらは掃除散所とよばれているように、寺内清掃のための存在であったが、同時に散所法師は池堀、築地構築などの土木的或いは造園的な事業の専門業者であった。」とも考えている。その使役の内容としては「掃除、池堀のほか、道作り、舟津田刈取、築地葺き、瓦修理、築垣などのほか作事雑用に多様に使役されており、このような人夫として重要視されていること。」などと述べている。

最後に、「諸寺の散所」に関しては「興福寺の五ヶ所、十座の声聞師や高野山の谷の者等も何れも東寺の散所法師と同様な所役に従事するものであったが、彼等はそれぞれ散所とは別な名称をもって呼ばれていた。」として、問題にしていない。

上のように森末義彰の論によると、「散所は不毛の地に居住する租税の負担の無い賤民階層で、東寺など権門に寄進され、身柄を権門に隷属している階層」として捉えられている。注目すべき点は「それらの階層は古代律令社会からの流れを汲むもので、賤民社会の中核をなしていた。」としていることである。また、「応

仁の乱以前はこのような賤民社会の主たる構成員として散所の名称が史料中に多く見られ、乱以後は河原者の名称が多く見られる。」と述べている。その結果森末義彰は結語として、「元来散所は浮浪者を意味する語であつたが、ある時期に達すると一個の結合体を形成し、一定の土地に固着してその身柄をのみ権門勢家の支配下に入り、所役に従うことによって生活の安定を得た。」としている。一定の土地に固着した後も浮浪時代の呼称がそのまま彼らに冠せられたと考えているのである。

一方で林屋辰三郎も賤民史の歴史を論考する中でこのような「散所」やその民に関して古代律令制からの継承性を持つ存在としての解釈を行っている¹²。つまりこれらの「散所」は古代からの隷属民の系譜を持つという考え方である。要約すると以下のように述べている。

「古代国家はその奴隷制的な支配を維持するために民衆の中に良・賤という身分的差別をつくった。その中で良民といわれるものにも、公民の他に品部・雑戸といわれる特別な技術をもって徴用される者がほとんど賤民と大差のない取り扱いを受けており、賤民はさらに官戸・陵戸・家人という一応家族的結合を認められるものと、完全な奴隷の二つの階層に分かれていた。」「古代国家から開放されたはずの民衆も再び新しい荘園領主のもとに隷属を続けることになり、律令制にあつては良民のうちに含められた雑戸民が、かえって身分的に賤視されたまま残され、関係をもつ官司の官戸にも特殊な差別をのこすこととなった。品部、雑戸をしたがえる官司の職務内容のほとんどが後世の未開放部落の職業内容と一致することでも伺われる。」「こうした賤民制の解体と新しい隷属の形態が散所の発生にほかならない。」「賤民制の起源は古代律令制における身分的差別に求められ、その解体と、それにとまなう中世荘園体制における新たな隷属の基本的形態が散所である。散所は賤民的民衆の身分的差別を職業的差別のみならず、地域的差別に転化させた。」。

森末義彰や林屋辰三郎の諸説では、職業的差別が地域的差別に転化したものということ、或いは古代律令制における奴隷制度の遺産として、賤民社会が形成されたとしている。しかしその後、この定義に関して数多くの研究者による反論を呼び、議論が活発に行われることとなった。

② 散所論の展開

前節で述べたように林屋辰三郎はその「古代国家の解体」¹³をはじめとする一連の論の中で「散所」を古代律令制の遺構とみ、賤民社会の身分制度が地域的差別に転化したものとして捉えている。これに対して、さまざまな反論が展開された。その概要は以下のとおりである。

脇田晴子¹⁴は後にまた、修正もしているが、その初期の論調では、「散所」を

中世初期の「散所」と後期の「散所」に分けて論を展開した。すなわち、「初期の散所は、荘園領主の支配機構の一環として、本所に対する散在の所領としての意味がある。その散所に属する雑色や召次は従属奉仕集団ではあるが、隷属しているものではなく、被賤視とは関係なかった。」「しかし中世後期の散所は散所法師や散所非人など、被賤視を伴うものであった。その原因としては散所の非農業的側面が挙げられ、土地を有しないが故の権利の強化をしきれなかったという点にある。」としている。

林屋辰三郎も脇田晴子に対して反論を展開した¹⁵。その中で、特に「古代国家の解体」でのべた三点すなわち、「散所と河原は古代における身分的差別が中世に至って地域差別をとったものであること。」「荘園と散所が中世における領有の二つの形態であり、散所と河原とは古代における奴隷的隷属関係である身分的差別が中世に至って地域的表現をとるという意味で、部落史の序章を形づくるものであった。」「中世の商業史を考察する場合、散所民が商人、職人の源流をなし散所的領有がやがて座商業を形成する前提であつた。」と整理し、その上で、「散には散る、散らす、という語義以外に、ひま用に立たぬという形容詞的な意味がある。」と脇田晴子はその語義を「散る」、とのみした解釈を批判し、「むしろ後者のひま、役に立たぬという意味で散所は最初から地子物の運上を予定せぬ地域である。」と定義づけた。また、初期に脇田晴子が散所の非農業的側面を差別の由来としたことも職業差別論として批判を加えた。

これらの一連の論争は継続的な議論となり、さまざまな問題提起をしたという点で賤民史の歴史研究上、重要な意義がある。黒田俊雄もその論文¹⁶の中で古代賤民制あるいは奴隷制の遺制として中世賤民を捉えようとする考え方を否定し、中世社会そのものが生み出したものとして被差別民を論じた。

論争は以後も続く。脇田晴子¹⁷は「中世社会における賤民的存在、さらには近世社会の賤民が古代の雑戸に起源を有するという説は、人種起源説を導くものとして、最近では否定されている。とは云え、古代の品部、雑戸制とりわけ雑戸制が中世賤民の源流をなすものという考え方は明確に否定されていない。」「中世においては比較的卑賤視されたといわれる職業、染色、造庭などについては、大蔵省織部司の緋染、藍染、園池司の園戸、土工司の泥戸それに主鷹司の鷹養戸などがあるが、これらは錦綾織や酒戸とおなじく品部であつて、特別に卑賤視された形跡はない。」などと考察している。

さらにこれらの論争の合間には生活史的な視点からの論が出現するようになった。横井清による「河原者」に関する論考も出されている¹⁸。そこでは、「卑賤視の歴史的推移としては、例の『塵袋』の、『キヨメヲエタト云フハ何ナル詞ハソ。』に始まる解釈であり、同時にこれは、従来穢多の話の初見とされて来たものであ

る。」「河原者・穢多の語は最初にみておいた諸史料の表現からみるかぎり、すでに言われているように室町時代からほぼ同義語に近いものとして用いられてきたとわかる。」「河原者が穢多ばかりでなく、複雑な構成員からなっていたことはよく知られている。屠殺、皮剥、清掃、物貰い、雑芸人等々のほか、たとえば貞治4年（1365）祇園社鳥居の建立にさいして酒直一連半を支給されて穴堀に従事したり、用材入手に関係したりしたものが、四条河原細工丸十余人だったことも興味深い。」「実は古代～中世の卑賤観の基底には、最も大きい要素として、この農業以外の生産部門に対する軽視が相当根強く存在していたのではないかと考えられる。」「穢れ多きもの、というこの最高級の蔑称が、強く仏教思想によって育まれ、また支配階級－貴族・社・寺－によって育成されたものであったことはいうまでもない。」「室町期、禁中に『川原者 穢多者也』が参入し、庭木のことなどに従事したが、これを停止し『散所者 声聞師事也』に変えたその理由が『不浄之者』たることにあった。」

「河原者」の定義と「散所」研究の動向としては以下のように述べている。「河原者とは荘園社会において、底辺社会の一部分を構成した人々の身分的な呼称で川原者、河原物、瓦物などとも表記される。その名の示すように、原則として無税地であった河原など不利な立地条件の土地に居住して零細な河原田畑を営むとともに、当時の支配層から賤業とみなされていた生業にたずさわリ、蔑視された人々をいう。」「散所民は、律令国家組織の変質・解体の結果、個々の荘園領主の支配下に収まったもの。」「ただし、河原者などに対する法制上の身分規定はまだ定着せず、差別、蔑視とはいっても多分に慣習的なものにすぎなかった。かれらの身分規定が法的に確定されるのは、荘園制社会における「賤民」的身分が「穢多」身分に集約され、居住地域ならびにその職業が統一権力によって固定されるに至った、近世幕藩体制成立期のことであったと考えられる。」¹⁹渡辺広は、「未開放部落の形成と展開」²⁰の中で以下のように述べている。

「律令制の解体に伴って、社会外の社会を形成する賤民があらわれてくる。彼等は律令制の賤民とは社会的性格を異にする。しかし律令制の賤民が核になって、社会外の社会を形成する賤民があらわれてくる場合はあり得ると思う。」「平安時代中期以降、社会外の社会が形成され、江戸時代中期になって、穢多、非人の制度が確立したのである。従って中世は未開放部落の形成期と見ることが出来る。」「中世賤民の嫡流であり、寺社・公家などに隷属した非人（宿非人・犬神人・散所法師など）と少なくとも中世初期には隷属しなかった非人（きよめ・えた・河原者）との相違を『隷属の拒否』に求めた。」「中世社会は、一方では社会から転落した非人を析出しながら、他方ではかれらに依存していたのである。」

さまざまな論が展開する中で、脇田晴子²¹は「散所」論の展開の一環として、

「非人」という概念を用いてさまざまな権利についてさらに検討を深め、「林屋辰三郎による「散所」論の問題提起の意義があまりに大きかった故に、以後、部落史の前史をなす中世賤民制は、「散所」を中心に語られることが定説となった。」と述べるとともに、「鎌倉中末期になると、各非人集団は、他の座的集合と同じく、諸権利の独占化を図る。居住権、乞場の独占権、死人牛馬処理を含む清掃権、芸能の興行権など。」と新たな視点として「非人」という概念を提起している。

大山恭平は以下のように述べている²²。「しかし中世的被差別身分の成立をきわだたせるものは古代の奴隷制ではなくして、中世特有のケガレの観念による凡下・百姓身分へのある種の選別であったとせねばならぬ。」「平安時代から鎌倉時代へかけての京都・奈良の非人問題の背景には興福寺と延暦寺とが大きく影響している。」「これら非人の集団は長吏によって統率され、座的な編成を示していた。」「不浄なる穢多（河原者）と不浄ならざる散所者（声聞師）とが登場する。」

さらに1981年に発表された脇田晴子による「日本中世都市論」²³では、初期の論調を修正した新たな見解として「中世初期の散所雑色・召次が舍人などと同じく、また寄人・神人とも同じ階層であり、田堵でもあり、何ら卑賤視と関係がないことを論じた。しかし、後期の散所と連関していると考えていたため、初期の散所の階層分化、上層の上昇転化による卑賤視の将来を考えたのである。ところが、初期からの非人・河原者の存在、後期の散所法師のあり方から、後期に散所といわれるものは散所非人すなわち非人の一形態であって、初期の散所雑色・召次・神人などとは関係のないことを論証するに至った。したがって、非人・河原者・供御人・散所雑色・作手などが同一視できず、これらを非農耕民として一括して、農耕民と対置できないことは、後者には、農耕民も非農耕民も、未分離のものも存在し、かれらが奉仕と特権のための組織として結ぶ『座』から排除されたところに前者の存在があることによって明らかであろう。」

黒田俊雄はその論の中で、²⁴「中世の非人についての研究は、いわゆる部落史における他の時代の研究に比べても、また、中世史の研究全般のなかでも、いま、特別な状況にある。「非人」をどう理解するかが中世社会の全体像の骨組みを決める要点の一つとして論じられ、非人の身分規定が中世の国家権力の性格や身分制の最大の焦点とみなされ、非人の生活姿態やそれをめぐる心性や感覚が民衆生活史や社会史を開拓する手がかりとして、歴史学会でも大きな注目を集めている。」「奈良坂の非人や声聞師などの集団における内部の諸身分も同様で、要するにそれらには村落共同体とは異質だが、一種の共同組織としての共通性がみられるからである。」と述べ、「散所を中心とした賤民社会の論議が非人という継続的な論議として行われるべきもの。」として考察している。



検非違使の図

『法人上人絵伝』(知恩院蔵)第33巻より

法然の弟子安楽坊が処刑される場面。

下図左には検非違使が、僧の後ろには非人が控えている。

異型の王権：網野善彦：平凡社

網野善彦も²⁵「賤視との関連で散所が問題になるとすればその焦点は、散所の非人に合わされなくてはならないことも、ほぼ共通の認識になってきていると思う。」と結論的に展開している。

③ 「散所」論の発展と「非人」という概念

丹生谷哲一はその著書「検非違使²⁶」の中でそれまでの研究者の論証を広範囲に亘って整理している。中でも、網野善彦が、中世前期における「散所」は卑賤視を伴っていなかったが、後期、卑賤視されたのはその非農業的側面が原因したと論じたことを評価し、中世前期の「散所」と後期の「散所」の連続性を後になって否定した脇田晴子に疑問を投げかけている。脇田晴子は、その初期の論調で、「散所」の非農業的側面を指摘し、それが卑賤視を招いたとしていたが、後に自らを訂正し、初期の「散所」の非農業的側面が卑賤視を招いたとする論拠となった初期の「散所」と後期の「散所」の継続性自体を否定している²⁷。

さらに、丹生谷哲一は、古代と中世における卑賤観の大きな違いとして穢れ観の違いを挙げている。「古代では穢れは主として、国家的犯罪や共同体の秩序・禁忌を破ることで、病としては伝染性の疫病を考えられていた。ところが、中世においてはライ病、不具者、乞食などが穢れの最たるものとして忌まれ、それぞれが前世の悪業による報いとして受け止められていた。すなわち、中世非人の中核であった、ライ病、不具者、乞食などは罪の穢れと病の穢れとの二重の穢れを背負っていた。」としている。それ故に丹生谷哲一は「中世の非人身分を非農業的側面や特定の凡外百姓身分に結びつけるのは難しいのではないか。」と推論している。「中世の説教節や謡曲には、高貴な身分からのライ病、盲目、乞食への転落が繰り返し与えられるテーマとしてあるからでもある。」とも説明している。

「散所非人」に関しては中世前期と後期のそれについて以下のように言及している。前期に関して、「例えば11世紀の文書で『醍醐雑事記』巻14にみえる以下の条では次のようにある。『検非違使序下文一通二枚 餌取付寺家事 承暦4年(1080)6月14日。』すなわち11世紀に既に餌取が「散所」と共に寺院に付属している。この餌取は屠者や河原者＝キヨメと考えられ、当時掃除や庭掃きに従事していた階層が既に存在し、卑賤観を持たれていなかったとは考えにくい。」さらに「散所は最初から、『隨身』、『召次』、『舍人』、『神人』など卑賤視を伴わないものと『掃除法師』など卑賤視を伴う者とが併存していた。」と考えている。そして「後者の『散所』は『散所隨身』や『散所召次』などの用法に準じて、『散所非人(法師)』と捉えるべき。」としている。「これらは本来最下層の職掌人として公的に権門に寄与されたもの。」で、「非人」の組織化が「散所」を生んだとする黒田俊雄の論を支持し、「ライ病や不具者といった社会的転落者とは異なる。」と述べている。

丹生谷哲一は「散所」の分類を大きく二つの系統、すなわち、「ライ病や不具、乞食などの転落者の系統。」と今ひとつは、「『清め』や『庭掃き』など広義の『非人』の系統。」としている。丹生谷哲一はそれまでのさまざまな論考を集大成したと考えられるので、その論考に対し、さらに、その内容の検討を試みる。

『検非違使』をより、詳細に検討する。第1章では「検非違使とキヨメ」として掃除を行っていた職能と検非違使との関係に関して述べている。検非違使とは平安時代に設置された「令外の官」で軍事・警察のことを司った。中世における穢れの語の意味するところは広く、「あるべき秩序に反しているとみなされたもの」を指すと言ってもいいが、とりわけそれが、「清めの非人」と呼ばれた中世の被差別民の形成や中世天皇制と深く関わっていたという点で、検非違使を通して注目している理由としている。「検非違使制は天皇と非人＝キヨメという、中世身分制における両極を媒体するかなめの役割を担っていたといっても過言ではない。」ともしている。史料としては11世紀から14世紀半ばにかけての掃除や庭掃きに関して検非違使に命じている事例を挙げている例が多い。すなわち「平安中期から中世にかけて、検非違使はまさに国家の掃除担当奉行であった。これは中世の触穢思想と密接な関係があったと思われる。例えば康和5年8月12日（1103）の、高陽院御所の装束始めに召集された人々の注文では庭掃きや人夫の大部分が掃除役に従ったとあり、掃除奉行は検非違使であった。これらはまさしく寺院の『散所掃除法師』と考えられ、検非違使と『散所』は掃除＝キヨメを介して関係性があった。」と考えている。「『掃除散所』や『庭掃き』、『清目』などの身分はもともと『夫』的労働者が直ちに『掃除身分』であったわけではなく新たな編成があった。」と考えている。この変遷を追うことは困難であるが、清目や庭掃きの長吏的支配が成立していた可能性を示唆している。

穢と検非違使との関連については、以下のように検討されている。つまり、「中世賤民身分の形成に触穢思想が深刻な役割を果たしたこと、そしてその端緒が『延喜式』に見られる。」と紹介している。その中で「最も穢を忌避すべきところとして神社と内裏、すなわち神と天皇が穢れを忌避すべきところ。」として位置づけられている。いくつかの例では「死人が出そうな時は息絶える前に屋外に移せば、その場所は穢から免れられること、公的な場所に絶対穢を及ぼしてはならないこと、死体片づけに従う『清目』身分の存在。」などが挙げられている。触穢思想と清目との関係、非人施行、などについても事例をあげて述べている。「中世賤民制がケガレ＝キヨメの構造によって特質づけられるとすれば、その中核に検非違使が存在したことは疑いない、さらにその賤民制の展開に検非違使がある一定以上の役割を果たした。」とみている。

第2章では「非人施行と公武政権」について言及し、非人施行や非人支配につ

いてまとめている。「非人施行が、本来、統治権的支配を象徴するものとして天皇公権に属するものであったことと不可分として、また、まさにかかる存在として、検非違使は施行ということを通じて無縁非人を統括する機能を果たしていたといえることができる。」としている。

「非人施行と武家政権という項目では奈良坂非人と清水坂非人の抗争そのものは、奇しくも鎌倉政権がはじめて畿内の非人施行に関与した建保ごろに発生しているが、それが、寛元年間に六波羅府における訴陳として展開してくるのは偶然ではなく、まさにこの時期、幕府が公武にわたる公的検断権の掌握者として登場したことを意味している。」とある。なぜ、丹生谷哲一の論の中で非人施行について述べられている項目に注目しているかという点と、「特定の『河原者』は、一方で『非人』の長吏として施行などに関わっているから。」である。

第3章では「中世前期における非人」として「非人」身分の形成過程と社会的地位、散所非人についての整理を行っている。「森末義彰などの研究を始めとして初期の『非人』に関する研究では、『散所』と『河原者』が考えられていた、」とし、「中世的被差別民の基本的なあり方を『非人』＝キヨメ。」として捉えている。「いわゆるライ病や不具による発生としての『非人』とまた、いわゆる宿非人とは系統を異にする最下級の職掌人として権門に付与されたもので、中世後期の『散所』まで直結する『非人』のもう一つの類型もあった。」としている。

後段の第4章では「散所非人」について触れ、脇田晴子の「散所非人」論も含めてそれまでの論争を鳥瞰して論じている。また、穴太散所など石垣技術等に関する資料も提示している。丹生谷哲一は脇田晴子の中世後期における「散所」を「非人」と考察したことに対しては敬意を表しているが、「前期から後期への変化を説く、網野善彦の論を尊重したい。」とする。「中世における『非人』が発生的にも、きわめて多様な存在の包称であったことは疑いない。」としている。

第5章では「修正会と検非違使」というテーマで呪術や猿楽などについて述べている。修正会という一つの国家的儀礼を通して、その中における追難儀礼と後戸猿楽の意味、ツブテや「非人」による儀礼空間への狼藉、侵入の問題、後戸の芸能民の社会的地位、後戸空間と獄舎の同質性等々、そしてそれらとのかかわりにおいて、後戸官人として検非違使の果たした役割について考察している。

最終章の第6章では「室町幕府の下級官人」として公人を中心にまとめている。但し²⁸、「河原者」の跡目が記されており、その地位の権利化していたことなどから「『河原者』は幕府機構の末端に編成されていたことが推測される。」とある。

近年に新たに発表された論として細川涼一による論考『中世の身分制と非人²⁹』がある。この中で氏は、それまでの研究史を概観しつつ、「中世非人という概念が賤民社会をどのように包括できるか。」という疑問を呈している。また次の

ようにも述べている。「・・・以上の事例から。中世後期の非人宿の住民は、長吏とその配下の奉行クラスの集団を中心とし、一般の宿者を含む座的な権利組織としての惣衆と、惣結合の成員たることから、排除され、宿非人が獲得した権利関係からの阻害＝離脱を余儀なくされた、らい者を中心とする乞食非人集団とに分化を遂げる方向で再編されていったものと思われるのである。以上のように私は、すべてのえた・かわたの成立を非人宿の分化に求めるわけではないが、少なくともそのようにとらえられる事例もあるのではないかと推測した。³⁰⁾

④造園職能に携わった階層に関するまとめ

森末義彰や林屋辰三郎の解釈によると「河原者」は既に律令制の時代に従属或いは隷属している機関が存在していたとする大前提にたっている。果たしてそうであったか。中世前中期では卑賤視されていた対象はむしろ「散所」という記述が多出する。この「散所」については、さまざまな形態論の中で、特にその初期では隷属していたか否かが現在でも論争になっている。「散所」や「河原者」はいずれも不毛の地に居住し、課役を担わない代わりに労力等を権門に勤仕していた。その階級的な差異と発展段階に関する検証をすることなく中世のこのような階層に関する論究は不可能ではないかと思われる。

森末義彰は社寺の「散所」は長い間、諸役を免除される引き換えに掃除や清めの仕事に従事していた例が多く見られ、一概には農民と同じ存在になっていたとはいえないとしている。さらに、本論の後段で詳述している北野社の「西京散所」に関しては北野社の経堂前に仮屋を打って毎年10月にこの経堂で千部経或いは万部経会を行っており、このために参詣するものが多かったのであるが、その見物の群集を目的として仮屋が立てられ興行を行っていたので、北野社領の清掃等は臨時的なものであったとしている。しかし、後述するように、北野社領の清掃に関しては池の清掃、道の清掃、井戸の清め等々史料中に頻出し、日常的に「散所」が清掃、つまり、清めに関わっていたことが論証しえる。

森末義彰の説明ではさまざまな権門勢家に従属する「散所」の形が論じられているが、その従属性或いは隷属性そして自立性の差異に関する言及は殆どない。「散所」論を展開するにあたってはその支配者との関係を調べ、技術力が人身的隷属性の有無とどのようにかかわってきたかという検証なしには職能者としての自立性を云々することは難しいと思われる。森末義彰の詳細な論述には敬意を表するが、そういった観点からの検証は不十分であった。

さらに「散所」の成立期においては「散所」とは、土地に即したものではなくその身柄即ち人的結合が所領として掌握されたとする森末義彰の考え方は「散所」の成立としては、やや理解しがたい点がある。また、「散所」の発展段階として「掃除散所」などの特殊な目的に特化した形態が定着し、逆に長年の雑役奉仕の結果、

彼らをして、土木的技術者として専門業者化を進め、彼らの重要性を増したとしている。しかし、当時、さらにより特化していた技術者集団としての「河原者」との関係性が明瞭ではなく、「散所」が単に清掃や清めとして低賃金で使役されていた時代と同じ時期に成長、発展し続けた「河原者」との比較が必要である。また、同時期の「散所」の遊芸民としての発展も同時に「河原者」等の遊芸との比較対照が必要と思われる。

中世中後期における、「散所」の没落の原因として応仁の乱を挙げている。応仁の乱を契機として中世の荘園制度を基礎とした社会は徐々に変化し、近世初頭に至っては散所がその庇護を受けていた権門・社寺はその改変の打撃に依って経済的に没落することとなり、「散所」も崩壊せざるを得なかったとしている。しかし果たしてそれだけの理由で「散所」は雲散したのであろうか。筆者にはむしろ権門との固着した関係が「散所」の自立的発展を阻止し、自立的な技術者集団として集団化をすすめていた「河原者」にその技術者、或いは専門業者としての地歩を奪われたことも「散所」の名前が造園土木的職能に関する技術的集団としての捉え方をされなくなっていった大きな原因と思われる。その上で権門の没落が、誘因となり、「散所」が雲散或いは新たな被差別民として固定化していった側面と、一般農民と融合化していった側面の両方があったのではないか。

近世以降の意味合いでの被差別民として固定した身分となった最大の原因としては、天正10年(1573)に始まった太閤秀吉による検地があげられる。

林屋辰三郎のこの説は「散所」を浮浪の民が結合して成立したとする森末義彰の論には異論を唱えるものの、改めて古代国家が保持していた固定した身分差別が中世にも継承されてきたと論考している。また、「散所」と類似した存在として「巷所」を取り上げ、「これは旧平安京などの条坊間の街路が存在したところであって、その後の都市における規模の変化によって道路としての意味を失い、空閑地となり、さらには田地又は宅地化したところを指す。」として、「このような『巷所』に当時の『散所法師』等が居住した。」としている。

しかし、このような古代律令国家の残骸として、「散所」が成立したとするならば、律令国家解体時の組織の変容とその結果が何らかの形で「散所」に影響を与えているはずであるがそれに対する言及はない。また、どちらにせよ「散所」が国家的制度(奴隷制)の残照であるならば、その掌握形態の存続が前提になっているが、後述するように「散所」の被官の重複制などに見られるように領有の形態が不安定で古代国家からの直接的な継承による制度とはとても考えられないことも特徴的である。

丹生谷哲一の論の展開によると「あくまでライ病、不具者、乞食の発生を以って卑賤視が生まれるとし、それが賤民を生じたことになり、その社会的価値体系

の網羅する速度や価値観の形成において日本全国広範囲での中世独自の原因とする。」とあるが、これらは賤民全体の発生の根拠としては弱いように思われる。また、非農業的側面と被賤視との関連もその相関性についての論証がみられない。筆者は上にみられる丹生谷哲一の論の展開には大いに賛同する部分もあるが、職掌人としての位置づけはやはり、最初は穢れを清める掃除や庭掃きや単純な土木的作業人夫としての関わりが長期に亘って継続していく中で、順次庭造りや池堀、道普請などの高次の土木造園的職掌に携わっていったと考える。後に詳述するが、土木的或いは造園的な職能に関して時代を追った変遷を見ていくことにより、むしろ卑賤視された階層の変遷がより正確に把握できると考える。

丹生谷哲一の前掲書、最終章では前述したように「河原者」の跡目が記されており、その地位の権利化していたことなどから「河原者」は幕府機構の末端に編成されていたことが推測されるとある。これについて、筆者は承服しがたい。なぜなら、「河原者」は、もちろん「散所」も、であるが、中世後期では複数の権門に被官している例も見られ、また、北野社の炎上などに際しては複数の河原者集団が死体の処理等をめぐって、長年仕えていたと主張しあい、職を奪い合っている。幕府の末端機構として整理統合化されている状況とはとても言い難い。長年に亘る「散所」に関する議論は丹生谷哲一によってこのように整理して論じられている。しかし、全体的な傾向としては検非違使に象徴されるようにあくまで公的な所轄のシステムを論じていると思われる。「河原者」や「散所」の自発的、内発的な動態をより、明確化していく必要がある。

研究史としては、「散所」に関しては横井清による従来の研究のまとめがある³¹ので脚注を参照されたい。

0-2-2 造園、土木職能について

造園技術に関して述べるときにはそれを包括する技術としてまず、土木技術や土木的職能に関しての考察が必要と考えられる。この章では上を総称して造園土木的職能とすると、主たる論者としては遠藤元男³²や大河直躬³³、三浦圭一³⁴らが挙げられる。

(1) 賤民社会の土木技術史的視点

遠藤元男は大工職の成立時期に関して「建築工匠が大工としてその職場を確保することのできる権利は大工職あるいは大工所とよばれた。当時の大工職の補任状（任命状）や売り渡し文書、あるいは譲り状がいろんな社寺の古文書の中に残っている。しかしこのような権利としての明らかな形式は、中世の最初から存在したものではなく、すでに述べたような、中世前期における王朝的造営制度の衰

退のなかで、徐々につくりあげられていった。その成立の時期は、早い工事場では13世紀後期、遅いところでは15世紀までかかったと考えられる。大工職の成立時期は、大和ではかなり早く13世紀末で、京都ではそれより約1世紀、あるいは、それ以上遅れている。その理由は、すでに見られたように大和では鎌倉前期に社寺の造営で工匠たちの活発な活動がみられたこと、それに対して、京都では造営活動も劣っており、さらに木工寮、修理職の工匠勢力が、衰えたとはいえ、まだ朝廷の権威を背景にかなりの支配力をもっていたためと考えられる。」と述べている。

遠藤元男らが述べているように、大工職の成立は13世紀から15世紀とかなり、広範囲にわたってばらつきがある。職能自体の確立はかなり以前にさかのぼり、それらの職能民をどこが管理していたかが重要な観点となるが、自立的管理が行われたのが、中世末期ということになる。

以下には三浦圭一他による土木技術やその他の技術論を参照してみた。

三浦圭一は「鎌倉時代における開発と勧進」という論文において、泉佐野市の日根野村の絵図史料に言及し、「古作ヲ坂之物ニツキテ」という描写から、「畿内の各地に非人が集住して、非人宿を構成していたが、これら諸宿を統括する宿を本宿といい、石掘り、壁塗り、石組みなどに従事し、土木工事の際の専門技術者として雇用されたり、単純な土木工事の労役にかりだされたりすることもありえた。」としている。

関連する論文としては『室町戦国時代根来寺と和泉熊取りの中家』³⁵などがある。さらに、三浦圭一による土木技術を総括的に研究した論文として³⁶『日本中世賤民史の研究』の中の第3部第2章「技術と信仰」の中で次のように述べている。「中世のような技術の未発達な歴史の中で技術と信仰の関係を具体的にとらえてみると、両者はあい対立する関係ではなく、むしろあい補い合う関係をしめすことが多い。」またその典型的な例として東大寺再建を挙げ、「中央政府は、藏人藤原行隆を造東大寺長官に任命して再建の責任者に据えたが、結局、東大寺再建を完成させたのは、養和元年（1181）8月に、宣旨により造東大寺大勧進職に任命された俊乗房重源であった。醍醐寺の僧であった重源は入宋で学んだ知識、技術を生かし、また、来日した中国の鑄造工、石工などを駆使して、大功を果たした。以来、この大勧進職は栄西や忍性などが任命され、僧侶として、造寺造塔や、土木工事などに活躍した。その実態は聖職者による技術の開発、伝習と技術者集団＝職人層を政治的、社会的に編成する二つの面が考えられる。」とも述べている。

「河原者や坂の者が中世における土木工事の一つの担い手であったことは、正和4年（1315）に作成された九条家領和泉国日根野村絵図に、古作の田地に坂之

物が池を築いて開発に先鞭をつけたと明記されていたことが『九条家文書』より明らか。」としている。さらに技術と呪術の関連性について言及し、井戸や池づくりと呪術の関連性も示唆している。

また、呪術の道具立てとして篠を引くという行為や竹の効用などの呪術的な道具立ての可能性として、「河原者の又四郎が、懷中に『植樹排石択吉凶選月日之書』を持ち、その呪法を習得していた。」という。賤民と技術という課題に対しても言及しており、「他の人夫とは違った扱いを受けている。」としている。また、技術者の集住化に関しては、「小規模ながら、自然的、地理的な条件に規定されて集住化する傾向を持つ。」としている。

他にも、「中世の技術集団」、「技術者の労働編成」、「職人の権力的編成」等に関する記述の中で被差別民の職能形成に関して記述している。

三浦圭一の説は多くの示唆を含んでいる。地域に密着した視点で、土木職能についての考察を行っているが、一方、個々の事柄に関する詳細な検討が必要である。

0-2-3 河原者作庭論について

従来の「河原者」作庭論はややもすると差別されていた側面を社会的背景という視点からの分析というよりも精神性を強調する意味合いに用いられ、正確な意味での差別や清めの職能等の位置づけがなされてこなかった。本論では既存の論文に考察を加え、その特徴と課題を把握しながら従来の「河原者」作庭論の限界について考察を試みた。

(1) 「河原者」と枯山水

伊藤ていじはその著書「枯山水」³⁷⁾の中で、以下のように考察している。

「作庭に携わった河原者の記録における最初のものとして、応永31年(1424)には、禁裏における作庭のために河原者が京内の諸方を走り回り、寺庵や人屋などで秘蔵している庭木を注進している。」「河原者が作った庭園として、竜安寺の方丈前の石庭があり、竜安寺の石庭の作者に関しては、幾つかの説を検討した後、河原者が推論される。その根拠として、石庭の東から二番目の石組みが花崗岩の大なる長石と二つの小なる青石とによって構成されているが、この長石の背後に二人の名前が陰刻されているからである。その一人は明らかに『小太郎』であるが、他の一人は摩滅していて明らかでない。人によっては『清二郎、徳二郎、彦二郎、源二郎、末二郎』などと読まれていて、決定的ではないが、二人が河原者であることは承認できる。なぜなら、この二人の名前の陰刻に関して、江戸時代にだれも記述を行っていないことから、寺にとってまずい人間であったのであ

る。」

以上のように竜安寺の作者を「河原者」と推定し、これらの陰刻が「河原者」のものであることをその根拠としている。

「室町時代において、枯山水のような新形式を生み出すといった創造的な作庭活動をしたのは石立て僧というよりも、むしろ、山水河原者であった。」「山水河原者は平安時代以来の造庭伝書を相伝する資格を持たされていなかったからである。その身分を乗り越えて、作庭界の主役の地位につくことが困難であるほど、彼等の創造する芸術がその深味と独創性とを増大させていったことは十分に創造される。」「枯山水という庭園形式は、この河原者たちによって中世に体现されたものだからである。河原者たちの創造の過程における苦悩と歓喜について知ることなくとも枯山水を歎美することはできるだろう。優れた枯山水はただ存在するだけで人々を感動させるだろう。」とも述べている。

(2) 足利義政による作庭論と「河原者」の研究

① 吉永義信の研究

吉永義信はその論文の中で足利義政を中心とする論考の中で、作庭に関与した人々や事象について善阿弥も含めて詳細に論じている³⁸⁾。この論文は昭和15年のもので、それから数十年経た現在でもその詳細な研究は評価に値する。しかし、吉永義信の論はあくまで足利義政の作庭家としての資質に論の中心を置いている。善阿弥等「河原者」の活躍については史料上の記述に見られる事実関係こそ詳しいが、その時代的背景、なぜ、彼らが「山水河原者」³⁹⁾として社会的地位を得たか、当時の身分制はどのようなであったか、義政と善阿弥の関係以外の権門と「河原者」集団の関係はどうであったか、また、まさしくそのところが大切なのであるが、「河原者」が集団として成長し、そしてなぜその集団の力を背景に善阿弥が輩出されたという視点はこれらの論点から離れている。吉永義信の論を検証しつつ、「河原者」の身分的な地位や社会背景等を論点に加えて、以降に検証を試みていくこととする。

② 他の研究

他に河原者や善阿弥論について言及しているものとしては川嶋将生⁴⁰⁾や芳賀幸四郎⁴¹⁾、進士五十八⁴²⁾の研究等が挙げられる。

③ 「河原者」作庭論のまとめとその課題

「河原者」は造庭の伝書を相伝する資格も持たされず、また、成りあがっていった町衆すらその出自に賤視された階層を含んでいたとすれば、そのような最下層の地位から這い上がる手段の一つが「山水河原者」として、真剣に作庭に取り組むものであったという伊藤ていじの指摘は正しいと思われる。しかし、このよ

うな精神論からだけが「河原者」が作庭に従事したきっかけと、また、その成功への推移の根拠とするだけでは十分な歴史学的な検証とはいえないと思われる。

吉永義信の研究も、その詳細な史料の検証は本稿作成の上で、貴重な先達の研究となった。しかしその視点は支配者階級の頂上を極めた足利義政に対して置かれ、作庭技術者として台頭してきた「河原者」のプランナーとしての、ある意味では義政をも凌駕した作庭家の出現という視点が弱いと考える。伊藤ていじの作庭者「河原者精神論」至上主義的な記述も在る意味では文学的に過ぎると思われるが、両者の考え方を参考として、より昇華させた形で展開を試みた。同様のことは川嶋将生の研究や芳賀幸四郎の研究に関してもいえる。

0-2-4 まとめと課題の抽出

この節では、造園職能に関わった階層が当時の賤民社会と深く結びついていたという視点から、それらの卑賤視された階層がどのように職能民として形成されてきたかについて既往研究をもとに考察してきた。これらの既往研究は、主として社会体制、特に身分的背景、中央権力と社会構成の変転等に視点を置いたものである。近年特に部落史の源流を探るという視点から、中世後期の身分社会や職能民に関する研究の進展がめざましかった。それだけではなく前節でも述べたように中世後期という、下克上の混沌とした社会的背景のもとで、その時期の文化はある意味で日本的な風土を最大限に取り込み完成の域に達したともいえる到達点をも示している。これは、逆説的ではあるけれども、秩序によって統制されている社会では持ち得ない、混沌とした価値観の変容が従来の既成の価値観を崩壊せしめ、文化的な豊饒をもたらすという矛盾的真理を含んでいるということなのかもしれない。賤民社会における造園職能民の形成は上に述べた社会の騒乱と無関係ではない一面が伺われる。

既往の研究は、本論文の視点のように、ある単一的な職能に関して時系列に、或いはテーマごとに詳細に検討されているわけではない。本研究では論証の積み重ねの中で、造園職能という分野の中でどのように職能が身分や階層の上で成り立っていくかを検証した。「河原者」や「散所」といっても、その職能の専門化の度合いは地域や職域、時代によって大きな差が見られる。これは脇田晴子や林屋辰三郎、そしてひいては丹生谷哲一の検討した社会、政治的システムにおける検証とは異なった視点となるものである。

総括的に述べると三浦圭一以外には、おおむね、地域性という視点が上の検証過程において課題となりうる最たる部分という指摘ができる。賤民の意味性、その職能の展開、それらと地域性は切り離されない問題であるにもかかわらず殆どの検証が用語としての概念化に重点をおき、各地におけるその差の検証はこれか

らの課題となっている。その欠落を埋める働きの一つとしては、三浦圭一の土木的職能の地域によるさまざまな検証や遠藤元男等の「番匠」に関わる視点が評価される。本論ではこういった視点での研究的補完を目指すものでもある。

さらに「河原者」作庭論の展開という観点での既往研究では伊藤ていじ、吉永義信等の研究を中心に検討してきた。しかし前段の身分社会に関する詳細な研究史を概観した後は、これらの研究はやはり、精神論、芸術性論が大勢を占めており、その必然的根拠となった社会的背景、身分的背景、技術的背景についての論拠との融合化が必要であると考えられる。それらの観点からの論証をこれから深めていくべき課題と考え、以下の論文で順次それらを解明していくこととする。

注・文献

- ¹ 「職人はもともと（律令制においては）下司職・公文職などの荘園官をさす語として平安末・鎌倉以降、諸職ともいわれて工人、芸能民等を意味する語になっていった、また芸能という言葉も手工業者の技術、宗教民の能力、そして狭義の芸能をさす広い意味をもっていた。」網野善彦（1994）職人と芸能：吉川弘文館、1 ～
- ² 中世では大地＝自然に対して人為的な変更を加えることを「普請」と呼んだ。三鬼清太郎（1987）：日本の社会史：岩波書店、235
- ³ 網野善彦（1980）：日本中世の平民と職人（上）：思想 670、同（下）：思想 6, 7 1、岩波書店、7 2 ～ 9 2
- ⁴ 網野善彦（1988）：日本中世史研究の軌跡：東京大学出版会、7 1
- ⁵ 網野善彦（1978）：無縁・公界・楽、225-253：網野善彦は「アジール」という概念を公権力などの及ばない無縁の場として考えている。例えば、寺社や家、或いは山林などを場合によっては、アジールとなりうるとしている。
- ⁶ 散所：簡単に辞典等にまとめてある概念規定を脚注 6 ～ 9 までに關して、とりあえず示すこととする。中世、社寺などに属して掃除その他の雑務を勤め。また池、掘りまたは築地などの土木作業に服した者。（広辞苑）
- ⁷ 非人：人間でないもの、罪人、遁世の沙門、または窮民、乞食など（広辞苑）
- ⁸ 河原者：中世の賤民、乞食、非人などを卑しめていうもの。（広辞苑）
- ⁹ 声聞師：中世の賤民、元旦の寅の刻に内裏の日華門に参って毘沙門經の文句を誦読して祝儀をなしたもの。（広辞苑）
- ¹⁰ 森末義彰（1941）：中世の社寺と芸術：畝傍書房 225-305
- ¹¹ 森末義彰 上掲、270
- ¹² 林屋辰三郎（1954）：散所論－その発生と展開－古代末期の基本的課題：史林 1276：後に以下に収録（1955）古代国家の解体：東大出版会、285¥315
- ¹³ 林屋辰三郎 前掲 1 2
- ¹⁴ 脇田晴子（1981）：日本中世都市論： 東京大学出版会、2 7
（脇田晴子（1969）：中世商業発達史の研究：御茶ノ水書房にも収録）
- ¹⁵ 林屋辰三郎（1970）：散所－その後の考察：中世の権力と民衆：創元社、168-182
- ¹⁶ 黒田俊雄（1972）：中世の身分制と卑賤概念－研究視覚のための外観的考察－：部落史問題研究 7 1 特別号
- ¹⁷ 脇田晴子（1973）：中世賤民の歴史的 premise：部落問題研究 3 7：部落問題研究所、1 4
- ¹⁸ 横井清（1975）：中世民衆の生活文化：東京大学出版会、231. 237. 238. 244. 255. 335. 336. 355
- ¹⁹ 横井清上掲、中世民衆の生活文化：「散所」研究の動向、337
- ²⁰ 渡辺 広（1977）：未開放部落の形成と展開：吉川弘文館、3 4、3 7、5 7
- ²¹ 脇田晴子（1978）：散所論：部落史の研究 前近代編：部落問題研究所編、7 9
- ²² 大山恭平（1978）：日本中世農村史の研究：岩波書店、391, 405, 406, 411
- ²³ 脇田晴子（1981）：日本中世都市論： 東京大学出版会、2 7
- ²⁴ 黒田俊雄（1982）：中世社会論と非人：部落問題研究藤谷俊雄所長古希記念集：部落問題研究所、2 1、2 4
- ²⁵ 網野善彦（1984）：非人の発生：部落問題研究 7 8：部落問題研究所、1 5
- ²⁶ 丹生谷哲一（1986）：檢非違使：平凡社選書 1 0 2：平凡社
- ²⁷ 前掲 脚注 2 2

- ^{2 8} 丹生谷哲一 前掲 2 6、262
- ^{2 9} 細川涼一（1994）：中世の身分制と非人：日本エディタースクール出版部
- ^{3 0} 前掲 2 9、3 6
- ^{3 1} 横井清（1973）：中世史ハンドブック：近藤出版社、125
- 「散所は主として荘園制の究明と部落史の研究との両側から光があてられてきており、1 1 世紀段階から荘園制の解体期に至るまで存続した荘園領主の領有形態の一つであつて、かつ荘園制社会における賤民層の主要な存在形態として理解されてきたものである。散所が注目されるようになったのは、戦後における部落開放運動の展開に触発されて進んだ部落史研究が、これを河原者、穢多、非人などの諸問題とともに基本的課題の一つに設定し直したことによる。そのような観点から「賤民」的系譜の究明、差別発生の根因の究明をめざしてこの問題に迫ろうとした林屋辰三郎は、森末義彰の研究を批判的に摂取しつつ集中的に論じ、『散所』とは地子物の弁済を免じられた土地＝地域を前提として成立し、その住民（多くは浮浪民に出自を持つ隷属民）が地子免除の特権の代償に雑役を謹仕したものであること、また、当初は土地＝地域を指したが、後には、住民そのものを指すに至ったこと等を主張しつつ、散所の三類型を提唱した。しかし、これに対して、『本所』に対応する意味を持つ家産管理機関として成立したものが地方へ分枝したものとみる黒田俊雄の説、さらには、同じくこれを『本所』すなわち権門貴族の本宅に対する『散所（散在所）』であり『散在所領』であつたとみながら、『散所』が荘園領主経済に属しつつその補完的機能をはたしたことの意義を重視して、中世には非農業的生産と、領主への人身的隷属とが根幹となつて、『第二次的散所』へと転換したのであり、これこそが林屋辰三郎のいう意味での『散所』にはほかならないとする脇田晴子の説が現れている。脇田、林屋の論争の核心は、成立当初から『散所』に卑賤観を蒙る条件を見出しうるとするか否という対立点にある。『散所』発生の意義を論じた丹生谷哲一や語源論に及んだ井上満郎の論文などは、新しい論の展開となっている。」
- ^{3 2} 遠藤元男（1985）：座について：古代中世の職人と釈迦：日本職人史の研究Ⅱ：雄山閣出版
- ^{3 3} 大河直躬（1971）：番匠：ものと人間の文化史：法政大学出版局
- ^{3 4} 三浦圭一（1978）：鎌倉時代における開発と勸進：日本史研究 195, 9
- ^{3 5} 三浦圭一（1981）：室町戦国時代根来寺と和泉熊取りの中家：中世民衆生活史の研究：思文閣出版、355
- ^{3 6} 三浦圭一（1990）：日本中世賤民史の研究：部落問題研究所
- ^{3 7} 伊藤ていじ（1970）：枯山水：淡交社、108
- ^{3 8} 吉永義信（1940）：足利義政と東山文化の研究：東京大学学位論文
- ^{3 9} 山水河原者（せんずいかわらもの）庭者ともいう。中世被差別民である「河原者」のうち、禪宗寺院の枯山水の作庭に従事するようになった者をいう。
- ^{4 0} 川嶋将生（1992）：枯山水と山水河原者：中世京都文化の周縁：思文閣出版、238
- ^{4 1} 芳賀幸四郎（1981）：東山文化の研究(下)：思文閣出版、640-658
- ^{4 2} 進士五十八（1970）：日本庭園河原者造型論：造園雑誌 3 3（4）、1 9-2 7

第 1 章 造園職能民の形成・・・北野社に見られる事例から

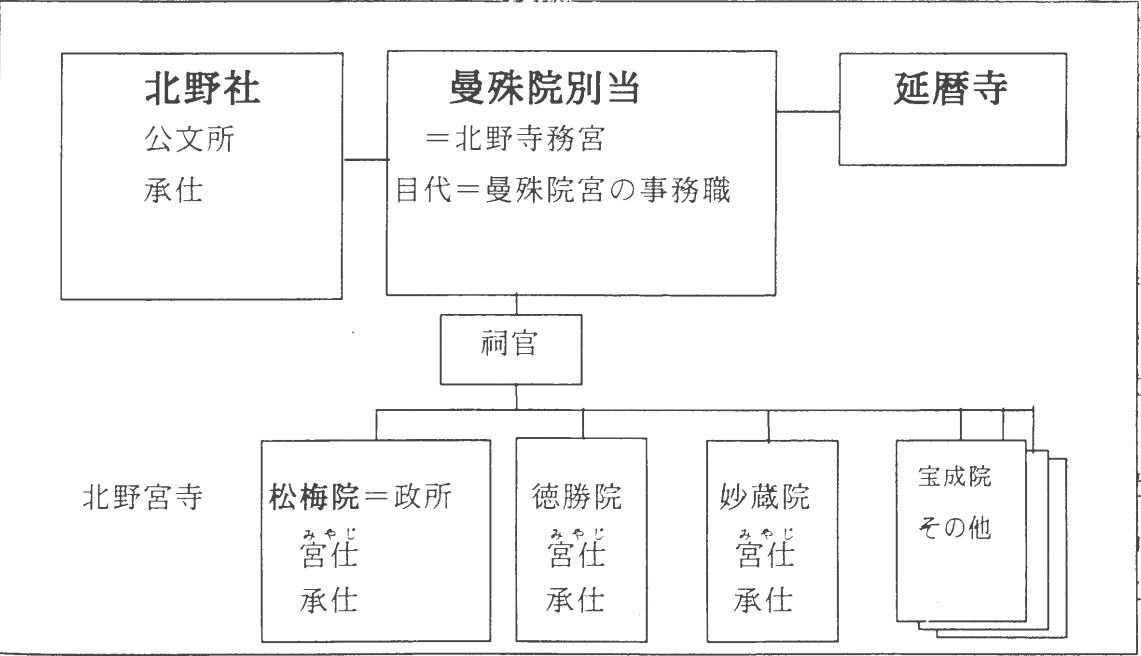
1-1 はじめに

中世後期には「庭者」や、「山水河原者」と呼ばれた「善阿弥」を頂点に庭造りの名手が輩出されている¹。しかし、その背景となった社会や職能については、解明されるべき部分が少なくない。これまでの普請²に関係した造園や土木の職能に関する研究としては「散所」³等の研究⁴や、三浦圭一による中世における被差別民の職能の研究⁵、中世被差別民と造園職能の研究など⁶がある。造園や土木職能の形態や当時の民衆社会に関する分析は、差別されながらも造園や土木に大きな足跡を残した人々の歴史を知る上でその意義は大きい。造園や土木の職能に携わった事例は様々な史料に散見されるが、本章では北野社を中心に分析を試みた。一つの権門について詳しく分析することは、その職能の形態や、組織、身分、賃金、当時の生活等について、つながりのある一つの体系として把握し、それによる検証を試みる事が可能である。以下にその詳細を示す。

1-2 北野社の成立と社会的背景

北野社は京都市上京区に所在する。祭神は菅原道真で、天曆元年（947）に北野に神殿が造立された。天皇家や藤原氏にも尊崇され、とくに足利氏の信仰が篤かった。社領の一つの西京は、神人⁷、「散所」、在家⁸等の多くの領民が居住した地域である。西京の麴座は、課役停止の特権を持ち、麴座を保護されていた⁹。

図 1-1 北野社の組織図（1999年調査資料）を基に作成した図（筆者による）



北野社は寛弘元年（1004）に北野別当が補せられたのを初めとし後、北野寺務宮として曼殊院門跡の称号が使われた。曼殊院の下に祠官があり、政所の松梅院の他、徳勝院、妙蔵院等が中心となった。北野社には公文所、北野宮寺には政所があった。宮仕は祠官下に属して神殿の奉仕等を行った¹⁰。目代は曼殊院宮の事務職として在住勤務し、政所、公文所共に承仕¹¹があった¹²。

本章で引用した北野社関連史料は¹³、中世から近世初頭にかけては松梅院と目代との二系統のものである¹⁴。『北野社家日記』は前半では松梅院の禅豫、後半では禅昌の記述が中心をなしている¹⁵。その内容から、当時の北野社における造営等の内容や人の出入りが把握できる。他の史料としては曼殊院の事務方の目代による『北野天満宮史料 目代日記』、『同目代記録』、そして『同古記録』、『同古文書』等、15～16 世紀末までの記録を参照した。これらから、末端に位置しながら作業を行っていた人々の出入りや出納などの詳しい記述がみられ、当時の普請等の貴重な史料が得られた。なぜ、このような末端の作業を担う人々に関する記述が詳細になされているかということ、おそらく当時の北野社家内での勢力争いが背景にあったと考えられる。将軍に、より密接につながる手段としての樹木の献呈や労働力の提供が、当時の賃料などとともに詳細に記され、現代の我々に歴史的価値のある史料を提供してくれている。

室町幕府は 15 世紀には義満から順次将軍職が継承され、永享元年（1429）には義教が継いでいる。義教は御所の造営を行い、北野社からも労働力や植栽が調達されている。北野社は室町時代最も隆盛であり¹⁶、各将軍が頻繁に参詣したほどであった。幕府や朝廷が諸種の造営を行う際には、造園土木の分野の関連においても、人夫や資材の調達等密接な関係を結んでいた。応仁の乱という戦乱の世を経て、天正 13 年（1585）には秀吉が関白になる。北野社は社頭の炎上などを経ながらも、社の造営や社領管理などは継続的に行われていた。

1-3 造園土木職能の記述に関して

北野社関連史料にみられる造園土木職能の形態を以下に分析するが、狭義に限らず、掃除や庭ばきなどの清めの職能等も含んでいる。中世においては卑賤視された階層が清めという、道路の清掃や死体の処理等の社会的に穢^{けがれ}と見なされる職務につきながら、同時に造園土木に関連した職能に携わった。これらは不可分であった。

以下に北野社の人と職能に関する、分類と体系化を試みた。彼らは掃除などの清め¹⁷の作業や末端の上木的労働などを行い、且つ植栽等も扱いながら知識も深めていった。

1-3-1 北野社関連史料にみられる清めの職能

(1) 掃除

北野社関連史料の初期には、『古記録』（174 頁、『古記録』その他の史料では日付による特定ができないものは以下も同様にページ数で示す。）の応永 4 年（1397）に「同御所（足利義満）如先々為御見物御車於可被立哉否事、以参上伺申入之处、如先々可有御成之由直被仰下了、仍先々在所平松下きり芝御掃除、以西京散所法師沙汰之、每事如先々」とあり、将軍の北野社祭礼に際して、その通り道を掃除することが、恒常化しており、平松下の切り芝掃除などを西京の散所法師が行ったものである。

掃除などを中心としたいわゆる穢れに触る職能としての清めに関しては、主として「散所」や「河原者」などの被差別民が使役されていた¹⁸。しかし『古記録』（248～249 頁）の康正 3 年（1457）には、義政参詣の際の掃除に関して各階層に申し付けているのが興味深い。まず、神前の掃除は「神前御掃除之事、小預成尋法師并召仰両公人一社之宮仕尽令参勤、両日 神前之御棚以下之掃除申訖」とあり宮仕が勤めている。次に回廊に関しては「大床東西之透廊廻廊掃除主典¹⁹へ申付之事」と主典が、そして「社中惣御掃除西京神人へ申付事」、「社中御掃除事外大儀之間、西京神人等申付、至于当日連日社中之至御掃除訖、余神人等粉骨之間、酒直三百疋渡之」とよく働いた西京神人に褒美を取らせている。「毎年御社参之時者、為西京惣普請可致其沙汰者也、仍自当坊出普請奉行」ともあり、ここでも毎年の恒例として将軍の社参に際しては、当坊が普請奉行となって西京に命令していると述べている。また、「自馬場西致于経堂前、御成道御掃除之事、西京散所者申付」、「自経堂之南木戸口至于一条西、御成路掃除之事、取初一日自坊中河原者廿人申付、雖致其沙汰候」と、「散所者」と「河原者」が道掃除を申し付けられている。このように神前から道掃除まで、上位からの階層ごとに振り分けられているのが興味深い。また、『社家日記 1』の長禄 2 年（1458）10 月 3 日の条には「社辺其外経王如先々御掃除以下之事、以西京散所者被仰付之訖」とあり、社辺、その他の経王などの掃除等を「散所」に申し付けている。神人なども使われてはいるが、以下の論で考証するように、主として掃除などは清めの職能として「散所」などの被差別民が担当していた。

『目代日記』（490 頁）の大永 6 年（1526）の条によると「一七日、西京のさん所者めし上御さうちいつものことくきよはきさせ候、しはをくたり経堂在のまへまでしはのちりをはかせ候」とあり、16 世紀前半でもやはり「散所」に例年のように清掃き（清めの掃除）をさせている。このような穢れに触り、清めるという職能は、付帯的に道路や架橋、土工事などの普請やひいては、さまざまな関連する技術を高める契機となったのではないか。

（２）死体処理、穢れの職掌

『目代日記』（579 頁）によると延徳 2 年（1490）の条に、「以上卅一人にて候へ共、此内ニ兩人ノき候間、のこりて廿九人貳貫文九百文也、これハ沙汰せうし(承仕)より阿（河）わら物方へ下行。」とあり、社頭の焼け跡の死体処理を「河原者」にさせている。死体の清掃代としては、最初 3 1 人であったものが二人退いて、一人頭、百文の支払いを行っている。また、『社家日記 3』によると延徳 3 年（1491）11 月 28 日には次のように記されている。「今朝馬血取之、河原者沙汰也」すなわち「河原者」が馬の血を採ってこれを処置している。当時、馬や牛の血を取って、病気の治療に使われていた。しかし、鶴岡事書日記の応永 2 年 5 月 9 日（1395）の条にも「次に宮中禁法随一の処として、馬血を取る事しかるべからざるの由申し遣わし了んぬ。執行答あり。堅く申し付くべき由畢んぬ。」とあるように、一般の者が境内などで馬の血を取る事は厳禁されていた²⁰。「河原者」は、触穢として一般に禁じられていた死体や血に接触するというこのような作業を請け負って、その処置を行っていた。

他の節で詳述するが²¹、『社家日記 2』の延徳 2 年 4 月 13 日の条によると、「河原者」赤が社頭炎上の際の焼灰や死体等の処理を行う奉公について、代々自分達が仕事として行っていたのに、他所の「河原者」を雇い入れたとして自分達を使うようにと訴えている。同日には「代物一人十疋宛下行也、河原者取捨也」と「河原者」にそれらの死体の処理に対して一人当たり十疋与えたとしている。

（３）井戸、池の清めに関連して

井替として井戸の手水を替える作業は、北野社関連史料においては『古記録』（259 頁）の文安 2 年（1445）頃からみえる。他には『目代日記』の長享 2 年（1488）の条（14 頁）や、延徳 2 年の条（48 頁）などがある。『目代日記』（66 頁）によると延徳 2 年には、能椿より「散所」に申し付け、井戸を清めている。井替えは北野社関連史料に多出する²²。『目代日記』（133 頁）明応 8 年（1499）の条では毎年西京散所に料足十疋を出しており、恒常的でもあった。他に、池替えに関する記述をみる。『社家日記 4』の永正 2 年（1505）7 月 4 日の条によると、「御手水之池爲散所者役替之、續松・縄等出之」とあるように散所者が役を請け、その任にあたった。また『目代日記』（501 頁）の天文 9 年（1540）の条に「同日、八嶋屋之池此方之役にてさん所ニ申付かへさせ候、目代より代物十疋遣候」と「散所」に申し付けている。

1-3-2 造園土木職能に関して

（１）井戸の修理、土木作業、築地、垣

井戸に関しては、『社家日記 2』延徳 3 年（1491）2 月 17 日の条に「今日南東井石抜たる所、河原者二人来而積直也」とあり、井筒の石積みの修理は河原者が行っている。また、『社家日記 4』の明応 2 年（1493）3 月 15 日の条では、鬘の井戸を「河原者」が直している。井戸の修理等には「河原者」がこれに従事することが多かった²³。北野社でも井替えは「散所」に申し付け、修理等の技術を必要とする場合には「河原者」に申し付けていた模様である²⁴。「河原者」の技術の特殊性が伺われる。

また、將軍義晴の参詣に備えて、以下のような様々な準備を行っている。『目代日記』（486～487 頁）の大永 6 年（1526）の条には「二条より大すちかいを西京くちまての道并大宮とりの川をはしを御かけ可有由申候、・・・又あか土をはる所もあり」、「同さん所の物共罷出候、ふしんさせ候、松光院ヨリこやの南御門のきわまて石はしより南ハ松光院ヨリさせられ候、石はしよりの木や南まてしはの間ニくほへ候所ニ土をゝかせ候也、もんこ・かなつきは奉行より御出候」と「散所」等に道路の整備や架橋、穢物の清掃などを申し付けている。また、土を置かせるとして土盛りをしてもいる。上述の『目代日記』（314 頁）によると永禄 3 年（1560）には將軍義輝より地下人(在家の百姓からなる)に再度堀の採掘を命じている。北野社の普請関係では社内の整備のためのものと、將軍に申し付けられて御所等に徴用されるものと両者が存在することが特徴的である。他に『目代日記』（435 頁）の天正 15 年（1587）9 月 2 1 日の条には「廿一日古築地ヲこほち申候、其時我等も罷出候て可然候はんとの存分ニ候間、罷出候^{みぎ}砌りいなくし

北野社における造園土木的職能の主たる分担

散所 井戸や池の水替え 掃除、清め 穴掘り、築地普請		一般在家（百姓、その他） 単純労働 穴掘り、築地普請	
		河原者 井戸の石積み（呪術的な仕事） 車等を用いた石や樹木の運搬 樹木等の検知 造庭その他	

て我等築地辻迄出候へハ、まさかり持候て出候へと申被来候間、則立帰り持出也、弥五郎もつれ候て、」古つい地の上ニかた木候をほりころはかし候はん間、其分目代心得候へと案内候間、又門つい地こほち候へ、ハころひさうに候間、つかへにこほそき木を四本計ときり候はんとのあんないにて候間、我等申様ハ、先御待候へ、上さまへ得御意を申、其上にてと我等罷越後ニ申し渡処ニ、先度八嶋のさうさく（造作）之時きり候はんハンの御事ニ候を・・・我等徳分之枝此かた木の葉斗寄進仕候而くれよと」などとあり、古くなった築地が崩れそうになっているものに支えるように柄を用いてみたり、また、燃料用にと思われるが、葉の始末について述べられている。さらに、『社家日記 4』（232 頁）の天正 16 年（日不詳）の条には築地普請の際には北山の散所村や等持院、松原、大將軍等の衆が参加したともあり、継続的に築地普請等が行われていたことが理解される。

（2）植栽について

『古記録』（195 頁）の永享 7 年（1435）の条には將軍のために松を数日ばかりで御所まで引いている。御所には義教が園地を敷設しようとしていた²⁵。「彼御松十一月廿四日ヨリ引始テ中御門堀川マテ引テ、廿五日御所ノツイ地のキハマテ引付けテ、廿六日御庭へ引入テ、北野中・諸坊中・諸在家自土蔵分十人・酒屋分五人、自西京三百人、自密乗院百五十人、惣都合六百五十人。」とある。すなわち、かの松を 11 月 24 日より引き始めて、中御門堀川まで引いて、25 日には御所の築地の際まで引いている。26 日には御庭まで引いているが、その際には北野中や諸坊中はもとより、諸在家、酒屋五人、西京三百人、密乗院百五十人などそして惣からも六百五十人にもものぼる多大な人数に夫役を課している。また、「廿四日ハ大菅野ニテ赤飯ニテ御酒在之、廿五日餅ニテ御酒在之、廿六日取育ニテ雨々へ御タルアリ、指縄貳百スチト聞、引縄ハ御所様借申サル、別而酒手被下分、川原物五月方五貫文、五月子衛門三郎二度ニ肆貫文」とある。これは指縄を二百筋や引き縄を御所から借り受けている。後述しているが、北野中や諸坊中、諸在家、酒屋、西京、密乗院そして惣からは 650 人という多大な人数の夫役を課しているにもかかわらず、赤飯や酒、餅などを供してはいるものの、「河原者」のみに多大な賃金を支払っている。

『社家日記 1』の長享 2 年（1488）2 月 21 日の条に、「今日仙洞御跡松、朝倉請取而東山殿江引云々」とあり、仙洞御所跡の松を朝倉が受けとって東山殿へ引いている。第 5 章でも詳述するが、東山殿の造庭には極めて多くの人員、植栽が動員されている。このような事実は、幕府が北野社に対して造庭の際に樹木等を徴発し、樹木や石が車や人力で引かれていることが理解される。『社家日記 2』の延徳 3 年（1491）2 月 28 日の条には「禁裏様当坊梅木所持仕、今度御庭梅八

尺計御木枯候間、一本可致進上由被仰出也、即社頭東方ニ去年香川寄進仕木在之間、当坊庭木於進給之、折節河原者赤云来而広間庭泉式部可然由申間、菟角可為叡慮由申者也、面目至何事如之」とある。朝廷の梅が枯れ、禁裏より松梅院の社内の梅を所望されている。社の東方にある、去年寄進された木を進上しようとしたが、その折に「河原者」の赤が来て、「広間の庭の梅（泉式部と云われている）を」と彼の見解を述べている。松梅院は赤の言い分を日録に記述したほどに尊重している。しかし天皇の叡慮に従うべきとして梅は進上され、当坊の面目がこの上なく立ったと喜んでいる。朝廷と良好な関係を結ぶために、立派な樹木をこのように所望されて献上することは重要なことであつた。それにしても赤は「河原者」でありながら、庭に関する知識と見識を持ち合わせていることがわかる。同時に、どちらの梅が進上されたのか、この文面からは結論づけられないが、松梅院が「河原者」の意見を尊重していることが理解される。この赤は本論で先に述べた社頭炎上に際して意見した「河原者」と同一と考えられ、死体の処理等、穢れの清めとしての仕事に従事しながらも、同時に造庭に関する独自の見識を有していた例を示す一節である。赤が高い見識を有していることが造庭や樹木の検知で伺われるにもかかわらず、死体の処理なども同時に行うという穢れに関わる職掌にも携わっていたことが特徴的である。それと並行して権門の高位の人間とも対等に話をしていたことなど、被賤視されていたとはいえ、現代の感覚による差別感とは違った捉え方が存在していたことを理解しなければならない。3 章でも記述しているが、同様に「山水河原者」とされ、義政に寵愛された善阿弥も施食(施行とも言い、お上による施しを表す)をめぐって争いをおこしており²⁶、この時代における「河原者」の生活の多重性が現れている。

『社家日記 1』の延徳元年（1488）10 月 20 日には「昨日就松本事如此被成奉書也、御庭松事、為被見之被遣河原者候、可被相副案内者候、恐々謹言」とあり、足利義熙が御所を造営するにあたり「河原者」を遣わして北野社の松を見させている。この時点でも「河原者」が松の検分に関して、相応の眼識があつたことが理解される。時代は下るが、苔に関しての記述もあり、『目代日記』（317 頁）の永禄 3 年（1560）の条に「公方様（足利義輝）より松梅院被仰出候て、もりのこけ御はかせ候て、車にて御取被成候也、在所者申候也」とあるように、將軍義輝よりの仰せで森の苔を採取している。採取しているのは、出入りしている「河原者」か、或いは従属している人夫なのかは不明であるが、苔も造庭の大きな要素となった。

（3）伐木、枯木、焼木の処分

北野社は文安 1 年（1444）やその後の延徳 2 年（1490）に麴座の西京神人や

土一揆のために炎上した²⁷。延徳2年（1490）の『社家日記2』の4月8日の条にもあるが、『目代日記』（584頁）の条に「松梅院ヨリ奉行くらもと坊・にいとの兩人、さ候間木以巳大小五十本はかりきり候、さ候間此木ニはん分つゝわけ候て一分御奉行へめされ候、政所との御分ほうしやういんへとられ候也、しかる間木のゑた（枝葉）はニわけ候て」政所との御分和取也、一分松梅院へめされ候、但此用ニたち候ハぬを木ニ三本ほうしやういんヨリ政所との返申され候」とあり、大小50余本の木を伐って、二つに分け、一つは御奉行に召され、政所と分けたものは宝生院へと取られた。また、木の枝も二つに分け政所と松梅院で分けたが、但し、立ちそろわない木を宝生院より、政所へと返されており、伐木や木の枝が慎重に配分されている様子が伺われる。また『目代日記』（603頁）でも大小の梅木なども54本伐っているとある。他に『目代日記』（590頁）に会所の坊主が枯木を伐るなど枯れ木の伐木の記述も多い²⁸。

さらに、北野社の炎上をうけて、社中の焼木の扱いに関して「河原者」を使って検分している。『社家日記2』によると延徳2年（1491）4月26日の条には「社中焼木事、今朝目代与成就并津田令検注之处、悉皆六十八本在之云々、此内松・桜・梅・此外富士松・柏榛（はしばみ）等在之、七本輪蔵前、此外二本、檜木、杉八本大小、小屋前五本大小、法花堂前廿五本、西僧坊口（前）」五本、会所前三本梅・桜、三本富士松、以上六十八本」とあり、焼木について目代や津田と、その種類や本数、場所についての検分している。また、同5月6日、7日と焼木を伐ったり、大きな根を剪定したりもしている。『目代日記』（501頁）の天文9年（1540）の条には「風雨事外ふき候て林の木二三十本ふきをり候て、御門跡さまよりハ勝見・林目代両三人罷出候、御つほねハ松梅院松千世殿の御つほねニ御いり候間、つほねのとの（殿）はら（原）に石原罷出候て木皆々分申候、何も枝ハ双方とも目代給候、枝を本郷盛玄にわらにかへ候てやねふき申候」と、風雨のために樹木が折れて、門跡から、勝見、林と目代の三人が樹木の配分に関与しており、松梅院の御局や、わらに代えて屋根を葺いたりするためなどに細かく分配されていることが記されている。樹木は当時、燃料としてや家屋や築地等の普請の材料として重要なものだったために、その処分をめぐっての記述が多くある。

（4）神木

北野社家日記関連史料には随所に神木に関する記述がある。『古文書』（60頁）、明応2年（1493）7月6日の条では、「今度私事、或者剪執神木、或成博奕之宿、或御祈祷御教書以下人致送進之仕候、依如此浚怠儀、既雖被処御罪科候、重々依嘆申御免忝存候、但於神木儀者、過料千疋沙汰仕候、向後若有緩怠儀者、忽可預御罪科之状如件」とあるように神木伐採の過料千疋を課すことに関して意

見している。神木は多くは榊のことであるが、北野社における神木は梅（注 国語大辞典 小学館）であり、神霊が宿っていると考えられていた。『古記録』（151頁）明徳3年（1392）7月1日の条に「七月一日、中門参同停止之、忌枝計立之」祝斗申之」と記されているように忌枝を立てるのは、将軍家の香厳院他界による天下触穢によるものである。中世後期においては、樹木や木の枝が神性や呪術性を帯びていたことが理解される。

（5）造庭その他

将軍義教は永享3年（1431）8月に一条室町に新第の造営を始めた²⁹。その後、永享7年から造庭に取りかかっている。前述したように『古記録』（195頁）の永享7年に「彼御松十一月廿四日ヨリ引始テ中御門堀川マテ引テ、・・・。」とあり、大松を数日がかりで新第の庭まで引き入れる様子を描写している。続く記述には「指縄大縄共密乗院殿原達川原ノ物ニ相マシリテ打テ、密乗院上洛、為（田舎）中殿原事江州高嶋ヨリ十五人。」とあり他にも、各地から人夫を徴しているが、指縄も大量に用い、「河原者」に交じって密乗院殿原達が縄を打っている。「河原者」は将軍の造庭にあたって、密乗院のものと一緒になって縄を打つなど重要な位置を占めていることが伺われる。

さらに『同記録』（196頁）の永享8年の条には「松梅院庭石木公方様執（足利義教）進上事、梅三本、此内一本廿一日参、車ハ川原物壱貫文ニテ借テ、一本同廿二日参、同川原物車代壱貫文、石橋一同廿一日参、西京車、一本同廿二日参、西京車、公方様山石引進上、車ハ嵯峨材木間、廿三日ヨリ廿七日マテアリテ、廿七日大石ニ破テ、一両ハ京材木屋イナリ山ト云者アリ、廿六日ヨリ借申ス」とあり、将軍義教に進上するために梅を三本、この内一本は二十一日に持参した。車は「河原者」から一貫文を払って借り、一本は二十二日に持参、同じく「河原者」から車を一貫文で貸借、石橋は二十一日持参、西京の車で運ぶ。さらに一本は二十二日持参これも西京の車で運ぶ。公方様の山石を引き上げるのに車は嵯峨の材木問屋から借りる。二十三日より二十七日までかかって二十七日は大石によって破損して車一両は京の材木屋のイナリというところから借りる。二十六日より借りている」などと記されている。さらに、「廿七日大石ニ内野中ニテ片輪破テ、則川原物車ヲ片輪一日壱貫文宛ニテ借テ、兩日ニ引付テ、彼大石共嵯峨車ノツミタルハ牛六引、人四五十人シテ引付テ、京車ノツミタル大石ハ社家房中諸在家西京都合式百人計シテ、廿七日ハ中御門油小路マテ引テ廿八日鹿苑寺引入テ、同廿八日、彼車ニテ又引カケノ大石ヲツミ参テ、片輪破タルヲ壱貫計入テ車ヲナヲシテ替者也。廿九日ハ境内西京車ニテ引進上、境内西京車一両別三十文宛ノ飼料給テ、普請衆毎日中食在之」とあり、二十七日に大石を引く際、野中で車の片輪が



石引きの図（東京帝室博物館蔵）



石引きの図（東京帝室博物館蔵）
車は河原者や散所が扱っていたが、
河原者には、高額の手賃を支払っていた。

土木技術：東京第一法規出版

破れたので「河原者」の車を片輪一日一貫文で借り、両日引いて、その大石を嵯峨の車では牛六匹で引き、人夫四、五十人で引き、京の車の積んだ大石は社家の房中より在家の百姓が西京から都合貳百人ほど来て引いた。二十七日は中御門の油小路まで引いて、二十八日に鹿苑寺に引き入れた。また、同二十八日にその車でまた引いた大石を積んで参ったが、片輪が破れたので一貫文払って車を修理して替えた。二十九日は境内に西京の車で引いて進上した。境内の西京の車一両には三十文飼料として給付し、普請の衆には毎日食事を与えたとある。以上のように義教の庭に樹木や石を車で運んで進上している様子が伺われる。御所の造庭に対して、北野社が西京の人夫や「河原者」とその車等を調達している。「河原者」の車に対する対価と西京の在家や嵯峨の材木屋等に対する待遇が全く異なる。

相国寺の『蔭涼軒日録』によると、永享8年11月7日にも「河原者」が南禅寺の柏樹を義教の命で移植している。同時代にさまざまな権門を行き来して、「河原者」が造庭に活躍している。垣の造作では『社家日記2』の延徳3年(1491)2月5日の条によると、「自今日一夜松井垣、施主有而作之由其沙汰在之」とあり、松の井垣を作らせている。

第3章でも詳述するが、他の史料には14世紀に「散所」や「非人」³⁰が穴掘りや河原細工として存在した例もある³¹。

1-3-3 造園職能に携わった人々の組織

(1) 賃金

前述した『古記録』(195頁)によると、永享7年(1435)に義教の園地を築くために作業を行い、人夫方には餅や酒などを支給しているが、数日後、川原物五月には五貫文、子の衛門三郎には2度四貫文与えている。井替えの料足が十疋という単位であったのに対して高額な支払いである。卑賤視されていた「河原者」ではあったが、賃金は独自に支払われていた。同様に前述の、『古記録』(196頁)の永享8年の条でも、「松梅院庭石木公方様執進上事、梅三本、此内一本廿一日参、車ハ川原物を貫文ニテ借テ」(後は前述のとおり)とあるように松梅院の庭石や木を義教に進上するにあたって、「河原者」に2日続けて車代を一貫文ずつ支払っている。さらに嵯峨の材木問屋の車を借りた後、その車が破損したので一輛は京の材木屋のイナリ山というところから借り、また、片輪が破損したので。「河原者」に片輪一日一貫文で借りている。京の材木屋の車で引く大石には、坊中の諸在家西京等二百人を使っている。これが破損すると「河原者」にまた、片輪一貫文支払って車を直している。西京には車一両につき三十文の飼料のみを給付し、在家の人夫、西京の車に対しては殆ど賃料の記述はない。高額の

車代が支払われたことについては、「河原者」の自立と技術の特殊性が伺われる。井替えの料足に関しては前述の、『目代日記』（14 頁）によると長享 2 年（1488）には「井かへの料足西京散所へ十足御下行」とあり、西京散所へ十足下行している。『同日記』によると延徳 2 年（1490）に「散所」に百文を 2 度、（4 8 頁、5 2 3 頁）、同 3 年に十足（11 0 2 頁）、永禄 2 年（1559）に百文（2 9 5 頁）、天正 1 2 年（1584）には（酒）一斗を与えている（3 8 9 頁）。『同日記』（5 0 1 頁）の天文 9 年（1540）の条によると「散所」に池替えを申し付け十足与えている。井替えは頻繁に「散所」等に申し付け、その度に料足が支払われている。井を清めるという作業は神社には重要な日常の仕事であったが、料足としては高額ではなかった。十足は百文と等しく、このような労働は一日百文という一つの目安が想定される。

死体の掃除代としては、上述の『目代日記』（5 7 9 頁）によると延徳 2 年（1490）で「河原者」二十九人へ貳貫九百文与えている。『社家日記 2』によると延徳 2 年 4 月 1 3 日にも、「河原者」に死体処理の代金として一人十足与えている。これも一人百文になる。『目代日記』（1 5 7 頁）の明応 9 年には宝成院が枯杉の伐採を促し、代金は五十疋とある（1 6 7 頁）。

『社家日記 1』によると延徳元年 8 月 1 日にも、「河原者」三人に三十疋を遣わしている。「掃コンカウ例の如し」とあるのは八朔（八月一日）の慣わしの挨拶として、金剛の草履を持参したことに対する褒美である。「河原者」にはこの

職能別の賃金表一覧

出典	年月日	職農民	職務	賃料	備考
古記録 p 195	永享7年（1435）	川原物五月	縄で松を引く	五貫文	五万文
古記録 p 195	永享7年（1435）	子の衛門三郎	同	2 度四貫文	
古記録 p 195	永享7年（1435）	人夫など	同	酒や餅など	
古記録 p 196	永享7年（1435）	河原者	石や樹木を引く	一貫文	一万文
			借代		
古記録 p 196	永享7年（1435）	河原者	車片輪の値段	一貫文	一万文
目代日記 p 14	長享2年（1488）	西京散所	井替え	十足	百文
社家日記 1	延徳1年（1489）8 月 1	河原者三人	八朔の挨拶	三人に三十疋	
目代日記 p 48	延徳2年（1490）	西京散所	井替え	百文を二度	
目代日記 p 523	延徳2年（1490）	西京散所	井替え	十足	百文
目代日記 p 102	延徳3年（1491）	西京散所	井替え	十足	百文
社家日記 2	延徳2年（1490）4 月 13 日	河原者	死体処理	一人十足	百文
目代日記 p 157	明応9年（1493）	河原者	死体処理	29 人に貳貫九百文	一人百文
目代日記 p 157	明応9年（1493）	法成院が指示	枯木の伐採	五十疋	
目代日記 p 494	天文 8 年（1539）	番匠大工太郎	棟上	御馬、太刀、 かけ銭五千疋	
目代日記 p 501	天文9年（1540）	西京散所	井替え	十足	
目代日記 p 295	永禄2年（1559）	西京散所	井替え	百文	
目代日記 p 389	天正12年（1584）	西京散所	井替え	酒一斗	

（一貫文は千疋、一疋は十文）

ように挨拶に物を持って行く例がある。「京都の部落史 3 史料古代中世」を参照すると「散所」が正月などに挨拶に出向いている例もあるが、北野社家日記の中には「散所」に関しては見当たらない。

ところで同時代の「大工」、「番匠」への褒美は高額であった。『目代日記』（4 9 4 頁）の天文 8 年（1539）の条に、「御棟上十一月三日午ノ刻也、諸下行之次第、一番ニ御大工太郎左衛門アラコモノ上ニきぬをしきはいをまいらせ候、其後ニ正月十一日之御事初のことくニてうのはしめを仕候て、其間ニ御門跡さまの御馬・太刀被下候、然共御馬・太刀代三貫文にて候へ共、二貫文にてはて、百疋ハ目代給候、棟梁ハ同名二郎左衛門也、棟のつちハ二郎左衛門・源三郎・やりや両三人してうつ也、棟のかけ銭ハ五千疋也、何も餅きぬかゝり申候、進藤新介、造栄奉行ハ栄繁ト申人也」とある。棟上げという特別の場合ではあるが、門跡の馬や太刀、棟梁への支払いや褒美は高額なものであり、高い職能の確立が既に行われていたことを示す。

1-3-4 生活と組織

（1）「河原者」集団の様態と従属の形態

『社家日記 1』の長享 3 年（1489）2 月 2 7 日の条では沙汰承仕である能椿は、朝廷の役人である壬生官務が西京の「散所者」に「堀のことを申し付けた。」と言っている。すなわち、朝廷の職務につく者が「散所」に申し付ける場合や、幕府のために領内の「散所」が労役の奉仕を行う場合もあり、使役の多重性が中世後期の特色を表すともいえよう。死体の掃除代として上述のように延徳 2 年（1490）3 月 2 2 日に、「河原者」に賃金を与えているのも能椿である。「河原者」や「散所」に命令を下している例としてよく出てくる能椿は、『社家日記 2』の延徳 2 年 4 月 1 3 日の条に「沙汰承仕能椿」とあるように、収納責任者として³²北野社の中では直接に掃除や普請等の造園土木の職務に関して、作業等を申し付ける立場にあったと考えられる。同日、「河原者」赤は能椿に言い分を届けており、「河原者」等にとっても直接の交渉口であった。

上述のように川原者五月や子の衛門三郎に賃金を与えているが、当時この五月などは「河原者」の頭目として集団を統轄していたと考えられる。上述した『社家日記 2』の延徳 2 年 4 月 1 3 日の条では北野社の炎上を受けて、従来と別の「河原者」を雇ったところ、「河原者」の赤がやってきて次のように訴えている。「就社頭炎上、社中之焼灰等、為宝成院別之河原者ヲ召寄申付候処、当坊へ来河原者千本赤、沙汰承仕所へ行而申様、社家如之時、奉公者我等代々於社中致奉公候処、別之者ニ被申付候、先規更無此儀候、若無承引者、可追放由堅申間、其旨沙汰承

仕能椿宝成院へ相届。」すなわち、「社頭が炎上した際、社中の焼灰（これは死体の処理や焼木の処理を指している。）に関して、宝成院が別の「河原者」を召し寄せて申し付けたところ、当坊（松梅院）に「河原者」の千本の赤が訪れて、沙汰承仕の所へ行って次のように申した。『社家のこのような時に、奉公している我々は代々、社中の事に仕えているにも関わらず、別の者に（上の仕事を）申し付けることは先般かつて無い事で、もし承引が無ければ他の河原者を追放して我々を雇うべきである。』と固く申し入れたので、その旨を沙汰承仕能椿が宝成院へ申し届けた。」と述べてある。「赤成理運、必必致其沙汰云々、惣而坊中他来之河原者ハ肉食等制禁云々、以此儀思之、道理無豫儀者欵、為後證注之、宝成院召仕河原者ハ一本杉松ト云所之河原者云々」。すなわち、「赤の理屈はとおり、『必ずその命令を致す。』、坊中に他所より来ている河原者は『肉食を制限している。』などと云った。宝成院に召し仕えられた『河原者』は一本杉松というところの者であったと云う。」などとある。

赤は千本に居住する「河原者」の頭目であったと考えられる。彼は宝成院に召し仕えられた一本杉松の「河原者」を追放して、自分達にその仕事をさせるようにと訴えている。この一連の訴えとその処理を検討すると、北野社と代々雇用関係を結んでいた「河原者」の集団の存在や、新しく雇われた一本杉松の「河原者」集団、それぞれの雇用における継続性の存在が伺われる。また、代わりの者が入りうるという不安定性や、他地域から来る「河原者」集団の外部性などが理解される。「河原者」の社家全体としてへの従属の度合いは、それほど強固なものではなかったことが伺われる。しかしそれぞれの寺院にお抱えの「河原者」が存在していたことも類推されるのである。

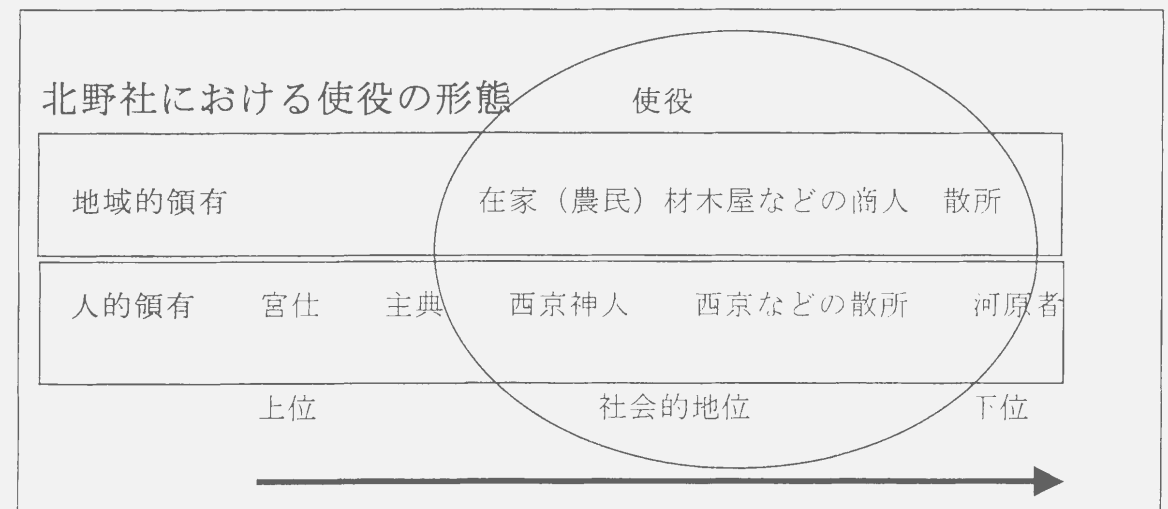
（２）「散所」の従属の形態

また、「散所」の新三郎に関する記述が随所にある。『社家日記 1』の長享2年（1488）10月13日に「彼散所者新三郎、同玄番頭被官云々」とあるように玄番頭という細川氏の家臣に被官している。同様の記述は、『目代日記』（103頁）の延徳3年（1491）の条にも見られる。ところが新三郎は土一揆に加わった罪で、『社家日記2』によると延徳2年3月20日に「西京散所新三郎、今度閑衆³³也、仍死去仕間」ということになる。同様の記述が『目代日記』（40頁）の延徳2年や同日の『目代日記』（581頁）の条にもある。さらに『目代日記』（47頁）の7月の条によると、その家を代金貳百文で売っている。ところが『目代日記』（610頁）の延徳2年の別の条や『同日記』（527頁）には「やすのミとのヨリ人を入、又けん所候間めいわくにて候より候」などの記述があり、細川家臣による二重の闕所が迷惑であるとしている。これらは中世後期において

は、主従関係が錯綜しており、北野社の社頭に居住していても、被官して他の権門と主従関係を結びうることを例証している。すなわち多くの権門との主従関係の重複性を表している³⁴。

（３）譜請や使役の担い手としての在家、神人

最後に、普請や使役の担い手としての「在家」や「神人」も含めて検討を行う。社の炎上をうけた『目代日記』（585頁、587頁）の延徳2年の条では、西京衆に総普請を命じている。この時は、「在家」を中心とした百姓が普請のおりに人夫役として徴されている。『目代日記』（445頁）の天正16年（1588）の条には「俄にはりまの石子加介殿人夫五人やとひ」とある。その他に『目代日記』（186頁）の永正5年（1508）の条には、西京の御旅所の大杉が炎上した際に切り倒したのは「地下人」とあるが、この「地下人」も領地の百姓と見られる。社中の掃除にも割り当てられた「神人」は神社に対して奉仕義務を持っていた³⁵。普請に関わったのは人夫役を勤める「在家」を中心にした百姓、奉仕義務を有した「神人」、「散所」と呼ばれる労働を使役された階層、そして他所からも参入した「河原者」等であった。



1-4 まとめ

清めの職能は社内外の掃除や穢れの処理等を被差別民が主として担っていたものであるが、それらの職掌と造園土木職能の混在が中世後期の特徴としてあげられる。清めの職能に関する2つの集団、すなわち「河原者」と「散所」は存在のあり方が異なり、「河原者」は「散所」に比べると独自の身分集団を構成しており、職能としてもその確立がより進んでいた。賃金体系も主として「河原者」が独自性を持って賃金を確立していた。しかし、彼らの従属関係は重複しており、

一所領が必ずしも単一の領主に帰属していなかったことは中世後期にみられる従属関係の特徴といえる。造園土木職能は多様な形態を内包しており、樹木の剪定、検分、移植、運搬等以外にも道普請、築地普請、石橋、土盛り、垣作りなどの職務についていた。また社領であった西京でも在家や神人、「散所」、「河原者」の混在がみられ、「河原者」は領内外から奉公していた。

以上、北野社関係の史料を分析する中で、造園土木職能に関わる職域の多様さと掃除等に代表される穢れや清めの職能と造園土木職能の結びつきを考証した。北野社は日々、在家を中心とした百姓や神人、所領の「散所」、「河原者」等の輩と深く関わりながら社の造営や維持管理を行っていた。中世後期における造園土木職能は多様な形態を取りつつ、重複する従属性の中でその職能を高めていったわけである。

注・文献

¹ 伊藤ていじ（1970）：枯山水：淡交社、149-162、吉永義信（1941）：山水河原者：庭園と風光 23-6, 9-19

² 中世では大地＝自然に対して人為的な変更を加えることを「普請」と呼んだ。三鬼清太郎（1987）：日本の社会史：岩波書店、235

³ 散所とは中世における貴族や社寺の所領の一種、またはその住民を指し、年貢を免除される代わりに領主に対して雑役などを勤めた。

⁴ 森末義彰（1941）：中世の社寺と芸術：畝傍書房、222-304、

⁵ 三浦圭一（1990）：日本中世賤民史の研究：部落問題研究所、287-316

⁶ 林まゆみ（1995）：中世民衆社会における被差別民と造園職能の発展過程：ランドスケープ研究 Vol. 58No. 5、17-20

⁷ 神社の下級神職者や寄人と呼ばれた人を指す。神社に隸属して雑役を務め、賤民の系譜を引くものと見られている。

⁸ 民家、在郷の家、田舎の家、庶民や賤しい人の家などを指す。

⁹ 京都市（1968）：京都の歴史 3：学芸書林、171

¹⁰ 竹内秀雄（1973）：北野社家日記 6：統群書類従完成会製版部、311

¹¹ 僧侶の身分、役割を示す名称。寺院の日常的な運営上の雑務にあたる他、行事の進行に関わる裏方等を務める。

¹² 三浦周行（1930）：日本史の研究 4 第二輯下：岩波書店、1288

¹³ 『北野社家日記 1 ～ 6 』は『史料纂集』所収本（竹内秀雄校注、1972・1973 年）と統群書類従完成会本を用い、『社家日記 1 ～ 6 』と略称した。また、『北野天満宮古記録』（北野天満宮史料刊行会、1980 年）は『古記録』、『北野天満宮目代日記』（1975 年）は『目代日記』、『北野天満宮目代記録』（1984 年）は『目代記録』、『北野天満宮古文書（1978 年）は『古文書』と略称した。尚、『社家日記』以外は経年順ではないので刊本中の頁数で示す。

¹⁴ 三浦圭一（1993）：中世の地域と社会：思文閣出版、388

¹⁵ 前掲 10）、309

¹⁶ 前掲 9）、169

¹⁷ 丹生谷哲一（1988）：検非違使：平凡社、31-36

¹⁸ 前掲 4）、272-295

¹⁹ 神官以下諸社の職員の一つ。祭儀や庶務に従事した判任官待遇の神職

²⁰ 三浦圭一他（1988）：部落史史料選集：第 1 巻古代中世篇：部落問題研究所、343

²¹ 1-3-4 生活と組織、（1）「河原者」集団の様態と従属の形態の節参照

²² 『目代日記』によると明応 9 年（167 頁）、永禄 2 年（295 頁）、同 3 年（312 頁）、天正 12 年（389 頁）などにも井替えを申し付けている。

²³ 前掲 6）、19

²⁴ 三浦圭一（1982）：技術の社会史第一巻：雄斐閣、208-210

²⁵ 竹内秀雄（1968）：天満宮：吉川弘文館、181-183

²⁶ 『陰涼軒日録』によると寛正 2 年（1461）4 月 18 日善阿弥が施食をめぐる争いで施食の受取手である領取となっている。

²⁷ 前掲 9）、179

²⁸ 他にも『目代日記』によると明応 9 年（157 頁、167 頁）、永禄 2 年（292 頁、301 頁）、永禄 3 年（314 頁）、などに枯れ木を伐っている。

²⁹ 前掲 25)、181-183
³⁰ 寺社に隷属し、捕吏、清めにあたり葬送、施物、癲者等を進退した宿非人がみえる。被賤視された河原者なども呼ばれた。
³¹ 横井清 (1975)：中世民衆の生活文化：東京大学出版会、627
³² 前掲 14)、397
³³ 問衆や關所は中世において罪を犯した場合、土地等を没収されることをいう。
³⁴ 前掲 14)、396-398
³⁵ 前掲 25)、158-160

第 2 章 造園職能民の完成・・・善阿弥論の再検討

2-1 はじめに

中世後期に庭者や「山水河原者」として造園土木等に関わった人々についての研究には以下のものがある。伊藤ていじ¹や森繭²、進士五十八³、重森三玲⁴、外山英策⁵らは中世後期の造園職能に携わった人々について言及した。特に吉永義信は⁶、善阿弥に関する詳細な研究を足利義政の作庭に関連させて行った。しかし、それらの研究における視点には「河原者」の身分や社会背景的な視点が十分に持たれているとはいえない。このように、職能について、当時の時代背景であった卑賤観や身分の問題、賃金等による職能の評価基準からの分析を行った総合的な論証はまだなされていない。本論では社会的な背景も含めて多面的に分析を行い、善阿弥を中心とした造園職能の形成について考察を加えて見ることにした。

善阿弥を重用した足利義政は、室町幕府第 8 代将軍として足利義教の跡目を継いだ。父、義教は、嘉吉元年（1441）に、暗殺される。足利義政はその時まだ 5 歳であった。足利義政はその生活が華美に流れ、政治的には暗愚とまでされている人物ではあるが、文化的側面からすれば類のない優れた理解者であり、自らが文化の創生に関わる芸術家としてその生涯を送った。彼に関わった領域は東山文化と総称されるように、多岐に亘っているが、中でも作庭に賭けた情熱は並はずれたものであった。多様な芸術に親しみ、作庭にも深く耽溺した義政は庭者である善阿弥を擁護し愛情を込めた往来があった。

本論では彼によって愛護された善阿弥とその周辺に焦点を絞った。若年期からの善阿弥のたどった軌跡や、さらに彼とその周りを囲む技能集団の形成に関して、賃金や、集団形成の考察から検証した。この章で考証していこうとすることは、芸術を愛好する権力者によって見出された一人の芸術家の特別な事例ではない。混乱の世の中において、むしろ差別された階層でもあった「河原者」がどのように社会的に認知され、歴史に残るような優れた造庭家を輩出したかという点である。

2-2 善阿弥のたどった道

2-2-1 若年期の善阿弥

室町時代に著された『蔭涼軒日録』⁷は、その日記の性格から、当時の将軍の動静、文学史、禅宗史、経済史等々の宝庫といえる⁸。同日録の永享 11 年（1439）

9月25日の条には「少林院御成。御点心。於双桂庵御齋。真如堂御参詣。雜木可移栽御庭之由伺之。乃虎菊所白也。」とあり、河原者の虎菊が言い出したことであるが、雑木を將軍の庭園に移植すべきかを將軍義教に尋ねている。この時点で虎菊が植栽、移植等に関して、蔭涼軒に対し自分の意見を述べ、またそれらが取り入れられているという作庭者として一定の地位を得ていることが伺われる。同年11月14日の条には「蔭涼軒庭可栽樹之事即伝命虎菊。」と虎菊に庭の植樹のことを命じている。

この初期の『蔭涼軒日録』の一連の記述に出ている「虎菊」は、他の条にも多く見られるが、森蘊⁹が指摘するように、善阿弥の中年期までの俗称であると考えられる。理由としては、善阿弥が、『蔭涼軒日録』に「善阿弥」という阿弥号で出現するのは、彼が亡くなった推定年齢の90歳代後半から考えると¹⁰、70歳半ばであり、それまでにこのように將軍を中心とした造庭や主体的な人物として蔭涼軒の造庭に携わっていたのが、この「虎菊」（「虎」等としても出現）と呼ばれた「河原者」である。善阿弥とこの虎菊が別人物であるとする善阿弥は70歳を過ぎて初めて將軍に重用されたことになり、経緯として不自然である。中年期までの実績あつての重用と考えられるが、その人物として合致しうるのはこの「虎菊」或いは「虎」（『看聞御記』¹¹では帟菊、帟と呼ばれていることが多い）と考えられる。永享11年（1439）の時点で虎菊の推定年齢は50歳を超えている。既に「河原者」の中では、立派な頭領であつたのではないか。蔭涼軒の落成から主体的に庭造りに携わり、中心人物であつた「虎菊」は他の記述ではどのような働きをし、また、他の「河原者」との関係はどのようなものであつたか。

『看聞御記』の永享5年（1433）10月8日の条によると「八日。・・・庭前松、大光明寺超願寺等之松河原者帟召参令見之」とあり、「河原者」の帟が大光明寺、超願寺等の松を見に来ていた。同書永享5年10月19日の条には、「定直参拝献、室町殿へ松欲進之处、庭者帟不参之間延引、定直松為拝見参、給酒廳退出。」とあり、室町殿へ松を進呈する予定であつたが、帟が来なかつたので延ばしている。『看聞御記』では漢字は多くは帟と記述されており、字が違うが¹²、やはり、蔭涼軒日録に出現する虎菊或いは虎と同じ人物と考えられる。

他に、『看聞御記』の永享5年（1433）10月20日の条には以下の通りある。「庭物帟四五人参、大光明寺松笠令結。聞。黒田梅一本公方へ進。於途中枝を折。室町殿以外腹立。庭者三人被籠舎。黒田若党五人奉行ニ付。彼等僻事之間可召捕之由黒田ニ被仰。三人ハ逐電。二人忽切腹云々。嚴密沙汰恐怖之由庭者申。諸方辺土樹共被見。庭者帟菊罷向検知之。宣樹ハ被召。或者進之。境内木未被見。仍早々欲進。」ここで、帟は大光明寺の松笠を4、5人の仲間と共に結んでいる。この仲間は仕事上のもので、帟は彼らの親方的なものであつたといえよう。聞いた

話として文中には挙げられているが、後半の部分は特筆すべき事例である。すなわち黒田氏が梅を一本義教へ進呈しようとしたところ、運ぶ途中で枝を折ってしまった。義教はこの振る舞いに殊の外立腹して、庭者三人を収監し、黒田氏の若黨五人を召し捕らえるように命じたところ、この内の三人は逐電し、二人は切腹した。この嚴命に対して恐怖を訴えているところの庭者は帟（帟菊）、すなわち後の善阿弥ではないか。諸方での庭樹の検知を帟菊が行っていた。進上すべき樹木を三人の「河原者」の庭者が運搬をしていた。重責を担っていたのである。義教はこの永享6年には比叡山の討伐を行っており、その強引な専制化と同時に、庭木一本に対してもこのような嚴罰を処すなど人々に恐怖を与えるに十分であつた。帟菊すなわち善阿弥はこの専制君主に奉仕し、その中で生き延びて技術を磨いていたのである。

また、同10月30日には「庭者虎参。庭前松笠結。室町殿前水作事。」ともある。『看聞御記』にはさらに帟の記述が見られる。永享5年（1433）11月1日の条には以下のとおりある。「帟参。松結。明日室町殿可進之間。大光明寺松召寄五本被進。地蔵殿庭木四本。大通院一本。一本ハ是之庭松進。其替ニ寺松一本庭二植。海石三円鑑和尚被進。秘蔵之石也。被進。地下侍共皆参令普請。」ここでも帟が来て松を結っている。明日、室町殿へ進上するとある。大光明寺も松を召し寄せて五本進上される。地蔵殿の庭木四本、大通院一本、それぞれ進上される。また、一本はこの庭松を進上し、その代わりに寺の松一本を庭に植える。円鑑和尚が秘蔵の石である海石三個進上される。地下侍が皆参って普請に協力しているという大層な働きが記述されている。

同書永享8年（1436）2月21日条にも以下のようにある。「早旦御庭者帟菊参、御庭可拝見之由申、公方依仰参云々、則庭ニ参、可被前水歟、本望之至也、一見廳退出。」すなわち、「帟菊が来て、公方様（將軍義教）よりの命で庭を拝見しに来たと述べ、前水を見た。本望である。一見して退出した。」と述べているように、庭者である帟菊は將軍直接の命により、庭を見に来ており、庭の拝見は將軍の造庭のためのものであつた。將軍と帟菊の直接的な関係が伺われる他、帟菊の造庭に対する將軍の信任も理解され、すでに庭者として相当の地位や評価を得ていたものと考えられる。

このようにその主導的な働きからも、帟、帟菊、虎、虎菊すべて同一人物と考えられる。また、『看聞御記』の嘉吉3年（1443）2月4日の条には「四日。晴。懸木堀ニ遣。賀茂松虎。千本桜。此桜号不言堂。虎子堀。伏見鶏冠本市。各堀ニ罷向。車便宜文書櫃十七合。林泉文庫ニ預渡。法安寺ニ合渡。晚千本桜。賀茂松等参着。松好木也。入夜伏見鶏冠木参着。神妙之木也。」とあり、虎父子が伏見の庭の栽木に従事している。

さらに『看聞御記』の嘉吉3年(1443)2月21日の条には、「近所ニ前栽有沽却之人、可被召歟之由虎申。仍庭田少将定直兩人罷て見之、いたいけなる小庭也。但近日天下物言之時分、可前栽之條無骨也。秋まで延者。可被召之由仰。捧物鬻面々取。」と虎が、近所に前栽の木を売る人がいると告げ、庭田小将と定直に見させている。虎が主導的に庭木の売買にも関わっていることが理解される。この記述は興味深いものがある。中世後期においては、庭木や植木の流通は、近世のように一般化はしていなかったと思われるが、このように、前栽で売却する人が存在して庭木の売買に携わり、それを、「河原者」が情報として仕入れて注進している。少しずつではあるが、樹木等の売買が進展していたように考えられる。しかし多くの庭木は各地で検知されて大勢の人手を使って運ばれていた。さらに同書の嘉吉3年(1443)8月10日からの記述では、庭者の虎が伏見殿に参入して庭の松笠等を結っている。10日、11日、15日にも虎がきて松笠を結っている。虎は松笠を結うなど庭の維持管理にもあたっていた。

前述したようにこの虎は善阿弥の若い時代の呼び名と考えられるが、虎は義教と深い関係を持ち、蔭涼軒にも専属の形で出入りしていたことが理解される。以上のように、虎菊、虎、帛菊、帛すべて同一人物であり、善阿弥の前身として、義教に仕えている。義政の幼少期を経た後¹³、義政の将軍時代(宝徳1元年～、[1449～])に入ってから後、善阿弥の称号を授与されたものと考えられる。嘉吉元年(1441)に義教が暗殺された時、義政は僅か5歳であった。それから、17年の月日を経て、「善阿弥」という同朋衆となった「山水河原者」が日記上に認知されるのである。以下に続いて『蔭涼軒日録』を中心とした善阿弥とその周辺について検証する。

2-2-2 善阿弥の称号と義政の愛護

『蔭涼軒日録』は室町中後期、相国寺鹿苑院蔭涼軒主が記した公用日記である。善阿弥が蔭涼軒の作庭に関わる記事は頻出する。善阿弥の同日録における初出として、長禄2年(1458)2月24日に以下の条が見られる。「蔭涼軒御成、蔭涼庭頭可被栽薬樹之由被仰出也、善阿承尊命而来也。」、26日には「蔭涼軒泉水庭頭籠木被改栽也」、28日には「当軒御庭嘉樹栽培成也、蓋善阿奉之」とあるなど、義政の命で蔭涼軒の庭に薬樹を植え、籠木を作り直し、嘉樹を栽培している。

『蔭涼軒日録』の寛正元年(1460)6月22日の条によると以下の通り記されている。「前就善阿彌違例可煎與薬之由。以春阿彌被仰出也。」すなわち善阿弥の身体具合が悪いので薬を煎じて与える旨を春阿弥を通じて命じられている。この春阿見という人物に関して考察してみる。春阿弥は、将軍の「御成り」や「言」を代弁或いは、伝言したりしている同朋衆¹⁴であった。その他にも同日録同年

(1460)6月23日には「善阿小減之由披露之。」、24日には「善阿彌違例。小減之由披露之。」、25日には「善阿彌小減之由白之。」と事細かく、身体具合が改善していることが述べられている。そして27日には「善阿彌本復。來晦日可致出仕之由披露之。」とあるようにすっかり回復し、来る大晦日には出仕できると述べている。さらに28日にも「善阿病氣平復。今始出仕之由披露之。」とあるように善阿弥の病気が平復し、当日初めて出仕できたと述べられている。

また、同日録寛正4年(1463)6月14日の条によると以下のようにある。「善阿弥有病。仍法眼與姜活湯七服。煎而與之由。以千秋刑部少輔。被仰出。仍命于慎書記遣之。蓋以前病之時。以僧可遣之由被仰出。即今以先規。使千秋并医師法眼命于予。仍以此上命下知之。想以丘壑(たに)經營之妙手。而慈愛彼尤過定分。甚為辱也。」すなわち、「善阿弥が病を得ているので、医師法眼が姜活湯を七服与えている。以前は僧を遣わすように仰せられているので今回も先般と同じようにする。千秋や医師法眼を通して自分に命じられている。」というように善阿弥の病に関して、医師法眼に煎じさせてこの著者季瓊真蕊に与えさせた。大勢の人間が関わって善阿弥の病治療のための役割を果たしている。季瓊真蕊によるとこれらはただ一重に善阿弥が庭づくりの名手であるからであり、彼への慈愛は過分にすぎ、「河原者」という卑賤な身の上のものをここまで手厚い待遇を与えているのは、かたじけないと畏れ多く感じている。善阿弥という作庭技術の高さゆえに特別才能が認められ、それによる義政の彼への寵愛があったにもかかわらず、「河原者」という一般的には低い身分とされている者に与えられた過分の愛護に、禅宗の高僧が感慨を覚えていることが興味深い。

さらに同日録寛正4年(1463)6月15日の条にも「善阿不例之由被仰出。仍毎日遣煎薬之由白之。・・・盆種諸草保養之事。御談餘有之。」とある。すなわち善阿弥が常ならず、具合が悪いので毎日薬を煎じてこれを遣わしているという。6月18日の条には「善阿彌不例。雖得小減未快。・・・以醫師法眼良薬。重可與彼也。煎而可遣之由。以法眼被仰出也。以後直伺之。醫師法眼以人參湯與于善阿彌即煎而遣之。」と医師法眼が善阿弥の治療に奔走していることが理解される。

さらに6月19日の条には「河原善阿彌前日與薬之養性而可出頭之所。」とあり薬のおかげで養生し出頭できたとある。寛正4年12月8日の条にも善阿弥の病とその平癒について述べられている。

これら一連の善阿弥の病と薬の騒動は善阿弥の存在の重要性を表わしていることにほかならないのではあるが、高齢な作庭者である善阿弥の背後に控える技術集団があつてこそその、晩年の彼の活躍ぶりであつたのではないかと推論する。この時代の全体を見ると善阿弥以外にも他の権門でも類似した集団が存在しており¹⁵、個人の才能に特化されたものとは限らない。

蔭涼軒日録の文正1年（1466）1月18日の条には「善阿弥は83歳」とあるから長禄2年頃（1458）はすでに75歳となっている。庭づくりに従事してから、義政の手厚い寵愛と庇護を受けていたのはこのような高齢になってからである。高齢になってからの善阿弥は病にも煩わされたのであるが、最も活躍が記されているのもこの長禄から寛正年間にかけてである。

文正元年（1466）3月16日の『蔭涼軒日録』の条では以下のように述べられている。「天晴、前夕往于睡蓮、見築小岳、善阿所築、其遠近峯礪、尤為奇絶也、対之不飽、忽然而忘帰路也。」。蔭涼軒主は、「善阿弥の築いた小さな丘や池の睡蓮を見てその遠近の峯の様子がすばらしく見飽きない。忽然として帰路を忘れるほどだった。」と記述している。

さらに、文明8年（1476）9月11日には「早旦、被下御使云、昨日御学問所御庭事、被仰下之間、為地取、以御下姿之体有御参云々、・・・善阿弥召置、直接被仰付者也。」とあり、善阿弥が禁裏御学問所の南庭の東傍に前栽を作っている。「散所」をして不浄な「河原者」と代えた『建内記』の事件から¹⁶⁾、30年足らずのことであった。

2-2-3 善阿弥と盆山の流行

義政は花を活ける立花や盆山（盆栽）に興味を持っていた。特に当時、義政や禪宗の僧侶の間での流行は特筆に値する。

『蔭涼軒日録』の寛正2年（1462）4月27日の条によると義政は蔭涼軒に多種類の盆山を預け置いている。

- 一 古銅松皮形盆石上種石穀、
- 二 青磁坪盆紋者牡丹、種芦、
- 三 青磁坪盆無紋、種迎涼草、
- 四 古銅方盆菊銘石種観音草、
- 五 青磁平盆足者鬼面、中有石菖、
- 六 古銅平盆、種石穀、
- 七 青磁平盆、有石菖、
- 八 古銅方盆、種キボウシ、
- 九 青磁小平盆、紋者牡丹、種トクサ、
- 十 古銅盆、種南天竺、
- 十一 青磁坪盆、紋者牡丹、種芦、
- 十二 古銅圓盆、種石穀並シノフ、

以上のように多種類の盆山が預け置かれている。盆自体も古銅や青磁、形も松皮のものから坪盆と呼ばれるもの、方盆、平盆、円盆など。そして紋の有無や石

の上にはさまざまな植物の種が植わっているものが認められる。石穀、芦、涼草、観音草、石菖、ギボウシ、トクサ、ナンテン、シノフなどである。この他にも盆山には様々な形や植物が用いられている。

寛正4年5月10日（1463）の条によると「盆仮山奉懸于御目也。千秋刑部少輔披露之。」とあり、この千秋刑部少輔は、将軍の言などを伝える役割を果たしていたと考えられる。14日にも千秋刑部少輔を以て召し返させられると記述されている。

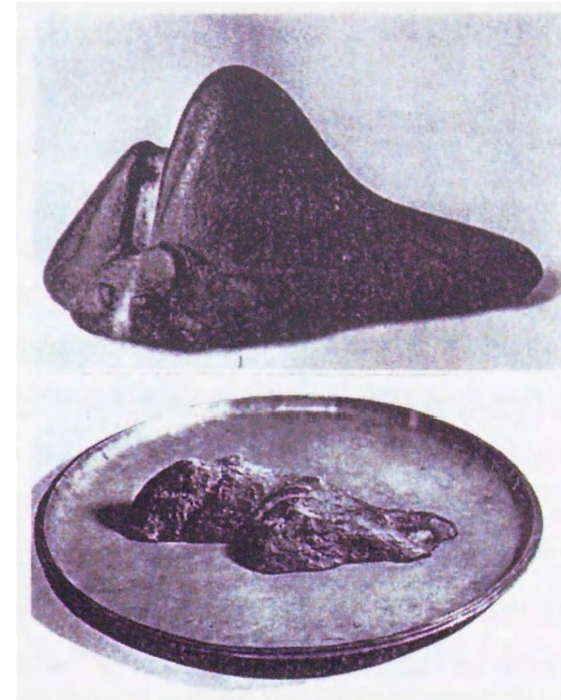
当時の盆山に対する各寺院の傾倒ぶりは以下の文章に述べられている。すなわち『蔭涼軒日録』の寛正4年（1463）5月25日の条によると「叢林中小石諸草、着之養之、悉被召寄、被御覧、尚難溢而不被出之方、以某寺奉行被尋究、若有之則可有御罪科之由、被仰出之由、千秋刑部少輔語予、仍重命于寺家、而請證状也、以嚴命自諸寺院被献諸盆山并石菖諸草也」とあり、将軍の命令にも関わらず自分の寺院にある盆山を差し出そうとしない寺院があることに対して、必ず差し出すようにと厳命している。これほどまでに当時の諸寺院では盆山が流行し、珍重されていた。

この他にも、『蔭涼軒日録』寛正4年5月8日の条に愚老すなわち蔭涼軒の僧侶の所持している盆山の内、気に入ったものをいくつか将軍に召されてこれを光栄としている。

他に、寛正4年（1463）5月27日の条によると、「前廿四日、被預置石菖七箇之内、今晨二箇被召返也、千秋奉之、使者河原次郎五郎也、石菖五箇、被預置也」とあり、盆山を扱うために「河原者」の河原次郎五郎が出入りして、石菖2個を返し、あとの五箇をまた、預かり置かれているとある。

そして善阿弥もこのような盆石の保持に深く関わっている。すなわち寛正4年（1463）5月28日には次のようにある。「依無御出、不参侍也、菊銘石桜欄一本付之、以善阿弥、被預置也」これは善阿弥を用いて菊の銘石の桜欄が預かり置かれていることを意味している。

文正元年（1466）4月18日の条には「天陰欲雨、公方被預置之盆假山、以其保護不怠慢之誠、于南榮所寓之小庭側畔而晨夕対之、其松色山勢、殆如有御廬面目、又小水小波渺而如有万里江山之心、吟玩以慰老慨乎」と記している。仮盆山であるにも関わらず、その様子は松の色といい、山の勢いといい、あたかも山間の庵の相を呈していると述べている。さらに小さな水はあたかも万里を流れるかのようであり、その趣は老僧を慰めるとある。このように盆山であってもそれらから受ける感動は作庭からのものと変わらない表現で歎美されている。ここにも盆山と小庭園、作庭の連動が伺われるのである。そして翌日の同4月19日（1466）の条によると「善阿弥聞自公方所預置之盆山尤奇絶而来見之。即嘆美刻移、彼者



義政の玩賞した「雄の山」と「末の松山」



文阿弥伝書に見る「砂の物」
盆栽文化史：岩佐亮二：八坂書房

築山引水。妙手無此倫。即賞心倍于他乎。愈保重之。鎮護之。」とあるように善阿弥が公方より聞き及んで、蔭涼軒で預かり置いている尤も奇絶といわれる盆山を見にやってきた。歎美して時が過ぎたとある。善阿弥も築山や水を引く庭づくりの名手であるが、その彼も賞賛していった、益々この盆山を大切に預かり鎮護するものとする述べている。

他に善阿弥が盆山に関与した例としては文正 1（1466）年 6 月 6 日の条にもあり、「公方以善阿被求石菖。即献之。」ともある。公方すなわち将軍義政が善阿弥に直接命じて、石菖を求めている。さらに蔭涼軒日録の文正 1 年 6 月 2 1 日(1466)にも以下のようにある。「栽長春樹之小石。以善阿弥并次郎五郎被預置也。」つまり、長春樹を植えた小石を善阿弥ならびに次郎五郎が預かって来ているとある。

盆山及び盆石飾りについて、以下の検討を行った。盆石は室町時代では会所や書院の飾りに用いられている。『君台観左右帳記』は東山時代の秘伝書であるがこれは書院飾りなどについての記述や図が見られる。その中に盆石が挙げられており、鉢石、石鉢とも記されているが、石を用いた鉢飾りについて詳述している¹⁷。形態や寸法は小さくとも枯山水の庭園と盆石とでは石と白砂等を使う手法の類似性がある。蔭涼軒日録の長享 2 年(1488) 3 月 2 7 日の条には以下のようにある。

一尺青山三尺池 池中高聳自然奇
種松愛看秋風暮 移竹欹聴夜雨時
遊蝶尋花無軸畫 吟蛩遶草遊聲詩
閻浮八萬四千境 縮置楚僧盆水涯

ここには、一尺の青山や三尺の池を見、池の中に高く聳える自然に奇があると詠じているように、凝縮された空間の緊張感が訴えられている。また種松を愛でてみたり秋風の暮れる風情を楽しみ、また竹の移ろう様子を夜雨の時に耳を傾けたりしている。以下同様に盆山、盆石という限られた空間の中で自然を凝縮して看取する様子が表されている。盆山の流行は善阿弥を中心とした「河原者」がそれらの維持管理に関わった技術にも負うところが大きく、また、この時代の禅宗の小庭園や枯山水とも深い関連が存在したと推論されるのである。

2-2-4 善阿弥の発展と諸寺院との関係性

『大乘院寺社雑事記』の寛正 2 年（1461） 1 1 月 2 日の条では以下のようにある。「就御庭木事、袖留木并河原者善阿ミ下向云々」、すなわち庭木のことで善阿弥が下向しているとある。また、寛正 2 年（1461） 1 2 月 4 日には以下のように述べられている。「河原善阿ミ来、当院木共検知、柘榴一本柏真一本可進云々、新足二百疋給之、畏入云々、成就院柏真一本可進云々、次并山・内山・釜口三〇寺自余河原者下向成身院使与寛圓兩人相副了」。ここでも善阿弥が大乘院の樹木を検

知し、柘榴や柏真などを進上すべきと進言している。

寛正6年（1465）9月3日に善阿弥は奈良に下向し、大乘院庭園を補修している。大乘院寺社雑事記では「昨日河原善阿ミ下向今日より脇一人参申、二候云々、庭始之、自余一乘院」とある。また、同9月5日にも「一日□今日三人、加善阿、昨日一人、一昨日一人」と善阿弥が作庭に関わっている。その対価として9月12日の条では「河原善阿ミ上洛、千疋給之」と千疋与えている。

『大乘院寺社雑事記』では文明3年（1471）8月4日に、次のようにある。「河原者善阿ミ住屋事、為六方作給之、九内堂之東地事申請之不可有子細旨許可了。」すなわち六方衆は善阿弥に対しては住まいを造り、食事等を与えている。しかしその後、「河原者」が検知をして樹木の調達をすることに対し意義を申し立て、蜂起している¹⁸。

『東大寺法華堂要録』の文明3年（1471）7月の条では「一 去月始ヨリ、エタ善アミ中院ニ庭ヲスル、元興寺楚ヲ引アツメテ立石ニセラル、六萬衆サタナリ」とあるように、月初めよりエタ善阿弥が東大寺中院の作庭に従事している。奈良にも出向していることが伺われ、善阿弥は各地で活躍の場を広げていった。

また、『経覚私要鈔』の文明4年（1472）6月8日には以下のようにある。「伝説云、興福寺中院ニ庭ヲ沙汰トシテ、諸方石トモ引之、風流等モ在云々、今自分無用事□、庭仕河原者善阿弥罷下云々」とあるように、善阿弥は奈良の興福寺や大乘院など室町幕府の信奉篤かった禅宗系以外の寺院にも出向いて造庭を行っている。当時、「山水河原者」が特定の寺院等に専属的に重用されていたことを考えると、善阿弥の知名度はかなり広がっていたと考えられるが、これは奈良にも訪れた将軍に直屬的に用いられていたことと、密接な関係があると考えられる。

2-2-5 善阿弥の没年

没年に関しては、以下のように考えられる。前述したように『蔭涼軒日録』の文正1年（1466）1月18日の条には「年齢八三。老而益健之由被仰出。音阿妙又河原善阿弥益健之由。」と高齢にもかかわらず善阿弥の壮健さを綴っている。また、『等持寺日件』の長享3年（1489）6月5日の条には「善阿年97歳 同甲子於勝定相公而生歳逢寅者也、為山植梅拝石天下第一云爾」とあり、生まれが寅年であると記されているが97歳まで生存したということか。また『大乘院寺社雑事記』の文明14年（1482）10月11日の条では「100余歳で入滅。」とある。これらの記述で一番信憑性があるのは、最もよく出入りしていた『蔭涼軒日録』の文正元年（1466）に83歳というものであろう。従って、没年に関しては、『大乘院寺社雑事記』による文明14年とすると90歳代後半で没したと考えるのが妥当である。

2-3 善阿弥の社会的位置づけと集団

2-3-1 善阿弥と賃金

『蔭涼軒日録』の長祿4年（1460）12月8日の条によると「善阿以御庭之功被下五千疋。其喜報于愚老。仍披露之。」とあり、善阿弥が庭づくりの功績で五千疋報償として与えられている。この五千疋とは当時のお金の価値としてはどのくらいのものであったか。1疋は10文をあらわし、当時職能が確立していたとされる「大工」や「番匠」の日当が100文、単純労働の人夫の賃金が10文がめやすとされていたことから考えると莫大な額である。しかし、これは一門を率いていた長への報酬と考えるべきであろう¹⁹。

その他にも『大乘院寺社雑事記』の寛正2年12月4日（1461）の条にも「河原善阿ミ来。当院木共検知柘榴一本、柏真一本可進云々料足二百疋給之、畏入云々、成就院柏真一本可進云々。」とあるように、特別な報償以外にも日常的な樹木の検知等に対する対価も与えられている。また、『大乘院寺社雑事記』の寛正6年（1465）9月12日の条には、「河原善阿ミ上洛、千疋給之。」とある。

さらに『大乘院寺社雑事記』（尋尊大僧正記 59）の文明3年（1471）7月5日の条には「善阿弥中院庭至昨日了。善阿ミ毎日三十疋宛并引物二千疋。手物十一人毎日一人別二十疋宛、引物惣中五百疋下行云々、八九月比木共可被植之之間、善阿一人ハ可在南之由下知、食事等可下行云々。」とある。善阿弥は、興福寺にも出向いて作庭にあたっている。「惣中」は、共同体的結合を意味する事から、善阿弥はすでに集団を率いていた、つまりその手の者すなわち郎党一派に毎日の給付や引き物そして食事等を与えている。善阿弥の集団の頭領としての存在のあり方が確認される。

また、寛正2年（1461）12月4日でも「河原善阿ミ来、・・・新足二百疋給之。」とあるように、ここでも善阿弥が大乘院の樹木を検知し、柘榴や柏真などを進上すべきであると進言していることに対して、二百疋を与えている。

善阿弥をめぐる集団と賃金（ ）書きは前後から判断しての推定

出典	年月日	個人、集団の名称	職務、賃料	備考
看聞日記	永享5/10/6(1433)			義教木や石の徴発
看聞日記	永享5/10/19(1433)	席	庭の松を見る・但し延引	
看聞日記	永享5/10/20(1433)	席、庭物4、5人	松笠結う	
看聞日記	永享5/10/20(1433)	席菊	樹木の検知 庭物3人運搬	枝を折った庭物籠舎
蔭涼軒日録	永享7/11/7(1435)	河原者	庭前柏樹。遣河原者被召之。	
蔭涼軒日録	永享7/11/27(1435)		盆石芭蕉被預置	
看聞日記	永享8/2/21(1436)	席菊、御庭物	義教からの依頼で庭の拝見	
蔭涼軒日録	永享11/9/25(1439)	虎菊	雑木の移植について意見	
蔭涼軒日録	永享11/11/9(1439)			蔭涼軒御坊完成
蔭涼軒日録	永享11/11/14(1439)	虎菊	庭の植樹	
蔭涼軒日録	永享11/11/15(1439)		栽木立石	
蔭涼軒日録	永享11/11/25(1439)		庭に水を引く	
蔭涼軒日録	永享11/12/14(1439)	虎菊	庭木栽樹	
蔭涼軒日録	永享11/12/20(1439)			將軍御覽
	永享11/12/25(1439)		岡松、富士松の移植	
看聞日記	嘉吉3/2/21(1443)	虎菊	庭木の売買を助言	
蔭涼軒日録	長祿2/2/24(1458)	善阿弥	蔭涼庭頭可被栽葉樹之由被仰出	蔭涼軒日録の初出
蔭涼軒日録	長祿2/2/26(1458)	(善阿弥)	泉水庭頭籠木被改栽	水
蔭涼軒日録	長祿2/2/28(1458)	善阿弥	御庭嘉樹栽培成也	義政の命で
蔭涼軒日録	長祿4/6/22(1460)	善阿弥		善阿彌違例可煎與藥之由
蔭涼軒日録	長祿4/6/23(1460)	善阿弥		善阿小減之由披露之
蔭涼軒日録	長祿4/6/24(1460)	善阿弥		小減之由披露之
蔭涼軒日録	長祿4/6/25(1460)	善阿弥		小減之由白之
蔭涼軒日録	長祿4/6/27(1460)	善阿弥		善阿彌本復
蔭涼軒日録	長祿4/6/28(1460)	善阿弥		善阿病氣平復
蔭涼軒日録	長祿4/8/15(1460)	善阿弥	善阿弥宿所之事。命于寺家之由披露之	
蔭涼軒日録	長祿4/12/8(1460)	善阿弥	5000足の褒賞	1疋は10文
蔭涼軒日録	長祿4/12/8(1460)	善阿弥		善阿弥来壮健之由日之。
蔭涼軒日録	寛正2/4/18(1461)	善阿弥	領取	天竜寺施食領取として争乱
大乗院寺社雑事記	寛正2/12/2(1461)	善阿弥	庭木の事で下向	
尊尊大僧正記	寛正2/12/4(1461)	善阿弥	樹木検知、200疋	
蔭涼軒日録	寛正4/5/28(1463)	善阿弥	聞く銘石楼蘭被預置	盆石を預かる
蔭涼軒日録	寛正4/6/14(1463)	善阿弥	善阿弥有病	甚為辱也と僧が憤慨
蔭涼軒日録	寛正4/6/15(1463)	善阿弥		善阿不例之由
蔭涼軒日録	寛正4/6/18(1463)	善阿弥		雖得小減未快
蔭涼軒日録	寛正4/6/19(1463)	善阿弥	出頭之所	
蔭涼軒日録	寛正4/6/20(1463)	次郎法師	奴僕十員普請之微力也	次郎法師を助けて人夫
蔭涼軒日録	寛正4/6/21(1463)	善阿弥	善阿彌病愈之由白之	
			赤松次郎法師築地	
蔭涼軒日録	寛正4/12/8(1463)	善阿弥		善阿弥の病と平癒について
大乗院寺社雑事記	寛正6/9/12(1465)	善阿弥	善阿弥上洛、1000疋	
蔭涼軒日録	文正1/1/18(1466)	善阿弥		善阿弥は83歳と記述
蔭涼軒日録	文正1/2/25(1466)	善阿弥	以結城下野守所申并	
			善阿来見之義渡之	
蔭涼軒日録	文正1/3/126(1466)	善阿弥		善阿弥の造庭が奇絶と激賞
蔭涼軒日録	文正1/4/19(1466)	善阿弥	善阿弥が盆山を見に来る	
蔭涼軒日録	文正1/5/22(1466)	彦三郎	將軍義政より白石菖	蔭涼軒の預かっている泉水石
			瓦盆を預かる	
蔭涼軒日録	文正1/6/6(1466)	善阿弥	義政が善阿弥に石菖	善阿弥と彦三郎は同門
			を求める	
蔭涼軒日録	文正1/6/15(1466)		白花菖蒲瓦盆被召還	將軍に白花の瓦盆石を返還する
蔭涼軒日録	文正1/6/19(1466)		白花菖蒲瓦盆二個被預下	再び白花の瓦盆石を預かる
蔭涼軒日録	文正1/6/21(1466)	善阿弥、次郎五郎	栽長春樹之小石、被預置	善阿弥と次郎五郎は同門
蔭涼軒日録	文正1/6/22(1466)	彦三郎	前日被預置之長春樹	
			小石、召還即献之	
蔭涼軒日録	文正1/8/6(1466)	善阿弥、次郎	于山中請院見之日	善阿弥と次郎が同門
尊尊大僧正記	文明3/7/5(1471)	善阿弥	中院の庭終了、善阿弥毎日	善阿弥の手の者が集団として参加
			20疋引物2000疋	

		善阿弥配下、手物	手物11人1人別20疋	
			引物惣中500疋	
		善阿弥	8、9月食事等下行	
大乗院寺社雑事記	文明3/8/4(1471)	善阿弥	住屋事、為六方作給之	善阿弥の為に六方衆が住まいを作る
経覚私要鈔	文明4/6/8(1472)	善阿弥	興福寺に下向して作庭	
大乗院寺社雑事記	文明10/11/4(1478)	善阿弥の息子小四郎	下向京都ニ申請之	
蔭涼軒日録	文明12/2/22(1480)	左近四郎	庭間松へ井躰躑躅栽之	
大乗院寺社雑事記	文明13/10/11(1482)	善阿弥	河原善阿ミ入道去月入滅了云々、百余歳歟	
蔭涼軒日録	文明19/1/5(1486)	太郎右衛門(父)、太郎次郎、彦三郎、権六、又五郎、		(正月挨拶) 此中孰絲惜。父曰権六
蔭涼軒日録	文明19/2/22(1487)	左近四郎	自齋前左近四郎来。庭間栽松。移梅於南庭	
蔭涼軒日録	文明19/2/27(1487)	左近四郎	大小5株の松を移植	
蔭涼軒日録	長享2/4/12(1488)	河原者		
蔭涼軒日録	長享2/6/17(1488)	左近四郎	庭樹を洗う	
等持寺日件	長享3/6/5(1489)	善阿弥		善阿弥97歳生歳逢寅者也、為山植梅拜石天下第一云爾
蔭涼軒日録	延徳2/4/2(1490)	彦三郎、又五郎	彦三郎又五郎在松泉齋罷自等持寺恵牡丹四枝	
蔭涼軒日録	延徳2/4/4(1490)	彦三郎、第二人	彦三郎與第二人来自南都材木上	
蔭涼軒日録	延徳2/4/8(1490)	彦三郎、大鋸二人	彦三郎大鋸二人来	大鋸は二人組みで行動、鋸を引く
蔭涼軒日録	延徳2/4/9(1490)	太郎次郎、彦三郎、大鋸二人衆		
蔭涼軒日録	延徳2/4/10(1490)	太郎次郎、彦三郎、大鋸二人衆		
蔭涼軒日録	延徳2/4/14(1490)	太郎次郎、彦三郎、又五郎。大鋸二人衆		
		松泉		
蔭涼軒日録	延徳2/4/17(1490)	彦三郎、権六、太郎兵衛、三郎太郎来		
蔭涼軒日録	延徳2/4/20(1490)	太郎兵衛、彦三郎、権六	在松泉勸湯漬	
蔭涼軒日録	延徳2/4/24(1490)	番匠三人大鋸、又五郎	命又五郎造座頭屏骨	
蔭涼軒日録	延徳2/4/27(1490)	太郎兵衛、権六、又五郎	在松泉	
蔭涼軒日録	延徳2/5/1(1490)	次郎太郎、彦三郎、太郎兵衛、権六、大鋸二人	在松泉	
蔭涼軒日録	延徳2/6/16(1490)	彦三郎、又五郎	在松泉	
蔭涼軒日録	延徳2/6/30(1490)	彦三郎		彦三郎瘡病起
蔭涼軒日録	延徳2/7/1(1490)	彦三郎		彦三郎瘡病起振落之由
蔭涼軒日録	延徳2/7/17(1490)	彦三郎、又五郎両兄弟、大鋸二人	不足勸之	
蔭涼軒日録	延徳2/7/20(1490)	彦三郎、又五郎、		一汁三菜中湯三菜也。分一膳作二膳與彦三郎。又五郎喫茶之
		匠工二人、大鋸二人		
蔭涼軒日録	延徳2/10/29(1490)	左近四郎	松泉軒書院前泉川作之	
蔭涼軒日録	延徳3/9/20(1491)	善阿弥	帰与之以一緡十帛	善阿弥の2代目か
蔭涼軒日録	延徳3/3/20(1492)	善阿弥	善阿来植庭樹	彦六に善阿弥に来るように命じる
蔭涼軒日録	延徳4/2/10(1492)	彦六、善阿弥	善阿明日来可栽躰躑之由命彦六	彦六と善阿弥は同門
蔭涼軒日録	延徳4/2/12(1492)	河原者3人、夫丸4人、彦三郎、彦六父子	父子南庭之苔、善者自中山取	
蔭涼軒日録	明応1/(1492)	善阿弥、左近四郎	河原者来栽庭松、善阿他適之	
		河原者16人	故左近四郎来栽之、河原者	
		外力僕数輩加	16人、其外力僕数輩加	
蔭涼軒日録	明応1/12/2(1492)	左近四郎、河原者2人	庭の松を洗う	

2-3-2 善阿弥と周辺の集団

『蔭涼軒日録』の寛正2年（1461）4月18日の条によると「善阿弥依来廿二日天龍寺渡月橋施食領取之事。而庭掃與河原者争論之。仍於寺家可致成敗之訴訟有之。」とあり、善阿弥を領取²⁰とする集団の争論がある。善阿弥がこのような非人施行に臨み、また、そこで争論をおこしている集団の長として調停を求めているという彼の社会的身分や背景がここに表出されているわけであるが、このような争論は各地で「河原者」同志の間でおこっており、「河原者」や他の集団の競合が考えられる²¹。

蔭涼軒では以下の作庭が行われている。すでに永享7年11月7日(1435)の条には「南禅寺慶祥軒。庭前柏樹。遣河原者被召之。或有盆山蒙命。」と作庭に「河原者」が出入りしていることが伺われる。永享11年8月27日には「盆石芭蕉被預置。」とあり、盆石を將軍足利義教から預かっている。このようにその固有の人物は特定できないが「河原者」が造庭に関わっていることが史料中に散見される。これらの「河原者」はどのように集団を構成してきたのであろうか。善阿弥を中心としてこの点について考察を加えていきたい。

時系列が複雑になるが、文正元年5月22日の条には「瓦盆裏花菖蒲。自公方様被預下也。・・・使者河原者彦三郎云。聞此花白也。」とあり、瓦盆の花菖蒲を彦三郎が使者となり將軍より預かってきている。その花は白であると記されている。そして、これを6月15日には「白花菖蒲瓦盆被召還也。」とあり、召還しているが、19日に再び預かっている。また、6月6日には「公方以善阿被求石菖。即献之。」と、將軍が善阿弥に命じて石菖を求めている。

前述したが、21日には「栽長春樹之小石。以善阿弥并次郎五郎被預置也。」とある。これは善阿弥と次郎五郎を共に使って長春樹の小石を預かり置かれている。両者は行動を共にしており、同集団のものと考えられる。さらに22日には、「前日被預置之長春樹小石。今晨以彦三郎河原者被召還即献之。」とある。これは、21日に善阿弥と次郎五郎が預かってきて置いた長春樹の小石の盆石を彦三郎が召將軍のもとに還している。善阿弥が名作の盆石を拝顔に来たことから、彼等は単純に盆石の持ち運びのみならず、それらの維持管理にも携わっていたと考えられる。つまり、善阿弥、次郎五郎、彦三郎は協働している集団的な組織を作っていたといえる。さらに文正元年（1466）8月6日の条にも「以善阿并次郎破了往于山中請院見之曰無之而帰去也。」とあり、善阿弥と次郎が共に働いている。文明19年（1486）1月5日になると前出の彦三郎が他の「河原者」と共に登場している。そして善阿弥の息子に関する記述も存在する。『大乘院寺社雑事記』の文明10年（1478）10月4日の条によると「河原者善阿弥ミ之息小四郎下向京都ニ申請之。」とあり、善阿弥の息子小四郎が京都に下向している。

ところで『蔭涼軒日録』の文明12年2月22日（1480）の条には次のようにある。「不参、天快晴、自齋前左近四郎来、庭間栽松、移梅於南庭、庭間松へ并躑躅栽之」。ここでは左近四郎という庭者が登場している。左近四郎は文明19年（1487）2月27日にも大小五株の松を移植しており、長享2年（1488）6月17日には庭樹を剪定している。左近四郎は、単独或いは他の「河原者」と出入りをしている条が多く見られる。又、延徳2年10月29日（1490）の条に「今日松泉軒書院前泉川作之、左近四郎作之。・・・左近四郎彦六彦二郎畢泉水之功帰。」とあり、左近四郎が中心となって、彦六や彦二郎と松泉院の泉川を作っている。

時代が下ってからの善阿弥という名前が出現している条に関して考察する。『蔭涼軒日録』の延徳3年（1492）11月19日の条には「善阿栽松。」とある。また11月20日の条にも「善阿来植庭樹。」とあるが、これは子息の小四郎に阿弥号の譲渡が行われたものではないかと推論する。明応元年（1492）11月29日の条に、善阿弥は左近四郎と共に出現しているがここでの善阿弥も二代目と考えられる。ここでは、「河原者来栽庭松、善阿他適之故左近四郎来栽之、河原者十六人、其外力僕数輩加」とあるように、善阿弥が他に出ているため、左近四郎や「河原者」16人と、「力僕」が数名加わって庭松を植えている、（左近四郎は「河原者」と区別して記述されていることから、「河原者」とは異なると考えられる。）左近四郎やその他の河原者、力僕は2代目善阿弥の直接的な配下ではないにしても補完しあう技能集団的存在であったといえよう。左近四郎はその後、12月1日には「左近四郎来栽庭樹。河原者八人有之。」と河原者8人と協働して働いたり、12月2日には河原者2人とともに蔭涼軒に訪れ、庭樹の松を剪定したりしている。左近四郎以外にも、善阿弥と関わっている「河原者」の名前が示されている。例えば彦六もその一人である。『蔭涼軒日録』の延徳4年（1492）2月10日の条には次のようにある。「不参、天快晴、早旦躑躅十五根持来取之、善阿明日来可栽躑躅之由命彦六」つまり、善阿弥に明日来て躑躅を植えるようにと、善阿弥ではなく彦六に命じている。これは彦六と善阿弥が同門で、善阿弥に命ずべきことは彦六に伝えることで用を足していることになる。善阿弥を中心とする一門の存在が伺える。この彦六は延徳4年（1492）2月12日の条では「河原者三人、夫丸四人、遣山苔之方、彦三郎在松泉造作、彦六父子南庭之苔、苔者自中山取之云々」とあり、彦六父子など一族が庭造りに関わっている。血縁関係とさらに同門としての関係は、2代目善阿弥や彦六、彦三郎、左近四郎などの記述で推定される。

『蔭涼軒日録』の文明19年（1487）1月5日の条によると、「太郎右衛門将我四子来曰。太郎次郎。曰彦三郎。曰権六。曰又五郎。」とあり、この四人が兄弟であることが伺われる。中でも日録に頻出する彦三郎に注目してみる。彦三郎は前述した文正元年5月22日に、公方より預かった瓦盆裏花菖蒲の色は白と述べて

いるのだが、6月22日には21日に善阿弥らが預かった長春樹の盆石を返還している。また延徳2年(1490)4月2日には又五郎と、4月4日には弟2人と、6日には兄弟3人と、8日には大鋸二人衆と、9日には太郎次郎や大鋸2人と、10日にも太郎次郎や大鋸2人衆と、12日には太郎次郎や又五郎と、13日には太郎次郎や又五郎と、14日には太郎次郎、又五郎、大鋸二人衆と、17日には権六、太郎兵衛、三郎太郎と、20日には太郎兵衛や権六と、4月21日には太郎兵衛や権六と、27日には太郎兵衛、権六、又五郎と、5月1日に次郎太郎、太郎兵衛、権六、大鋸2人と、また6月1日には番匠も共に宴が供されており、太郎次郎、権六、又五郎等の名があげられている。6月16日には又五郎と、26日には権六、又五郎、大鋸2人と働いている。6月30日には、「彦三郎瘡病起。」と病に臥せったが、翌7月1日には「彦三郎瘡病振落之由。」と回復が述べられている。7月18日には又五郎両兄弟や他、大鋸2人と働き、7月廿日には彦三郎、又五郎共に膳を与えられている。其の後彦三郎の名前は頻出している。兄弟である又五郎、権六、彦六以外の協働する他の河原者は主として、又三郎(延徳2年10月16日)、大五郎(延徳2年10月28日)、左近四郎(延徳2年11月29日)等である。

この『蔭涼軒日録』にみられる「河原者」のつながりを再検証してみる。すなわち永享7年には既に「河原者」が作庭に従事している。其の後、帟(虎)や帟(虎)菊と呼ばれる善阿弥の俗称と思われる人物が義教と関係しながら作庭にあたっている。善阿弥という名が資料上に登場するのは長禄2年(1458)年からであった。

また、盆石の扱いに関しても善阿弥が、次郎五郎などと共に盆石を将軍から預かって来たり、或いは彦三郎が使者となって預かった瓦盆の花菖蒲を召還したり、再び預かってきたりしているが、この一連の盆石の扱いに関する際にも善阿弥や彦三郎が一定の役割を果たしている。また、善阿弥と次郎五郎の預かってきた盆石を彦三郎が召還しており、これも彦三郎が善阿弥と協働していることを表象している。善阿弥、次郎五郎、彦三郎は仕事を行う上で仲間内の連絡を保ちながら、作業に従事している技能集団であると推論される。「河原者」の善阿弥と彦六は、伝令を行っていることから、居住地域も隣接或いは同地域であったと考えられる。

善阿弥が高齢で亡くなったあとにしばしば登場している二代目善阿弥は、彼の父親ほどは大家として認められていなかったようであるが、他の「河原者」や作庭家との共同作業は益々進んでいる。左近四郎も頻出しているが、前出の明応元年(1492)の条に善阿弥が他に行っているのも左近四郎が来て働いていることなどからも、二人は近い存在でもあったと考えられる。善阿弥をめぐる集団は賃金の考証からも推察される。

延徳、明応の時代(1490年代)になると、作庭を行うものとして河原者は親族、

仲間など共同で作庭にかかわっており、また、「河原者」も16人や8人などという多人数で登場している。作庭集団の固定化が進んでいったものと考えられる。

2-4 まとめ

善阿弥という人物は中世後期、ちょうど観阿弥や世阿弥²²などの能の大成者や相阿弥²³の時期と前後して、「山水河原者」として特に足利義政の寵愛を受けた庭者であった。「河原者」として卑賤視された身分であったが、作庭の技量故に特別な扱いを受けたとは、まずいえる。

義政は花見に熱心で『蔭涼軒日録』によると、寛正5年(1464)3月4日、6日にも花見に訪れている。義政が造庭に深く傾倒したことが、善阿弥が世に出る直接のきっかけになったことは間違いないであろう。また、禅宗系の寺院で特に流行していた盆山も善阿弥を筆頭にした河原者が維持管理に携わり、技術を向上させる機会を与えている。また、いわゆる枯山水の庭園に盆山が与えたと思われる影響も無視しがたい。このようなさまざまな庭園や植物のあしらいに注目をうける時代に現出したのが、善阿弥とその一団であったと考えられる。盆山と枯山水の関連性は、『君台観左右帳記』²⁴などに記されている盆石の形態と、後に出現する枯山水庭園との形態的類似からも推測される。

相国寺の季瓊真薬による『蔭涼軒日録』の多くの条項に出現しているように、善阿弥の身体が当時の僧侶や幕府のものにとっても重大関心事であった。それは、善阿弥の病に対する義政の薬や医師の配慮からうかがわれる。しかし、それにもかかわらず、善阿弥は「河原者」という卑賤視されていた集団の長であったことは逃れ得なかった。集団化はさまざまな仕事の報酬として与えられる「河原者」の職能と賃金の関係からも伺われる。その賃金はもちろん善阿弥の技術とその評価に対するものではあるが、同時に善阿弥の背後に控える技術者集団に対する対価でもあったはずである。「河原者」の頂点にたった善阿弥が、一門を代表するものとしてその対価を受けとっていたことは想像に難くない。善阿弥に対する報酬は、『蔭涼軒日録』の長禄4年12月8日の条項に書かれているように、五千疋という高額なものから、料足二百疋、或いは、毎日三十疋など、その金額はさまざまであるが、「惣中」や「手物」と特に記されている記述もあるように、その配下のものの日当も含まれていると考えるべきである。

従来の善阿弥論とその課題として、前段でも述べたことであるが、善阿弥個人の芸術的才能に特化しすぎることにより、当時の集団的職能民の形成という視点が不足していたと思われる。その集団化を示すものが、上述した記録の中に出現する帟(虎)菊帟や(虎)と称する「河原者」や善阿弥とその親子集団や同業集団であり、内容は彦三郎、彦六、次郎五郎等や他の衆との協働である。また、一

代目の善阿弥が亡くなったあとにも、二代目と目される善阿弥が活躍している。
2代目と共に働いているのが、左近四郎や彦六親子、そして彦三郎などで、一族
或いは緊密な連携を持つ集団の存在が伺われる。

延徳年間（1489～）以降はさらに「河原者」の名前が多く出現する。「河原者」
が単なる人夫としてではなく、各々固有の名称を持つ職能者として認知を受けて
いるということを示す。彼らの固有の名前は年代が下るにつれ、益々増加してく
る。前述したように、善阿弥は「河原者」の長吏として争論にも加わり²⁵、また、
左近四郎なども、身分的には低い位置に属した階層であったと考えられるが、そ
の技量を認められていった。彼らのエネルギーはまさに、その被差別という形態
にあったといえるが、しかし、職能集団という組織的な技術力があってこその上
昇であったということを認識する必要がある。

善阿弥は卓越した芸術性と背後に控える技能集団の象徴として輩出されたこと
が理解された。これらの集団は日々、彼らの社会的基盤の伸張に奔走していたが、
善阿弥はその長としての勢力、義政の寵愛、庭や盆栽の流行などの時代背景に支
えられて、「山水河原者」としての開花をみた。背後に実力と見識を備えた多数
の河原者などの技能集団が控えてこそ、天才といわれるほどに開花することので
きる条件が成立した。

注・文献

¹ 伊藤ていじ（1970）：枯山水：淡交社
² 森蘊（1944）：日本庭園の伝統：一條書房
³ 進士五十八（1970）：日本庭園河原者造型論：造園雑誌33（4）, 19-27
⁴ 重森完途（1996）：枯山水の庭：講談社
⁵ 外山英策（1934）：室町時代庭園史：岩波書店・（1934）：室町時代の庭園、岩波講座日本歴史
⁶ 第1章 1-3-2 （1）吉永義信の研究参照
⁷ 竹内理三（1978）増補続史料体系：第21巻～：臨川書店
相国寺鹿苑院蔭涼軒主の公用日記で全65冊。 永享7年～文正1年（1435～66）を季瓊真菰
が筆録、文明16年から明応2年（1484～1493）までを亀泉集証が筆録、その他の部分の筆
者は 不明。（『日本史辞典』角川書店による）。
⁸ 藤木英雄（1987）：日記・記録による日本歴史叢書 古代・中世編別篇 蔭涼軒日録（室町禪
林とその周辺）、14
⁹ 森蘊（1944）：日本庭園の伝統：一條書房、180
¹⁰ 2の（5）の善阿弥の没年を参照
¹¹ 貞成親王の日記54巻、本記は応永23年から文安5年（1416～48）にわたる。筆者の日常
生活、朝廷の動向、室町時代足利義教期の幕府政局、世相芸能等多岐に及んで記載。（日本史
辞典、角川書店による）
¹² 異字同意と考えられる。
¹³ 善阿弥の称号が『蔭涼軒日録』に初見されるのは長祿2年（1458）2月24日である。この
時、義政は22歳、将軍になったのは宝徳1年（1449）、13歳のことである。義政が成人し
て善阿弥と交流をもつことが出来たのは、やはりこの年代に入ってからと考えるのが妥当で
ある。
¹⁴ 春阿弥は他の条にも頻出し、その役割と職務は以下のように考えられる。出現の背景として
必ず将軍の「御成り」や「言」を代弁或いは、伝言したりしており、阿弥がついている呼称
からみても同朋衆で将軍に直属していたと考えられる。同朋衆とは中世、将軍家に近侍して
身の雑事や特殊な芸能諸事を司った職、僧体ですべて阿弥号を名乗り、某阿弥陀、某阿弥、
某阿のように称す。書信の使者や対面取次ぎなどの雑務に従う者と、書画、調度品などの唐
物の鑑定管理に従う者と、猿楽、田楽、立花などの特殊芸能者として勤仕するものとの別が
があったらしい。（小学館 1981）
¹⁵ 林まゆみ（2000）：中世後期における北野社を中心とした造園土木職能の形成：ランドス
ープ研究 Vol.63No.5,354:
北の社家日記に見られる河原者の赤など
¹⁶ 正長6年（1428）6月10日の条に庭の事に関して「河原者」が不浄として散所に代えてい
る。
¹⁷ 丸山秀夫（1982）：日本盆栽盆石史考：講談社, 208-211
¹⁸ 六方衆の蜂起は、『大乘院寺社雑事記』長享3年（1489）2月27日の条に記されている。
¹⁹ 林まゆみ（1995）：中世民衆社会における被差別民と造園職能の発展過程：ランドスケープ
Vol.58No.5,17
²⁰ 領取とは受け取り手を表わしている。
²¹ 『看聞御記』の応永29年（1499）9月6日の条にも河原者と勤進僧が河原施鬼で喧嘩を行
っている。

- ²² 世阿弥（1363～1443）。能の大成者観世座を受け継ぎ、先行諸芸能を統合して猿樂を大成させた。足利義満に寵愛され、幽玄能を完成させたが後に失脚して佐渡に流される。
- ²³ （？～1525）。室町幕府將軍近侍の同朋衆、『君台観左右帳記』を表わし、連歌や作庭も行った。
- ²⁴ 君台観左右帳記（くんたいかんそうちょうき）：中国絵画・工芸品の寛正・鑑識および座敷飾りに関する室町時代の秘伝書。能阿弥、相阿弥著。当時の唐物や飾り方などを記述。
- ²⁵ 前掲19

第3章 造園職能民の展開・・・京都にみられる他の事例を総合して

前章までにおいては、造園職能民に関して以下のように検証した。第1章で北野社に見られる造園職能民の形成、第2章で造園職能民の完成として、善阿弥の再検討を行った。本章では主として京都にみられる他の事例に見出される造園職能民を総合的に検証しつつ前章と関連づけながら、彼らの考察を行うものとする。

方法としては、前章で用いた参考文献の中で取り上げていなかった史料に加えて、『編年差別史資料集成』¹や『京都の部落史』²等諸種の史料を検討し、補足的に他の事例を取り上げて当時の民衆社会における造園や造園土木的職能民の状況を抽出することとした。

3-1 「散所」から「河原者」へ

3-1-1 呼称の変化

（1） 「散所」の時代

①初期の「散所」

初期における造園職能に携わった事例としては、14世紀の中頃、興国4年（1343）10月29日の『八坂神社記録』に「一散所長寿法師菊一本昨日持来、今日又来植之、八木一斗給之」とあり、散所法師が前日に菊を持ち来たり、植えている、そして八木一斗を褒美として与えている様子が伺われる。当時は花見などの風習もすでに見受けられ、正栄5年（1350）2月30日の同記録では「卅日、四条聖大原野花巡見云々」とあり、四条の聖が大原野の花巡見を行っているといえる。花見は一般にまで広がっていた遊行であった。

また、清掃に関しては、第2章で詳述したように、北野社関連資料で1397年に初期の「散所」の清掃について記述されていたが、各地の資料をみると例えば『東寺執行日記』の正平18年（1363）8月7日の条の「八月七日、来十一日石清水八幡宮御輿可有御帰座、大路掃除、朱雀河浮橋可有之由、・・・浮橋事、勸進方直可被仰之由返答、次掃除事承訖・・・即掃除事、相触之处等」とあり、大路の掃除や朱雀河の浮橋の普請に関して命じている。同9月1日には「次朱雀河浮橋事、自武家、奉行斎藤五郎左衛門尉、重厳密被責伏之处、無力領状、為勸進方沙汰、以大湯屋門扉等、暫時橋渡訖、人夫ハ散所法師原 并寺内款冬田在家人賣出之了」とあり、掃除や浮橋の工事を室町幕府が命じ東寺が散所法師原を人夫に当てている。

『洞院公定公記』の永和3年（1377）3月8日の条に以下の通りある。「今夜、逗留し箒を引かる。「散所」に仰せ藤花賞玩の為、南庭掃除并に木柴の事、下知を加

え了んぬ。」すなわち「散所」に命じて南庭の掃除や木柴の処理をさせている。また、21日には「今日より北庭泉水前栽等、「散所」に仰せこれを作らしむ。其の詮無き事たると雖も、冷然の余り、興行せしむる者なり。」ともある。これは「散所」に命じて作庭を行わせている事例である。

14世紀半ば以降では上に述べられているように、「散所」が庭の掃除等に携わったり、庭の泉水や前栽を命じられて作っていたりしている様子が伺われる。

② 散所法師熊とその周辺

応永12年(1405)6月に山科教言邸が罹災する。これを受けて邸宅の新造に多くの人間が関わることとなった。

『教言卿記』³によると応永12年(1405)の6月11日の条には、「今日木屋立之、番匠三人、山科二人、熊一人、不治、菊鶴、資親下人、重長下人、清幸下人、下掛保、細川、大工祝殊更ハカリ百文下行」とあり、館の新造に向けて番匠や人夫に混じって、「熊」が一人参入している。8月3日の条には以下のようにある。「一、築地事始、先西ヨリ沙汰之、散所法師、熊二人、大工ニテ、目縄分三百、資親、重熊、清幸、重長下人等奉行、即重能上中間左近次郎、藤五」。これから、「熊」は散所法師ということが理解される。このように15世紀の前半くらいには、散所法師が築地に関することをさまざまな職種の人々と協働して行っている。

③ 東寺の掃除散所の他役免除について

また、『東寺百合文書』⁴の応永13年(1406)3月11日の条によると「一 寺中掃除事 此一兩年、散所法師原公方役為寺家不被申免間、寺中掃治難致其沙汰之由雖申、連々責伏、此間召仕畢、雖然近日弥無沙汰候間、御影供掃除等可為無沙汰歟、先召諸莊園・・・人夫可掃除、於散所法師原者、仰侍所少々可籠者之由、沙汰畢」とあり、東寺散所法師等が諸役を免除されない事を不満として寺中の掃除を拒否している。これは掃除という役を責務としていたことの反面、諸役免除を当然の権利として要求していた例を示している。

東寺散所の諸役に関しては、応永18年(1411)5月13日の『東寺百合文書』の条に、「東寺御敷地号南小路、散所法師原所役条々、一、掃除在所等、号先例、定於自由之分量不可申所存、偏可随奉行人御命事、一、惣別御築地役并自余御用等、雖為何時随召可致沙汰、寄事於左右、臨期不可申違乱、毎時可随仰事」とあり、東寺南小路の散所法師が所役について、掃除等の所役を勤めることを約束している。

さらに応永20年(1413)9月23日の条には「東寺雜掌当寺掃除散所法師事、他役免許之条、勅裁等証文明鏡之处、動及催促云々、甚無謂、向後可被停止之由所被仰下也、仍執達如件」とあり、室町幕府が東寺掃除散所への他役催促の停止を命じていることや、応永21年6月27日の条で「東寺雜掌申当寺掃除散所法

師信濃小路猪熊西頬壹町、事、任代々勅裁並御教書之旨、諸課役可令免除之状如件」と述べられて、室町幕府が東寺掃除散所の所課役免除を指示しているように東寺の掃除散所はその所役を停止され、掃除のみに特化した役務を担っていた。

(2) 「河原者」における造園職能

① 「河原者」の初期

「河原者」の初期における造園土木的職能としての登場は『満濟准后日記』⁵の応永20年(1413)9月23日の条にみられるように「廿三日・・・河原者参金院庭口立口。」とあるように「河原者」が醍醐寺の金院に参入して庭のことに従事している。

徐々に、造園土木に関わる記述に「河原者」の名が増えてくるようになるのは15世紀の中ばごろからであるが、『看聞御記』の応永31年(1424)11月21日の条では、「廿一日。晴。禁裏此間御前水御興行云々。仍当所寺庵植木可被召進之由。以持経被仰下。河原者三人為検知被召下。則寺菴へ仰之旨申遣。大光明寺。蔵光菴ハ申異議。室町殿へ伺申。随彼命可進云々。退蔵。行蔵。静隠庵則領状申。其外地下人土蔵等河原。静隠庵則領状申。其外地下人土蔵等河原者検知了。此庭前無可然植木。然而為御不審御使ニ令検知。田向庭同見之。此子細持経ニ返事了。」とある。

また、23日の条では以下のようにある。

「廿三日、晴。禁裏勅定之旨。持経重以状申。所詮境内事ハ竹園可為御計之处。寺菴申異議之条不可然。於検知之所者可被召進之由。厳密被仰下。仍寺菴此旨申遣之間。無力領状申。静隠菴松一本且進之。自余木共雜車五六両召賜て可進之由。持経ニ令申。蔵光菴ニ有白榛。是光明院殿被植置云々。件木兼達叡聞。可掘之由河原者ニ被仰付云々。寺家秘蔵之間。周章無極。室町殿八幡御参籠之間。不及伺申。坊主も留守也。看坊計会也。然而勅命無力之間。被領状申。件木寺家之飭也。光明院殿被植置之間。殊秘蔵惜申之条尤理也。不便々々。凡河原者諸方走廻。寺庵人屋秘蔵之木共注進申。則押而被召之。諸人周章云々。皇土ニ被孕誰人可惜申哉之由。有勅言云々」

これは、当時の称光天皇の命により、「河原者」等が伏見に下向して名木を探索して運び去っている様子が記述されており、寺の不興をかつている。

よくひきあいに出される資料であるが正長6年(1428)6月10日の『建内記』⁶では、「禁中川原者穢多事也参入、於御庭事被召仕之、為不浄之者不可然之 处、自去年被停止、被召散所者声聞師事也 珍重々々。」とあり、「散所」に対して「河原者」を不浄の者といって締め出している。「河原者」が不浄であるとして「散所」に代えて庭の事をさせている。この時には同時に猿楽も停止している。しかし、

これらは2年後の1430年にはすぐに打ち破られている。

永享2年(1430)閏11月1日の『看聞御記』には以下の通りある。「十八日。晴。南庭嶋形滝頭石等河原者立之。珠蔵主令奉行。河原物仙洞御庭物也。築地地下侍。若衆共風流築之。逸興也。廿五日。晴。・・・南庭山水立石今日周備了。河原物賜禄物。」仙洞御所の庭づくりに「河原者」が参入している。「河原者」は不浄といっって締め出されたり、また引き入れられたりしながら少しずつその地歩を固めていく。「河原者」が締め出されたり、復活していたりする様子は総括すると逆に、15世紀中頃までは、造園職能に関しては、「散所」と「河原者」が混在しており、同様の職能を持っていたといえよう。

その他にも移植や庭の検分についての記述が挙げられる。例えば、『看聞御記』の永享7年(1435)11月7日の条には「南禅寺慶祥軒。庭前柏樹。遣河原者被召之。或有盆山蒙命。往三宝院間有自鹿苑院殿御預舍利否。曾不識云々」とあり、「河原者」が南禅寺慶祥軒庭前の柏樹を相国寺の鹿苑院内に移植している。前章でも述べたが、さらに同記永享8年の2月21日の条には「早且虎菊参。御庭可拝見之由歟。本望之至也。一見鱧退出」とあり、庭者の虎菊が足利義教の命により、伏見殿の庭を検分している。

『東寺百合文書』の永享11年(1439)8月17日の条では「合○貳百文者 二人定 右此方可有下知也 永享十一年八月十七日 御成掃除方南小路人夫酒直事 合○参百文者 列参分 此分可有下行候也」とある。また20日の条では「御成方同役切符川原者 合○九百文 ○百文 九人定酒肴分 右此分可有下知候也」とあるように「人夫」や「河原者」が同時に掃除のために使われている。その支払いは合わせて9人分9百文となっている。

② 散所法師熊と働く「河原者」

前述した『教言卿記』の応永12年(1405)の6月13日には「文庫壁如土先用意之、河原之者云々、十人」、21日には「文庫上葺、熊法師」、23日には「文庫壁塗ノ為、川原穢多数輩来塗之、目出㍻㍻」など山科教言邸の新造に散所法師熊に加えて、河原之者、河原穢多等も多数参入していることが伺われる。散所法師と「河原者」が混在して壁塗りなどに参加しているが、この場合に関しては熊法師が「河原者」の上にたち、作業を行っていると考えられる。

さらに1月28日の他、3月23日や、5月4日と8日、7月9日と19日などである。5月4日には「四日・・・一、火祭熊法師ニ仰付、二百文」とあり、火祭りの祭祀に関して熊に仰せ付け、二百文支払われている。」また、7月26日の条には次のようにある。「廿六日・・・一、此宿所へ移住、為祈祷地祭、熊法師沙汰之、目出㍻㍻、三百卅文下行之。」ここでは、地祭りの祈祷を熊法師が行い、呪術的な役目も果たしている。その折に熊法師には三百三十文支払われている。5月

4日の火祭りもそうであるが、散所法師である熊は祭礼的な催しに参加し、ここでも呪術的な祭りごとを担っている。他に出現するのはその年の12月9日などである。この時も熊法師は火祭りに関する事を言いつけられ、二百文支払われている。他に、応永14年(1407)2月13日では散所熊法師が築地の修復を行い、5月27日には「一、北築地并東覆葺之、熊法師」とあり、築地と東の覆を葺いているが、28日には「一、熊法師父子、東築地覆葺也」とあり、散所熊法師は親子で来ている。このように築地の改修以外にも、地祭りの祈祷や火祭りを熊法師が行っている。散所法師が築地の修復などにおける土木的技術の提供と、祈祷や祭りごとに参加し、その呪術性が土木技術とともに認められている。15世紀初頭のこの時代には、「散所」や「河原者」が混在して使われてもいるが「散所」が独立して、技術者、呪術者としての職域を占めている一つの例である。さらにこの熊法師は「熊一人」(応永12年6月11日、応永14年2月13日)や「熊二人」(応永12年8月28日、応永15年7月20日)「散所熊法師等十人」(応永14年1月25日、2月13日)など集団の長として存在し、また上述のように5月28日の条で見られるようにここでも親子、一族郎党でも行動していたことが伺われる。「散所」においても職能の集団化、一族郎党化が進んでいたことが理解されるのである。

15世紀の後半を検証すると例えば、長享2年(1489)8月1日の『近衛家雜事要録』では八朔にあたって、「河原者」が箒や緒太を近衛家に献上している。八朔の参詣では「河原者」など出入りしているものが箒などを挨拶代わりに献上している事例が多く見られる。他には、宣胤卿記の永正15年(1518)6月17日の条に「廿日、陰、小雨、晚晴、余方南庭令立石築山、申付河原者」とあり、「河原者」に南庭の築山の石を立てさせている。

16世紀の中頃になると、「河原者」の岩がしばしば『鹿苑日録』に登場する。すなわち天文6年(1537)1月5日には「五日。・・・河原岩二郎箒二。コンカウ二足持来。与百銭。・・・」とあり。岩が鹿苑院主に参賀をしている。岩はこの後もしばしば参賀や八朔の礼に参入している。そして、天文19年(1550)3月22日の『言継日記』の条では「廿二日、中略 河原者岩来、庭に檜木杉なり二本植え」とあり、「河原者」の岩が公家山科言継邸に参入して庭樹を植えている。岩は相国寺の鹿苑院や、山科言継邸などにも出入りしている。

③ 東山山荘の構築に際して

足利義政のライフワークともいえる東山山荘の構築に関する資料は数多く残されている。以下に抜粋する。

『大乘院寺社雜事記』の文明18年(1486)4月1日の一連の条では以下のように記されている。「長谷寺檜又三本可進上之由、対馬守書状到来、則仰彼寺了、先

日進上之内三本ハ無為也ト、其余一向根無之、或不付土云々、三本も色々河原者ニ申合留之、五十疋分給河原者了」すなわち、「河原者」等が関わって、東山山荘の庭園の木を大和国長谷寺に探訪し、進上させているが、「河原者」に対しても50疋という対価を支払っている。『政覚大僧上記』でも長享2年(1488)5月19日には以下のようにある。すなわち「東山殿御庭木事、可被召之間、当寺院家僧坊事、一紙庭所持之鉢可注進由、就寺家被仰出、仍当門跡門徒之衆少々注進申訖、於一乗院方ハ、彼門跡ニ可被仰付由、返事申者ナリ」とあり、東山山荘の造園にあたり、庭木検知の「河原者」が一乗院などの南都に派遣されているが、門徒の衆が少々注進を行っているとある。さらに『政覚大僧正記』の長享2年(1488)7月27日の条に次のようにある。「東山殿御庭木事、可被召上人夫儀松林院ヨリ状アリ、如此御返事申訖、御庭木可被召上人夫事、寺務領七郷事、近来非分所役共、自方々申懸候間、悉以七郷事無正体成下候、京上人夫二人三人召仕事不叶候間、御木人夫中々不可得事候、門跡領事、且又同前候、於南都不可有其隠候、木共事者、可被召分、雖何本可進上候、人夫等事、更以不及了簡候、此段能々可有御申候、最前之仰こ相違候てハ一向不可申行候、」これは東山殿へ庭木を召し上げることに關して人夫のことで松林院より書状があったことに対して返事をしている。すなわち召し上げるべき人夫は近来、非分所役で七郷が疲弊し、京に上げるべき人夫がいないと訴えている。庭木に關しては何本でも進上するが人夫に關しては容赦願いたい旨を記している。このように東山山荘の造営にあたっては各地から庭木などを検知して大規模に集めていることが伺われる。

『東寺百合文書』の長享2年(1488)12月8日の条には「東山殿御普請方入足配当之事 合 長享二戊申年散所 定七百文 同一貫文」とあり、東寺領散所より、東山山荘普請料を出銭している。このように各地、各寺院等に相当の負担を強いているが、ついに奈良の興福寺の衆徒が反発する。すなわち大乘院寺社雜事記延徳元年(1489)1月から2月の条にかけて、以下のようにある。「東山殿御庭樹木間事・・・一 廿九日、・・・河原者下向修羅綱以下悉皆不可成旨申了、松田主計申次云々」、「十二日、六方集会、河原者宿、自今以後不可沙汰云々」、「十三日、六方集会、河原者宿所可進發云々、伝害鳥屋也云々、・・・以今日延引云々、向後河原者不可入立之由、自六方下知云々、以外次第、不可然事也」すなわち、東山山荘の庭樹探訪のために「河原者」が南都に下向して奈良に宿するが、興福寺の六方衆が反発して蜂起して「河原者」を襲撃する。これらの一連の事件に対しては「今度就樹儀、為六方河原者宿事、嚴密申处、自一乗院御披露ノ間、如此ト云雜説在之、然間西院莊事、被付奉書、被押云々、一乗院無存知事也。」とあり立腹した義政は西院莊を押印した。

このように東山山荘の造営に關しては、多数の寺院や権門から、庭樹や石が進

上され、また、それらに関わった「河原者」の宿所や報酬まで負担させられた。これに不満を持った興福寺の六方衆などが、「河原者」への反感も手伝って、蜂起したが、逆に義政の激昂を買い、西院莊を押収されて謝罪したという過程があった。これほどまでに執念をもって東山山荘を造営したのであるが、これらの造庭に關連した記述には、善阿弥の名前も他の「河原者」の名前も殆どみえてこない。むしろ、義政が自ら指揮をとって造庭に励んだものと考えられる。

⑤ 「河原者」の作庭論 又四郎の言葉

中世に残されている文献上では作庭に關するいくつかの河原者の自論が記されている。ここでは「河原者」又四郎の論で特に陰陽思想や呪句に關連した部分を抽出し、「河原者」とそれらの結びつきとして捉えてみることにする。

その作庭を「奇絶也」⁷と記された善阿弥であるが、その孫の又四郎は論客でもあった。彼等の言葉を通して、彼等の当時の作庭に対する論拠を探って見た。

『鹿苑日録』延徳1年(1489)5月20日の条によると以下のようにある。「当院河原者来。献予帚二本。上履一雙。百錢与之。此者跪庭上。説以山水事。方島中栽一木則困字也。雖然。不必拘之。先是於某人宅。當山水栽一木。有憎詰之。某曰。主者女也。女者陰也。所栽之木桜也。桜者号以花。々者春之物乃陽也。陰陽相对尤可也。一僧口黒然云爾。」ここでは、「河原者」(一連の河原者の登場は前後から、又四郎であると推論される。)は、方形の島に木を植えてよいかどうかについての議論を行っている。形が「困る」と言う字になり、従来の考えでは不可とされているものについて、常識を覆し是とする論拠を述べている。常識に逆らっている考え方という点と、その論拠が陰や陽などの言葉を用いた論拠に基づいていると言う点が特筆される。次に続く文を挙げる。

「又河原者曰。有一河原者。於細川殿甲第。當山水。以海石安之 山上。丞曰。顛倒乎。河原者答曰。比叡山上有石。或螺甲付之。由是觀之。有何苦哉。丞曰。物之如此是倒也。尤不可也。河原者不能一言。某聞之曰。汝所答不可也。何不道構高屋建殿堂。皆絵鱗介陶龍虫也。蓋祝之也。今山上呈海石。永々磐安草木潤沢此義也。予謂。河原者而有斬言異哉。イ乃語。以一書陽。二書陰 事。又自一至九皆読以土倭訓。」ここでは、「河原者」は、問われて、山の上に海の石を持ってきたてもよいかどうかについて論争を行っている。「例えば比叡山の山頂にも海の石はある。さざえの殻などが、付いていることもあるぐらだから構わない」と答えたところ、丞に厳しく、「これは本末転倒という事だ」と言われ、返す言葉をなくしている。「河原者」の自然観察の上に則った論ではある。しかし、従来の定石どおりの手法からは、脱皮しようとしている意気込みが感じられる。実際に自然の山間にある不合理を客観的に述べその論拠としている。さらに、陰と陽についての議論を精一杯戦わせている。又、『蔭涼軒日録』延徳4年(1492)2月11

日では以下とある。「来日西芳寺泉水遺河原者可被見之。仍折紙可出之旨。」

これは、「河原者」に西芳寺を見学させており、石立僧の頂点に位する夢窓国師の庭園と「河原者」との接点が見受けられる⁸。論客であった又四郎も作庭と陰陽道について次のように述べている。『鹿苑日録』の延徳1年(1489)6月5日の条を見る。「晚河原又四郎來。洗庭松。自懷中出一冊曰。是植樹排石擇吉凶 選月日之書也。」又四郎は、「植樹排石擇吉凶選月日之書」を懷に収めている。これは陰陽道の書であると考えられる。この時代も基本となる暦の勘案と作成には陰陽寮という官庁が当たっており、庶民の間にも普及し初めていた⁹。彼はさらに作庭の手法について述べている。即ち定石としてなら、山水は皆東から西に水を流しているが¹⁰、西から東ではどうかという議論に対して、又四郎は仏法の儀を持ちだし、東に向かって流れることの是を説いている。ここでは又四郎は、作庭記における陰陽道の禁忌を仏法の儀でかわしている。何等かの定説に一応は則っていながらも、彼等の斬新な考え方が前節と同じく見受けられる。又、南禅仙館の庭の梅が枯れないようにするにはどうしたらよいかと問われ、「堯甘露法雨。滅除煩惱焰」と記された書を埋めるようにと答えている。ここでは、その命を聞いて書をしたためた僧が、字を間違えたのを正している。『蔭涼軒日録』にも、同様の事柄に対する記述がある¹¹。ここでは梅が松に変わっている。しかし呪句を埋める方法や、山水の流れの向きに関する論については、又四郎は同様の考えを述べている。主人は「以之觀之雖爲非人賢者也。」と彼の博学を認めている。「河原者」の主張には陰陽道や仏法の混在が見受けられ、それらの影響を取り入れたものではある。しかし、彼等の居住した不毛の地である川岸や、往来した山などに触れた生活からはより土着性の強い自然観を持ったであろう背景が推察される。

鹿苑日録では、永正1年(1504)4月20日の条に「廿日、河原又四郎法名を求む。名づけて慈福と曰う。彼曰く、嘗て法花二句の偈を知識に受くと。故にこれに及ぶ。偈」又四郎も法名を与えられているのである。

(2) まとめ

このようにさまざまな事例を鳥瞰すると、主として、15世紀の前半ごろまでは「散所」が主として造庭等に関わっているが、15世紀の後半ごろからは、「河原者」がその任を担う例が多くなる。中には1428年の『建内記』の条のように「河原者」を排除して「散所」を導入している事例もあるが、すぐにそれも打ち破られている。

3-1-2 賃金

(1) 前章までのまとめ

賃金に関して考察を加える。清めの職能としての死体処理などには、第1章の北野社関連史料中に「代物一人十疋下行」とあり、一人当たり十疋すなわち100文の勘定で支払いが行われている。延徳2年には「河原者」に死体処理として、29人で2貫900文を支払っている。一人、100文、すなわち10疋である。井替えの料足は、10疋であった。

同時に、北野社では、園池を築くための作業に、「河原者」の五月に対しては、五貫文、子の衛門三郎に対しては、2度4貫文を与えている。また、樹木や庭石の運搬に用いた車に対しても、領内の問屋や、材木関係者からの車に対しては、飼料などの給付であるにもかかわらず、「河原者」に対しては、1貫文を数度にわたって支払っている。

「番匠」への褒美は特に、棟上げの機会などには高額であった。門跡の馬や太刀、3貫文など多額の報酬を与えている。

第2章の善阿弥の賃金では、長禄4年(1460)12月8日の条に善阿弥が5000疋という多額の褒賞をもらっている。この褒賞は善阿弥個人へのものか、或いはその集団の長としてのものかは検討を要する。善阿弥に対しては、大乘院寺社雑事記の寛正6年(1465)9月12日の条では1000疋など、多額の賃金が支払われている。しかし同大乘院寺社雑事記の文明3年(1471)7月5日の条にあるように、善阿弥は自らの日当としては30疋、これは、当時の井替えなどの「散所」の日当が10疋という例が多いことから検討すると、頭領格の日当としては特別多額なものではない。しかし引き物として2000疋与えられ、さらに手の者や惣中に日当や引き物を支払っている。このような賃金の支払われ方から考察すると、例え、善阿弥のような高度な技術者でも日当として支払われるものと、別に引き物として褒賞のように支払われるものがある。いずれにせよ、その背後に集団の存在が伺われる。

応永21年(1414)の造営方算用状(『教王護国寺文書』巻3、1005)では、「散所」の人夫に10文、「河原者」には60～70文支払われている。さらに大工番匠には一人100文ないし、120文であった。15世紀の初期の時点でこの三者の職能の対価が比較できる史料でもある。すなわち、「番匠」、「河原者」、「散所」の順に対価が支払われ、職能の確立の度合いが類推されうる。賃金は貨幣とは限らず、布や酒、滞在中の住居の手配等も含んでいた。

また、「散所」に関しては、北野社の日当程度(日に100文)が史料上に多く見られるが、高度な技術力を持っていたとされる穴太の石積み衆などは、初期には、権門に領有される土地の中で、労力を使役されていた場合が多いと考えられるが、16世紀の末期に、「穴太駿河」などと命名され、専門化と呼称を持つとい

う職能者としての確立がみられる時点で作料を受けとっていた。

これらのことから、さまざまな集団による仕事の受注のあり方と、賃金の受領体制の成立過程が検証される。

（２） 他の事例から

「河原者」や庭者の賃金についての考察は、前述したように脇田¹²や川嶋の論述があるが、さらにくわしくその経年変化を追って見た。応永21年（1414）の造営方算用状（『教王護国寺文書』¹³巻3、1005）を以下に抜粋する。

「三月六日 三十文 散所人夫 三人 十文 二郎 同十六日 百八十三文 河原ノ者三人一人別六十文 二百十文 酒 御坊中人公人方・河原ノ者 同十八日 百四十三文 河原者二人 二十文 款冬町人夫二人 同二十日 一貫三百文 番匠十二人手間」ここでは、一日当たり東寺に所属する「散所」がおおむね一人分10文の賃金が支払われているのに対し、「河原者」は一人分約60文或いは70文の賃金が支払われている。大工番匠は100文ないし120文であった。15世紀初めの事である。前述したように正長6年（1428）6月10日の『建内記』¹⁴では、「散所」に対して「河原者」を不浄の者といって締め出している。それが40年足らずの間に、「河原者」は、善阿弥を初めとして、より多くの対価を受けとるまでになるのである。

善阿弥の他の事例でもその対価が記述されている。前出の『造営方算用状』の寛正2年（1461）¹⁵では以下になる。「六月十一日 百二十文 善阿弥・二郎五郎酒直 同月日 五百文 同兩人被下。」これは、善阿弥達の日常的な作業に対する対価と思われる¹⁶。

「河原者」に対する賃金は、貨幣とは限っていなかった。『言國卿記』の 文明10年（1478）11月23日の条によると以下のようにある。「一、今日モ当番也、かわサキ今日参、石ニ物共ヲ付了、一、かわサキ暮程に罷帰也、御小袖ヲ被下了、梅染也、畏入由 申也、面目ヲモイテ也、夕飯モ民部卿ウケタマワリクワセラレ了、」つまり小袖などの反物を賜ることもあったわけである。おおむねは、「河原者」に対する賃金は、施主である将軍家にしろ寺社であるにしろ、その随意という事が多かった。

ところが、以下の事例もある。寛正3年（1462）11月16日 『東寺廿一口方評定引付』（『東寺百号文書』ち17）では以下のように述べられている。

「一 宝巖院之松事、昨日十五日公方へ二本共引進上候、仍河原者申、事外大儀身勞仕候由、種々歎申候間右雜掌も、此子細申候間、披露之处、式百疋被増、都合拾老貫文可被遣由、評議了。一 宝樹院松入足事、都合十四貫余、折紙披露申候了」これは、当時宝巖院で働いていた「河原者」が、仕事の大変さを訴え「式

百疋」という賃金の増額を勝ち取った記録であり、ここに「河原者」の賃金に対する主張が通った例である。

賃金体系の確立は、職域の確立でもある。15世紀の初めには、散所人夫と大差ない賃金であり、また禁中からも締め出された「河原者」は、それから約40年の間に、作庭を専門に担うものとして認められるようになると共に、集団化の形成もみられるようになる。そしてその過程では、彼等の必死の主張や権利を戦い取ってきた歴史があった。

3-1-3 身分と職能集団

（１） 前章までのまとめ

① 身分に関して

まず、身分に関して。既往研究史からは、森末義彰を中心とした初期の「散所」論の形成と林屋辰三郎による古代からの賤民社会の継続性という定義づけ、そしてこれらの古典的散所論に対する脇田晴子を中心とする問題提起とその発展などがある。これらは部落史の源流としての課題意識の高まりとともに、この10数年間である種の到達点に達したといえる。それは、これらの「散所」や「河原者」を「非人」と関連させての位置づけで捉え直し、且つ「非人」の定義や発生の源流とその発展段階における多様な形成過程を論ずるものである。

しかし、身分制におけるこれらの諸研究は三浦圭一などに代表される各地域や各職能との整合性を見ながら検証を加えていかなければならないもので、本論は造園職能に限ってはいるがその身分制の体系に関しても考察を付加できうと考えている。

例えば、第1章での北野社にみられる造園職能の形成では、応永4年（1397）、すなわち14世紀の末には散所法師が庭の掃除や管理に当たっているが、15世紀中期にみられる掃除を行う職能における各階層の位置づけが興味深い。整然と神前から大道に至るまで、宮仕、主典、西京神人、そして西京散所と「河原者」がそれらに続く。この階層による段階分けは身分的な高低と領有の程度に負うものであろうが、「散所」と「河原者」の職能者として、或いは身分としての区別が見られる。

ところが、「河原者」の赤による焼けあとや死体の処理という仕事の申し入れとは裏腹に、朝廷へと寄進する梅の木への選別に関しては、「河原者」の赤の意見を取り入れている。身分の上下という意識や賤視されていた不浄のものという意識は、彼等の技術的意見を取り入れることに対する障壁には全くなっていない。近世以降の、身分意識上の差別感とは異なる意識がそこには見られる。

「散所」の新三郎の検封に関しても被官の重複性など、身分的な不安定性というよりは、従属性における往來自由の流動性が表象されている。身分的には北野社では、一般民衆が普請に関わる場合は夫役としては在家や「散所」とともに「河原者」も使役され、しかし賃金からみてもその独立性が見受けられたといえよう。

ところが、第2章などで検討したように善阿弥という「庭者」としては最高の評価と地位を得た者の周辺では少し状況が異なってくる。義政による過度の寵愛は相国寺の僧に「甚だかたじけない」と言わしめるほどであったが、これは同時に権力の頂点にいる者と身分的には低い「河原者」との親交という特別な場合であっても身近にそれを見聞する立場の僧には差別感が日常的にあったことを示す。これは善阿弥の孫の又四郎が第5章で紹介するように、「屠児」の生まれを嘆いていることとも整合している。本論では善阿弥の若年期と推定している「河原者」の帟が義教の勘気に触れることを恐れながらも、職務に励みその地歩を固めていることともあわせて、低い身分の彼等がその職務を忠実に遂行していく中で職能を発展させてきたことを検証している。

② 組織に関して

第1章で検討したように、「散所」、特に北野社所領の西京散所法師などは、領有されている中で、北野社の官仕に属する沙汰承仕が、諸役を命じ、且つ賃金などを支払う役目を果たしている。その賃金の例をみると概ね、一人当たりの日当は10文で、頭領的存在に値する賃金の支払いや褒賞等は見当たらない。一方、北野天満宮史料『古記録』の永享8年の条(p196)では、松梅院の庭石の將軍への進上に利用した車の支払いに関して、川原者には1貫文という車代を数度支払い、西京の車に対しては、大きな対価は支払われていない。これは、川原者が車を所有していたと考えられる。(西京が車を所有していたとしても、これは、もともと北野社の所有と考えられ、西京散所等に属する財産とは考えられないが、川原者が車を所有するとなるとこれは、その集団で所有していたとの考察が可能である。

他にも、赤が北野社炎上の際に申し入れをしている際に見うけられる、「千本」や、「一本杉松」の「河原者」の存在など、集住と組織の編成が伺われる。

森田竜雄¹⁷が、組織の形成にかかわる当時の「非人」の長吏支配について述べているが、奈良の五ヶ所・十座の編成にもみられるように「非人」による集団編成とその座的支配が既に存在していた。

作庭などの造園職能にみられる組織自体に関しては、周知されている史料は見当たらないが、第2章に見られるように、川原者の帟(善阿弥の若年期と見られる)は、数人で樹木の検知や運搬を担っている。さらに善阿弥に対する賃金の考察に関する史料では、『大乘院寺社雑事記』の文明3年(1471)7月5日の条に記

述されている、「手の者」、「惣中」と呼ばれている集団に着目する必要がある。善阿弥を輩出した背景に技術的水準の高い組織的な集団の存在が考察される。

また、その組織の内容に関しては、第2章で詳述しているが、蔭涼軒日録にみられる相国寺で盆山を扱っている条で、善阿弥や息子の小四郎を始めとして、彦三郎や彦六、次郎五郎などの「河原者」、また、左近四郎などの作庭者などと協働して作庭に携わっている。史料を整理すると、特に彦三郎や彦六などと善阿弥は、住や職を共にしていたことが理解される。

施餓鬼に関する記述では、応永29年(1422)9月の『看聞御記』に以下の通りある。「六日。雨降大風吹。所々吹破。御所門以下破了。於河原今日大施餓鬼依風雨延引云々。七日。晴。・・抑河原施餓鬼事勸進。野僧為張行。・・又勸進僧と河原者喧嘩出来、僧一兩人被突殺了。施餓鬼供具等散々取失。河原物取之。」このように、勸進僧と「河原者」がこれを争って喧嘩をし、刃傷沙汰の殺人事件にまで発展した例が見受けられる。第2章でも善阿弥が領取となって施餓鬼が行われている。河原者や庭者が、施餓鬼を巡って集団としての利益を争っていたのである。

(2) 他の事例から

例えば『大乘院寺社雑事記』の長祿2年(1458)閏1月3日の条では次のようにある。「河原物来、木共検知之、糸桜一本、白檜一本、檜一本可進云々、酒等給之了」つまり、「河原者」が来て、樹木の検知を行い糸桜一本。白檜一本、檜一本を進上すべきであると言っている。さらに酒等を「河原者」にふるまっている。また、4日には次のようにある。「為木検知内山、釜口両所へ京都御奉書並河原物召遣了、寛圓同下之者也、馬己心寺ニテ借用之」すなわち木の検知のため京都御奉書ならびに、「河原者」を遣わしている。馬は己心寺で借用しているとある。

さらに5日には次のようにある。「釜口ノ使帰参ス、木注文、靈山院岡松四本・五葉一本、以上、阿弥陀院岡松四本以上、文殊院岡松一本笠五アリ、柿一本以上、成就院白檜二本以上、明王院南天笠カフ一本・岩躑躅一本以上、窪院五葉一本笠五アリ以上、知足院富士松二本以上、普賢堂岡松二本、白檜一本笠五以上、池坊松一本以上、合廿二本云々、悉以可進上旨申定之、云上使云河原者以下、悉以日中等令用意、為惣山給之云々、河原者ニハ二百疋、為門跡可被下之由ヲ申テ、二結分上使ニ可渡云々、次木共事、彼寺ヨリ可上京都事大儀者也、為門跡被上候て、可被下之由申入之、五百疋分御札ヲ可令申云々、誠以大儀也」。

ここでは、特定の樹木が注文され、岡松、五葉松、柿、白檜、南天、岩躑躅、富士松、白檜などを進上すること、そして「河原者」に対する二百疋という報酬の支払い等が、負担になっている様子が伺われる。さらに「御使以下ノ沙汰同釜

口、二百疋茶二十袋河原者ニ給之云々、上乘院之沙汰ナリ云々、次百疋為惣山申入御礼了」とあり、賃金だけではなく、茶なども支給している。また、さらに酒直も与えている。同日、「河原者兩人ニ兩種ニテ酒給之、并粮物三百疋給之、練貫一重同給之了河原者名ハヒコ三郎、エモン云々、畏入之由申入之、一乗院ヨリハ二百疋給之云々」とあり、様々な褒美を与えている。この大乘院寺社雑事記に見られるヒコ三郎は『蔭涼軒日録』に彦六と共に頻出している彦三郎と同一人物と考えられる。

『大乘院寺社雑事記』での記述の寛正2年12月9日には「内山并山寺木共京上了、人夫五个所・十座合九人、白楨二本、平木一本、口無一本、柘榴一本」とある。この五ヶ所・十座は奈良における土木作業集団として著名なものである¹⁸。大乘院では樹木を進上するだけでなく京都に運ぶ人夫を奈良の五ヶ所・十座から調達している。

ところが、『大乘院寺社雑事記』の長享3年2月13日(1489)の条には「六方自辰貝蜂起集会在之云々、自学侶両門奉行召寄集会所東室者也」とあり、六方衆が蜂起して「河原者」を襲撃している。善阿弥に対しては別格の扱いをした六方衆も時代が下り、「河原者」が樹木を検知するために興福寺を縦横に検分した際には憤慨して蜂起したのである。

最後に、第3章で検討したように、例えば、善阿弥に対しては奈良の興福寺における庭園の改修等に六方衆がその住居を作ったにも関わらず、その数年後には、一同が蜂起して「河原者」を襲撃している。これは室町幕府による過度の樹木や人夫の徴用、「河原者」への酒直や賃金に対する負担のみならず、「河原者」という集団に対する差別意識と密教系寺院の幕府に対する反発も手伝って、蜂起という事態までを引き起こしたものだといえる。

一方で、後述するように御胞衣蔵という儀式では將軍の嫡子の胞衣(臍の緒)の埋蔵を「河原者」が松などの植栽と合わせて行っている。その呪術性や触穢という職能の特殊性と合わせて、かれらの身分的な差別の意味が現代における語彙としての「差別」の持つ意味性と異なるものであることを察知しなければならない。ある種の畏敬の念がそこには含まれている。その原因となった背景と職能についてさらに、論考を進める。

3-2 清めの職能から作庭へ

3-2-1 呪術的側面

何故、被差別民であった「河原者」が人格を認められ、作庭家として名を成すまでに至ったかという点については、前述したような「河原者」の集団としての

職能の分化や職域の確立と、その自らの存在をかけた作庭に関する主張を成したという点が挙げられる。さらに中世という触穢思想に満ちた時代において、清めの職能や呪術的な領域に精通していたことが、上の二つの要因にあわせて彼等が認められる契機となった大きな要因の一つではないかと考えられる。個別的な造園や土木技術が、呪術と深く結びついていたことが、以下の事例から考察されるのである。

(1) 中世の遺跡や呪術

① 草戸千軒

広島県西部にある福山市の西を流れる芦田川の河川の河床に残されている草戸千軒町遺跡は中世の集落で、常福寺(現明王院)の門前町として繁栄した街である。芦田川の度重なる洪水に洗い流され、今日では河底には全く遺跡を失い、僅かに中洲と東岸に遺跡をとどめるにすぎない。しかし中世の民衆生活の様子を伺い知るものとして貴重な史料を提供している。時代的には、鎌倉時代から室町時代の村落と推定されている¹⁹。昭和46年の発掘調査C2地区第4井戸には、直径約4メートルに及ぶ不整形プランの堀方での井戸の中央に、長さ約60センチの竹が立ててある。その先は、井戸底の石敷近くにまで達していた²⁰。現在でも県内の井戸の廃絶に際して、竹つつを立てるという水神信仰がある。又、ガス抜きとして同様に竹をたてる慣習もある。井戸の中に竹を挿し立てる風習は、江戸時代ではあるが「古井戸うづむ時の符」(『増補咒咀重宝記』²¹)に、「金貴大徳、此四字をかきて井のそこの中に立べし」とあり、広く一般に流布していた。金貴大徳の呪句の意義は、守宅神の5人の子供達に付けられた名前であり、守宅、鎮家の願いが込められていた²²。井戸内の埋土が、全て砂層からなることも、清砂と考えることができるのであつて必ずしも洪水に基づく結果とみる必要も無い。又、昭和51年7月の発見では、井戸SE1015に三宝荒神符と呼ばれる呪符が見られる。これは井戸を作るときに意識的に持ち込まれたと見られる²³。遺構から出土する呪術関係史料からも修験道などの信仰が人々の心を深く捕らえていたことが伺える。草戸千軒にみられる墓の形態の多様な実態もこれらのことと、深く関わっている²⁴。

このように、「河原者」が井戸の造成に特に用命された事と、出土している遺跡等の史料からそれらの井戸の作成や廃棄に関して呪術が深く関わっておりその中で「河原者」が、重要な役割を占めていたことが伺われる。又、何故竹の筒が使われたかと言う点に関してだが、竹の持つ霊力に対する信心²⁵と「河原者」が竹細工に関わった事例が背景に考えられる²⁶。

② 石垣と呪術

前章で述べたように、石垣づくりにも、「河原者」が活躍した。『兼見卿記』天

正11年（1583）10月「4日、5日より自竹田梅松一軒、・・・此間妙顯寺普請度々雖相觸不来之由、為催促兩人申付之由申了、予云、・・・卒度催促不及覺悟之由 申理了、不相済之間、玄以へ之奏者松田松右衛門尉へ遣喜介、・・・以下略」

これによると、妙顯寺屋敷普請に吉田社の「河原者」が徴された。しかし兼和がこれを拒み前田玄以に訴えている。それで船橋枝賢と共に妙顯寺に玄以を訪ねている。さらに真如堂を訪れ、東陽防長盛と相談している。東陽防は「河原者」の使役は足利義昭の時の例を見習えば良いと言った。織田信長が義昭の為に城を造った時は無役だったので、今回もその必要はないと述べている。但し、義昭が自分で槇島城を普請した時は、勤めなければならなかったとしている。このいきさつからも「河原者」が城の普請、特に石垣の普請に徴用され、そしてそれが大問題になっていることが伺われる。信長が穴太²⁷に石懸けをさせている例もある。『兼見卿記』天正6年（1478）9月22日の条には、「庚午、向村長、明日右府（信長）御上洛之旨也、召寄穴太（近江滋賀郡坂本）兩人石懸、神壇之西、横五間、堅四間計与欠。」とある。

穴太の資料としては、中原康富が、嘉吉3年（1443）に、清原業忠に相談された内容に丹波隼人保に住む穴太の道法の名が挙げられているが、彼等は清めの庭掃と同様の賤民であったと考えられる²⁸。近世城郭における石垣様式は、石積様式や城郭遺構の手法において乱積、布積、落し積、亀甲積、備前積など天、地、人のいわゆる陰陽思想が縦横に使われている²⁹。これらの事柄からも呪術性が普請に大きな影響を与えていたこと、そしてまたそれらの石垣には陰陽思想的な背景が色濃く反映されていたことがわかる。

③ 井戸堀

例えば「河原者」や声聞師が井戸掘りなどの土木的な作業に従事し、またそれらの作業が呪術的な行いの事例と深く結びついていた例を挙げてみる。井戸づくりに関係した事例には次のようなものがある。

声聞師が井戸を掘った例もある。『宣胤卿記』によると永正15年（1418）6月17日には「北庭普請、内蔵頭、左少弁等夕飯、中納言方」とあり、19日には「申付唱門師令堀井、二百疋ニテ」、20日には「小雨、晚晴、余方南庭令立石築山、申付河原者」、22日には「南庭河原者来、沙汰同前」とある。これらからすると声聞師が二百疋で井戸を掘っているが、これは声聞師の持つ呪術性が効力を発しているのではないか。また、庭に石を立てたり、築山していたりするのは「河原者」である。声聞師と「河原者」で分業している。

『兼見卿記』天正9年（1581）4月17日の条では以下のとおりある。

「十七日、庚戌、雨降、自丹州宇津（桑田郡）惟任日向守（光秀） 書状到来、

当城堀井、河原者山、相添此者急度可罷下之由申来、即申付、差下返状、美濃柿百到来。」

明智光秀が、丹波の宇津城に井戸を掘ろうとして吉田兼見に書状をよこし、「河原者」の派遣を依頼した。すぐにこれを申し付けて返事を出したところ、礼の美濃柿を送って来た。何故「河原者」に特に命じて井戸を掘らせたかという点については、井戸にまつわる呪術行為に関して眼を向けて見る必要がある³⁰。

④ 胞衣収め

「河原者」や「散所」が道路の清掃や死体の処理に携わっていたことは繰り返し述べてきた。この場合の清掃は単に「清掃」という言葉の意義をこえ、死穢を払うという中世における触穢観と密接に結びついたものであった³¹。それゆえ権門勢家の奥深くまで入り込んでいた。例えば産褥の後の御胞衣蔵（えなおさめ）という儀式もあるがこれについて述べた文章を挙げてみる。

『親元日記』寛正6年（1465）12月2日の条によると以下のようにある。

「二日 乙亥 天晴 御胞衣蔵、貴殿即御胞衣出長唐櫃ニ入テ、政所公人兩人相副之、貴殿御吉方正東也、仍東山御出御供、浄土寺門跡北小松山也、於此所又白直垂被着之、河原者三人掘土之典薬頭御胞衣を蔵申候、土を懸そめて河原者埋つミ終て上に松をうえる。」

この御胞衣蔵という儀式では産後5日から7日の間に、「河原者」が政所公人と立ち会って胞衣（えな）すなわち胎盤を山中に埋め、その上に「河原者」が土をかけ松を植えている。貴殿と言うのは奉行人をさし、政所公人とは室町時代では下級役人をさしている³²。ここには将軍家から、奉行人、政所公人、「河原者」らの登場が見られる。何故、「河原者」がここに立ち会ったか。それは穢れを取り除く清めの儀式がまさに「河原者」の職域であり、その役割に従事していたからと考えられ、単なる儀式における労働力とは考えにくい。このような、穢れの解消としての清めの職能に従事していた「河原者」の存在が、上層社会に出入りしその内部にまで入り込む機会を「河原者」に与え、さらに穢れを受け止め得る存在として、一種の畏敬の念を抱かれえたのではないだろうか。賤視されていた清めに従事する「非人」の階層であった彼等は、それらの仕事と深く結びついていた民間信仰的な陰陽道や呪術を、その技術の一部として身につけ、その蓄積が「河原者」をして、人々に作庭家として認めさせた一つの契機となったのではないか。

3-2-2 技術の発展

技術の発展に焦点を絞る。第2章の北野社の史料中では、主として掃除に関して西京散所が使役されている。「散所」は主として井替えなどの清めの技術に使われているが、「河原者」は、より、造園的職能に従事し、賃金もより高額な日当が支

払われている。技術的には、「河原者」が庭石などの重量物を運搬する車を単独で所有していたと考えられることから、集団内の技術力が高まっていたと考えられる。

善阿弥と同時代に活躍し、北野社に出入りしていた「河原者」の赤は、禁裏からの注文に対して、「和泉式部」という名称のついた梅の木の選定を進言しており、樹木の検知等に相応の眼識があったことが伺われる。

第3章の善阿弥に関しての技術という側面では、その作庭技術の高さは、さまざまな史料中に多く見られる。善阿弥の若年期と考えられる「河原者」の帋は、蔭涼軒日録では虎菊として、將軍の庭に雑木を移植するかについて、虎菊が言い出して、お伺いを立てている。また、帋に命じて、松等の検知をさせ、運搬にも関与させている。帋は主体的に室町殿や蔭涼軒で作庭に従事し、將軍から命じられて、蔭涼軒の庭の検分にも来ている。以上、主体的に造園職能に携わった「河原者」の存在とその技術力が伺われる。

善阿弥と名乗ってからの、評価は突出したものであり、蔭涼軒主の「天晴、前々往于睡蓮、見築小岳、善阿所築、其遠近峯礪、尤為奇絶也、対之不飽、忽然而忘帰路也」という感嘆がその芸術性の高さを物語っている。また、優れた盆山を鑑賞しに来たことが記述されているのは、善阿弥自身の技術力の裏付けでもある。

善阿弥の高齢化に伴って、彦三郎や彦六、次郎五郎、そして左近四郎などの造園職能に携わり、將軍家や蔭涼軒の作庭に関わるものが続出する。

これらの技術を考察すると、当時は呪術と密接な関係性を持つもので、草戸千軒の遺跡に見られる井戸の中の呪符や、御胞衣蔵（えなおさめ）の儀式に見られる「河原者」の役割など、さらには、善阿弥の孫でやはり優れた作庭家として知られた又四郎の言から伺われる陰陽道と仏法の混在など、現代的意味における技術と呪術性の混在が当時の造園職能には内在している。

これらは、かような造園職能民の卑賤視された要因ともなった清めの職能における呪術性の有無と相互関連を持っている。すなわち、差別をうける要因となった穢れに触るという職能がまた、特殊な技術性、つまり呪術性を付加し、特化した存在にもなりえた事。また、そのような現代的価値観とは異なる価値体系の中で錯綜した触穢観、差別性の中に翻弄されながらも独自の技術力を研磨してきた造園職能に携わった階層の上昇志向が伺われるのである。

3-3 「山水河原者」の最後

桃山時代の「山水河原者」としては、与四郎と賢庭が上げられる。『義演准后日記』³³の慶長3年（1598）6月3日の条では、「川原者与四郎兄弟三人、今

度門跡庭作之為見舞参、帷賜之、於伏見太閤御所御庭、門跡庭ヲ致ス後ニ被仰付、作之由申入了」とある。すなわち、川原者の与四郎の兄弟3人が、醍醐寺三宝院を見舞っている。帷を賜わり、醍醐寺の作庭をした後に伏見の太閤の御庭にかかるようにと仰せ付けられている。この頃の人々は、慶長4年の条に「常御所小壁下塗、大都出来、臺所今日塗之、落花トイエットモ見物群集」とあり、花見に群れをなしていた。豊臣秀吉の命を受けて「河原者」の兄弟三人が醍醐の三宝院を訪れている。翌4年閏3月5日から与四郎は金剛輪院こと今日の三宝院の立石を始めている。翌5年2月1日にも義演准后が石田村より梅の木をとりよせるにあたって、与四郎がその移植をし、あわせて石組みも行っている。

慶長7年(1602)2月11日の『義演准后日記』には、「泉水意石橋懸之、賢庭参、武州入西郡越生報恩寺慶秀法印御札申入了」とあり、秀吉の時代を過ぎると、金剛輪院の作庭者として賢庭の名が出てくる。慶長7年（1602）以後、その作庭は賢庭に任される。賢庭の名前は院御所（御陽成院）の勘定で賜ったものである。『義演准后日記』では、慶長20年9月3日、その日記の中でそのことを教えている。「天下一上手度々召寄、石立様非凡慮」と書かれている。慶長7年2月23日石組みの完成にあたって賢庭は300疋賜っている。慶長13年（1608）4月29日、再び、金剛輪院を訪れ、改造工事にあたり、翌11年に及ぶ。慶長20年にも修繕している。

江戸時代の賢庭は幕藩体制の末端に位置することとなる。寛永7年（1630）には加賀藩主の前田利常の依頼で金沢城本丸の築庭にでかける。その後、小堀遠州のもとで、南禅寺金地院の方丈前の枯山水を作る。これは、寛永9年（1632）に完成したとされる。黒川道祐によると『遠碧軒記』の中で次のように述べられている。「庭も賢庭などまでは穢多なるを、玉縁など出てより常の者の所作になる。」。寛永ころになると作庭はかならずしも「河原者」の所業ではなくなったといえる。「河原者」はここで「常の者」の身分を獲得したのである³⁴。

伊藤ていじは、この枯山水には茶庭の影響が見られるという。大成された枯山水と茶庭との融合がみられるのか。先ほど述べたように、山居の体をなした、町家の庵や茶室と民衆の土着の風体や「河原者」や声聞師、「散所」などさまざまな底辺社会にいた職人的技能者の長年における技術の集大成がこの金地院の庭にあるのであろうか。

江戸時代の史料には『京羽二重』³⁵（貞享2年[1685]）の1巻には諸職業として、京極通りの「井筒」、「庭石」や川原町通りの「石井筒」、「庭石」、また、七本町通りの「植木屋」、四条通りの「作り花」、五條坊通りの「材木竹」など造園に関係する多様な職種が成立していることが伺われる。また6巻では、「庭作 からす丸あやノ小路下ル町 道花」とあり、庭作りとして専門業者化した職人の存在

もみられる。また、『隔蓑記』の慶安3年4月24日(1650)の条には「詣北野菅神、而北野草花屋、木屋、令見物也」とあり、草花、樹木専門の店が出現している。

3-4 まとめ

以上に考察してきたように、不毛な河原の地に居を定めていた「散所」、「河原者」などの「非人」の輩は、賤視された中においても一族郎党を基とする集団を形成し、彼等の精一杯の主張を繰り返しながらもその職能と職域を広げて来た。その主張は他の集団と争うときにもみられるし、又賃金にたいする要求の際にも顕著である。穢れを怖れる中世に生をうけ、清めの職能に従事し、陰陽道や呪術に精通していたことが彼等をして民衆社会や権門の中に深く入り込ませ、その存在感を植えつけさせる事ができたのではないか。又、そういった土着的な民間信仰を通じて一木一草或いは一個の石にも宿る霊性と普遍性を庭園に具現したのではないか。つまり彼等の社会的役割の変遷や個々の主張のみならず、「非人」として請け負わされていた造園や土木作業的な技術とあいまって、触穢思想にみちた時代における民間信仰的な清めの穢や呪術が、一つの道筋として「河原者」等の賤民をして、天下に認められる作庭家を輩出する大きな契機となったと考えられるのである。

注・文献

- ¹ 原田伴彦編(1984):編年差別史資料集成:第4巻:中世編2:三一書房
- ² 京都の部落史(1984):3史料古代中世:京都部落史研究所
- ³ 教言卿記(のりとききょうき)室町時代の公卿山科教言の日記。1405(応永12)から1410の自筆本が残る。
- ⁴ 東寺に伝来した文書群の名称。京都府立総合資料館蔵。中世における東寺の供僧の寺院活動や荘園経営等の過程に蓄積された文書。
- ⁵ 満済准后日記(まんさいじゅごうにつき):醍醐寺座主満済准後の日記 応永18年(1411)～、満済は將軍護持僧で足利義持・義教の信頼が厚く、義政に深く関与したため、当時の幕府の重要会議の議事内容や管領以下諸大名の動きが詳述されている。
- ⁶ 建内記(けんないき):『建聖院内府記』の略。中流貴族万里小路時房の日記。約50巻。応永21年(1414)～。室町期の公家社会、室町幕府。家領荘園などに関する記事が多い。
- ⁷ 蔭涼軒日録:文正1年(1466)3月16日
- ⁸ 重森三玲(1973):室町の庭1:社会思想社,42
- ⁹ 京都の歴史3:近世への胎動:京都市市史編纂所,592
- ¹⁰ 村山修一(1981):日本陰陽道史総説:塙書房,194
- ¹¹ 蔭涼軒日録:延徳4年(1492)4月22日
- ¹² 脇田晴子(1982):部落の生活史4:部落:34(1),76-78
- ¹³ 東寺伝来文書の一つ
- ¹⁴ 『建内記』に以下のようなある。「禁中川原者穢多事也参入、於御庭事被召仕之、為不淨之者不可然之 処、自去年被停止、被召散所者声聞師事也 珍重々々。」
- ¹⁵ 教王護国寺文書巻5,1686
- ¹⁶ 河原者の専属に関しては、「京都の歴史3」(1958):京都市市史編纂所,584によると、「蔭涼軒河原者」「公方御河原者」等それぞれ主家が決まっていたとしている。
- ¹⁷ 森田竜雄(1995):中世後期奈良の声聞師集団に関する一考察—その構造と展開—部落問題研究133
- ¹⁸ 大乘院寺社雑事記等に五ヶ所・十座の記事は頻出する。例康正3年(1457)6月16日、寛正3年(1462)8月12日など
- ¹⁹ 水野正好(1977):三宝荒神符と天中の呪句:草戸千軒47,1-10
- ²⁰ 水野正好(1976):竹筒をのこした一井とその秘呪:草戸千軒36,1-7
- ²¹ 安永10年(1781)に改正された。
- ²² 水野正好(1978)金貴大徳の呪句と埋井の呪儀:草戸千軒58,2-8
- ²³ 同掲書23),2
- ²⁴ 福島政文(1985)草戸千軒検出の中世墓:草戸千軒149,1-4
- ²⁵ 沖浦和光(1991):竹の民俗誌:岩波書店,36,91
- ²⁶ 鹿苑日録 天文6年(1537)8月1日
- ²⁷ 井上宗和(1973):城:法政大学出版会,143「織田信長が安土城を築く際、大津付近『穴太』に在住する石工たちが石垣構築に駆り出され、石積の技術をふるうようになった。彼等は、全国に招かれた(穴太衆)。その後各大名に属する石垣構築の技術者らを穴太役というようになった。」、「穴太」の地名は近畿に散在する。
- ²⁸ 三浦圭一(1982):部落の生活史6:部落34(2),80-82
- ²⁹ 北垣聡一郎(1979):史泉50:関西大学史学会,192-219

³⁰ 三浦圭一(1982)：部落の生活史 9：部落 34(2)，73-75

³¹ 大山喬平(1976)：中世の身分制と国家：日本歴史 8：岩波書店、297-313

³² 部落史史料選集 1 (1988)：部落問題研究所、346-349

³³ 義演准后日記(ぎえんじゅごうにっき)：醍醐寺 80 代座主義演の日記。62 冊。記事は慶長 1 年(1596)～寛永 3 年(1526)にわたる。醍醐寺再興の過程など寺内の動向のほか、豊臣、徳川政権の寺社政策などを記す。

³⁴ 伊藤ていじ：(1980)：枯山水：

³⁵ 京羽二重：京都叢書(1971)臨川書店：京都案内の趣味と実益を兼ねた本、作者不明全 6 巻あるが、最後に貞享 2 年 9 月吉日と記入がある。

第 4 章 造園職能民の発展・・・近畿に見られる石垣を積む職能

4-1 はじめに

中世後期から織豊期にかけての寺社や城郭の石垣の造成に関わる職能形成については、沼田哀頼輔¹を始めとし様々な議論が展開し、北垣総一郎²によって集大成された。坂本で石垣積みを行っていた穴太に住む人々がが早期の段階で穴太衆として職能を確立し安土城の建設にあたったという北垣の見解に対して、近年の考古学に基づく同時代の技術集団としての穴太衆の存在に疑問を持つ一連の論文³も発表された。石垣積みの職能形成に対する見解は初期の段階に確たる職能が形成されたという説には批判的な展開で論考されている。この章では、史料や日記等の検討を行って石垣を積む職能の変遷を追い、中世後期における寺社に属する「散所」の土木作業集団や説話の背景にみられる坂本の穴太散所、信長以前の近江地方における戦国大名の居城石垣の建設時にみられる座の支配、安土城建設時の『兼見卿記』にみられる穴太と他の職能との比較などについて検討した。さらに現存する遺構の分析を通じて、信長までの近江の石垣積みの職能が、坂本の穴太以外にもそれぞれの在地で形成され、技術力を進化させてきたことを考証した⁴。その結果、石垣積みの職能形成は、権門寺社に従属或いは半隷属した「散所民」を含む集団等から発展し、権門勢家との結びつきや技術の発展を促す契機が存在によって各地で発展を遂げてきたことが考察された。以下にその概要を示す。

4-2 史料や伝承等の記述に見られる石垣普請と穴太散所

4-2-1 穴太伝承への疑問

江戸時代の『明良洪範続巻 5』⁵に以下の文がある。

「信長公天守を建てられし時、同国の事故、あのふより石工を多く呼寄仰付けられしより、諸国にても此を用ひしに、次第に石垣の事上手に成りて、後には五輪を止て石垣築のみを業としける、以来は諸国にても通名になり、石垣築者をあのふと云習わしける。」とある。これは江戸時代のしかも伝承であるため、石垣積みの職人としてのあのふ(穴太と考えられる。)の前身が単に、五輪塔などを作っていた石工であるとの内容や、信長時代にどこまで技術集団として確立されていたかなどには疑問が持たれている⁶。近江には馬淵村など、五輪塔や石臼などの製作に携わる石工の存在が文書にも現れている⁷。上記の石工のみならず、権門寺社に属し、造園や土木的な作業に従事していた民⁸が各地で石積み等の作業に従事しておりこれら従属的な立場にいた「散所」の民が、人夫役などの公事に従

事し土木的な技術を蓄積していったと考えられるので、以下では「散所」に関する史料や寺社に属していた衆が石垣の構築に関わった事例を検討することによってその系譜をたどってみる。

4-2-2 「散所」と職人の形成

「散所」の定義についてさまざまな論考がなされてきた。初期の散所論では中世前期の「散所」は本所に対する散在所で、被賤視されていたものではなく、領主への従属性を有していたが、後に中世後期になるとそれらの非農業的側面から、差別されたものに変容したものと考えられていた⁹。中世後期の散所は、地子物の免除の代償に雑役を勤めた「散所法師」や「河原者」などの賤民やその居住地として捉えられてきた¹⁰。前述したように、中世後期における散所は土木作業や造園等の雑役に従事した非農業的側面や領主への従属性を卑賤視への要因とした階層として転化したと位置づけられていたわけである¹¹。ところが、序章で述べたように、中世前後期にわたっての「散所」を包括した概念として「非人」が考察され、「散所」の語彙性も変化している。散所非人は中世前後期を通じて散所召次などの従属性を持った階層とは区別して認められるようになった¹²。本章では穴太散所や近辺にみられる地域や職能としてのあり方を検討した。

「説教節」¹³といわれる近世初期に操り芝居と結びついて流行した語りの中で「穴太」や「法師」の言葉がみられる。生まれの高貴な若者の放浪が描かれ、「四条河原の細工」が出現することから中世後期の時代が反映されている。文中には「比叡の山に上らる。」「穴太の里に出で給う。」「あたりに近き法師たち。」「法師は山に帰りける。」と穴太の里山に法師が存在していた様子が表現されている。この法師が住んでいたところが、いわゆる「散所」と呼ばれた地域であるが実際にはどのような実態であったであろう。

「穴太」を冠する穴太散所と呼ばれていた階層は次の史料に見受けられる。「続正法論」では以下の記述がある¹⁴。「(八月) 来廿八日神輿入洛事、三塔既令一同之間、更不(可脱力)有豫儀之处、西坂路次陰呑無極条、穴太散所法師原存奸曲故也、所詮明日廿六日巳点、令登山、重可造之旨、可被加下知、敢無余日上者、争存緩怠哉、嚴重可被加炳誠事。」これによると、神輿が入洛するというので、命令したところ西坂の路次が大変剣呑で通りにくい。穴太散所法師の「奸曲」即ち悪しき仕業のためである。日もないので、山に登らせ重ねてこの道を作り直させるようにと命じている。この穴太散所といわれている法師は延暦寺の支配下に属し土木工事に使役されていた階層である¹⁵。寺社の用を担うそれぞれの技術を持ちながら、抵抗を示すという半自立的側面が見受けられる。

森末義彰¹⁶によると足利義尚が近江守護六角高頼を征して諸社寺、本所等に



滋賀県大津市坂本 石垣のある道



穴太の古墳

命じて、近江の所領目録を提出させた時にみられる近衛政家の後法興院記の記事（長享1年8月22日）に次のようにある。「隨身武春息武経来、近州処々奉書被申請之由承及候、御家恩三上庄内左散所事、依注加御領御目録中者、可畏入之由申間、昨日已被遣奉行所、雖然可注進、可被入目録之由仰含了」武遠が譲状に挙げた近州穴尾庄は、近衛家所領目録にみられる穴太庄であって古くから摂関家領であり、室町時代に至っても近衛家を本所として伝領されてきたものであらうとしている。

他にも門葉記の貞和4年（1348）1月18日には直義冥道供で初日に穴太散所に施行しているとあり、穴太が「散所」と認識されていたことがわかる¹⁷。

坂本の穴太には、6世紀から7世紀前半にかけて渡来人が居住した縄文時代の集落跡である穴太遺跡が発見されている。これらの横穴式石室古墳は、自然石を積み上げたもので、後世の穴太積みとの類似性が指摘されているが、直接的な技術の伝承としての系譜は実証されていない。

織豊期までは石垣は主として寺社に見られた¹⁸。石垣構築はこれら散所法師や寺社に属して技能者として土木作業に従事した階層が各地で存在し、時代を経て権門に属しながら佐々木六角氏の観音寺城¹⁹や、浅井氏の小谷城など多数みられる城郭の石垣や土木構造物の構築を契機にその技術を発展させてきたと考えられる。

4-2-3 織田信長以前の戦国大名構築の石垣

信長建設の安土城以前に作られた石垣はどのようなものであったか。以下に信長以前に近江の地で南北に勢力を分けていた戦国大名の六角氏や浅井氏の居城建設に関しての考察を行う。石垣普請に関する史料や実際の石垣における遺構の特徴を実例であげて分析し、石垣を積む人や技術の変遷を追った。

（1）小谷城の存亡

小谷城は滋賀県東浅井郡湖北町に位置し、浅井氏の居城として建てられた。安土城に先立つ建設であるが全山が要塞化していると言っても良いほど多くの郭があり²⁰、高石垣も見られる。大永5年（1525）には城として存在していた²¹。初期ではまだ土塁が郭の周辺に築かれ、石垣が積まれた時期は順次要塞としての城の整備と時期を一にすると考えられる。元亀元年（1570）に信長とその妹婿である浅井長政との間に姉川合戦、天正元年（1573）に落城、天正2年に廃城とある²²。

（2）小谷城の石垣

小谷城のある山間には多数の石垣がみられる。大広間横の本丸の石垣（写真-

1、図- 1)) は高さ2メートル弱で石も小振りで間詰め石も少ないが、隅角部は石の長短を交互に重ね合わせた算木積みの萌芽がみられ、そりはない。ところが、最後の要塞として構築された山王丸東南の石垣（写真- 2、図- 2）は高さが5メートル以上あり、本格的な高石垣の様相を示している。隅角部の稜線はまだ通っていないが、算木積みが見られる。大小の石を配し、間詰め石も多く見られる。勾配も基底部から上部にかけて傾斜がきつくなり、安土城以前のものとしては、技術的にも高い水準にある。山王丸の石垣は信長が改修した可能性もあるが、小谷城の周辺には家臣の土佐屋敷等の石垣（写真- 3）もあり、高さが計5～6メートルの3段で巨石も利用したこの石垣は落城後の改修の可能性も少ない。浅井氏領内に在地の石垣を積む技術を持った職人階層の存在が予測され、彼らが中心となって小谷城郭群の石垣建設時に活躍したと考えられる。但しこれらの職人階層が散所であったか、或いは在家が駆りだされたのか、それとも人身的に従属していた階層なのかを断定することは現時点ではできない。

観音寺城は滋賀県蒲生郡安土町に位置し、佐々木六角氏の城郭として建設された安土城以前の代表的な城郭の石垣がみられる。観音寺の石垣構築に関しては金剛輪寺の以下の史料がある²³。

「八斗 御屋形様惣人所下石垣、打可申之由、被仰出、谷十介殿方被来候、上下一宿飯酒」、「六升 同石垣之事談合衆会酒」、「二斗八升 同石垣之事ニ三上宗右衛門殿江樽一荷遣候分」、「八升 御屋形様御石垣打申候間談合之衆会酒」、「六升 同石垣賄之事西座申候間談合之衆会酒」、「一斗 御屋形様いしがき賄事西座出入申入申候へ共出状仕果候時酒肴」、「一斗六升 上之御石垣之事ニ、三上殿使者十介方、賄之事、西座申通、被仰候テ、御出之時、上下両度飯酒」

この文書で「御屋形様・・・」とあるのは、六角氏でありその居城である観音寺城に金剛輪寺配下の石垣積みの職人が、使われている。その相談に費やした飲食の記録である。その中で西座が賄い（飯代）について申し入れをしており、寺社に従属しながら手工業者や技能者を管理する座が形成されていた。座は寺社に結びつきを持ちながらその自立的発展を内在させてきた²⁴。すなわち安土城以前に既に、金剛輪寺の土木作業者によって観音寺城の石垣が作られていた。当時の石垣普請に、各寺社や権門の擁する技能集団が土木作業のためにやりとりされている。

（4）観音寺城の石垣

山裾部に見られる現天満宮の御屋形跡²⁵の石垣（写真- 4、図- 3）の一部隅角部は7メートル以上あり、大ぶりの石を使い間詰め石も多く使われている技術性の高いものである。また、山腹より、山上にかけての城郭群の一つである本丸



写真-1 小谷城本丸付近石垣隅角部



写真-2 小谷城山王丸大石垣隅角部



写真-3 小谷城土佐屋敷



写真-4 観音寺城御屋形跡石垣隅角部



写真-5 観音寺城伝「本丸」虎口跡石垣隅角部



写真-6 安土城天守二の丸付近石垣

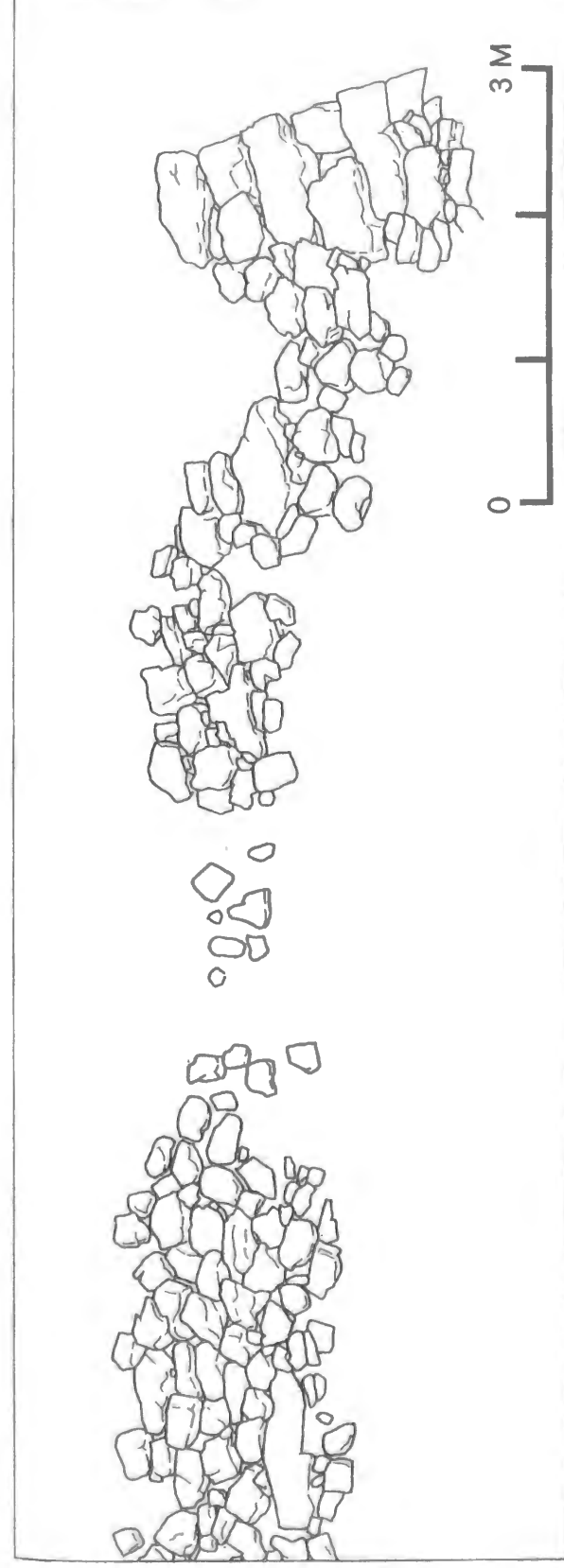


图-1 小谷城本丸付近石垣立面图

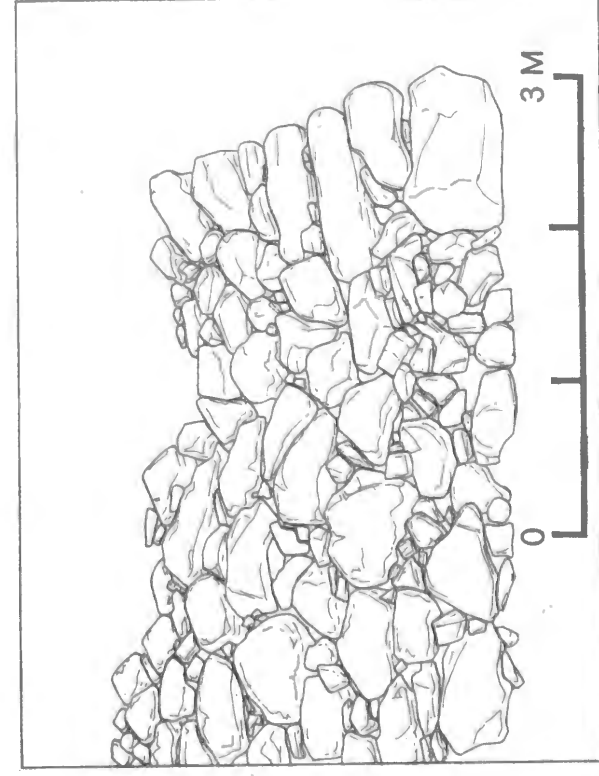


图-2 小谷城山平丸、大石垣立面图

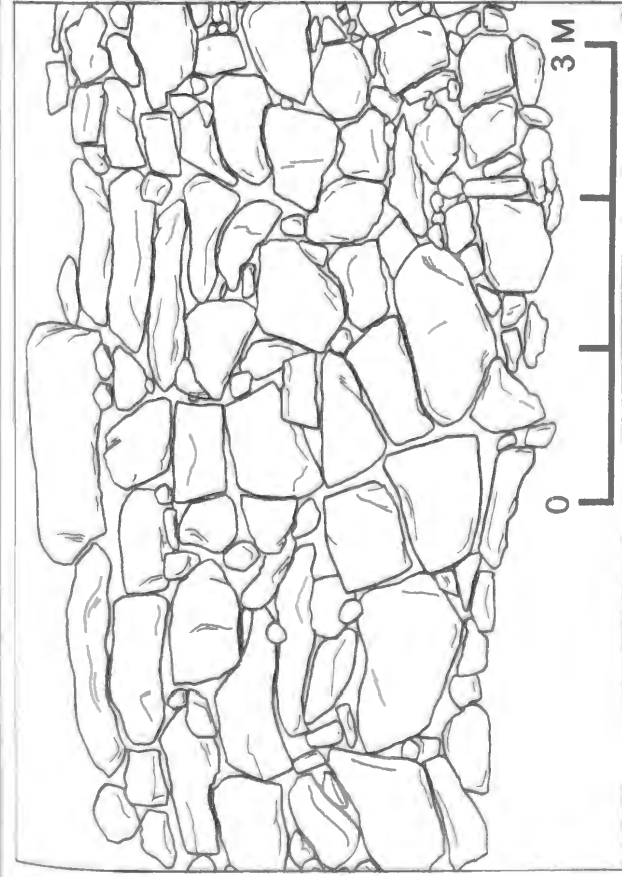


图-3 观音寺城御屋形跡石垣立面图

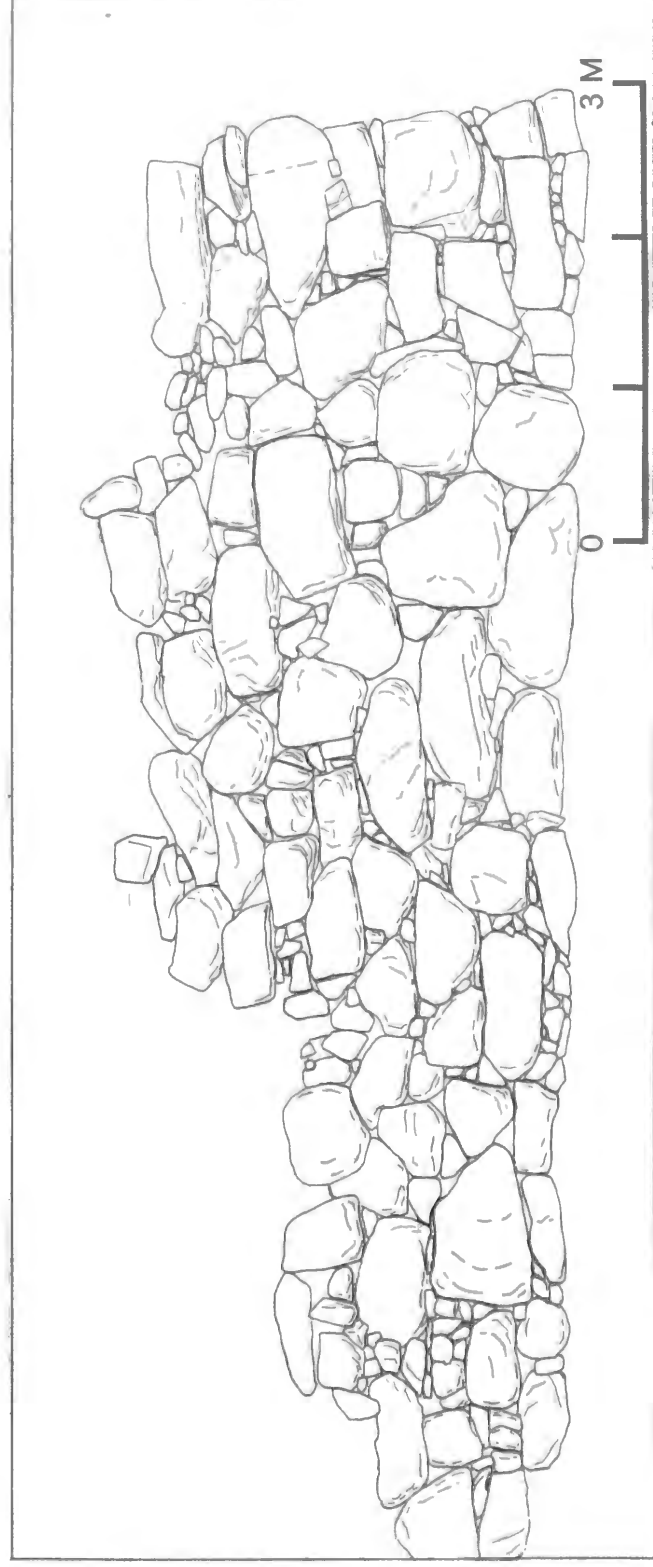


图-4 观音寺城伝「本丸」虎口跡石垣立面图

の北部虎口の石垣（写真－ 5、図－ 4）の隅角部は鈍角をなし、長短の石を交互に組む算木積みの初期的な様相や勾配等、御屋形跡に比べれば後のものと考えられる²⁶。双方とも十分にその技術力は存在していたと考えられる。前述の金剛輪寺の土木作業者は観音寺城の初期の石垣に携わっており、その技術力も高いものであった。

（３）観音寺城成立に関して

『信長公記』永禄 1 1 年（1568） 9 月 1 3 日には信長の攻撃により落城したと記されている。観音寺城の石垣は後述の安土城に比べると高さや稜線の通り方等の技術面で未発達な面があり、落城の永禄 1 1 年以前のものと考えられる。

（５）両城の石垣と安土城の石垣との比較

安土城は信長が天正 4 年（1576）から構築したものである。（写真 6）前述の両城の石垣との比較においては間詰め石の取り方、隅角部の稜線や算木積みの充実度、巨石の利用頻度等、安土城石垣における技術力は一段の発展がみられる。『信長公記』には天正 7 年 2 月 8 日「馬淵の切石 3 5 0 余を安土へ運ばしむ」とあり、構築には前述の『明良洪範続巻』の「穴太」だけでなく、各地から石積みの職人が徴用されたと考えられる²⁷。各地から石垣積みの職人が集められ、安土城のような大工事が完成したのであろう。

4-3 『兼見卿記』に見られる職能の分類

4-3-1 穴太の初見

いわゆる石垣積みの職能を表しているとされる穴太という語彙が『兼見卿記』に初見されるのは天正 5 年（1577） 9 月で以下の文がある。「廿四日、戌寅、早々召寄穴太石懸普請、醍醐清竜之御修理也、仮遷宮之事自最前度々申来、穴石到来、後神人来・・・」これは醍醐寺の石垣の修理を指すと見られる。他にも天正 5 年 9 月 2 7 日、「石懸出来、穴太下勢州・・・」、天正 6 年 9 月 2 2 日、「召寄穴太兩人石懸、神壇之西、横五間堅四間計敷」、天正 7 年 4 月 5 日、「石懸普請、召寄穴太一人、」などとあり、穴太という言葉が石垣積みの職人を表していることがわかる。この「穴太」は坂本付近に居住した石積み職人であったと考えられる。これらに先立ち、『久守記』（言国卿記）の長享 2 年（1488） 1 月 2 9 日に既に以下の条がある。「昨日東山殿石蔵司来候事、御奉書之事、あなうのもの出来候也、一 東山殿石蔵御用雑木式十本事、伐之可被渡穴太之由、被仰候者也、仍執達如件」 2 月 2 1 日には以下の通りの条がある。「一 今日河原者廿人計、ユツケ代百疋礼候

也」これらから東山山荘の造営にあたり、近江国穴生の者が石垣普請に、庭普請には「河原者」が従事している。この穴生は穴太と同義語と見られる。

穴太散所については、他にもいくつかの記述がある。丹生谷哲一によると²⁸、応永17年(1410)11月19日付の摂関家隨身『下毛野武讓状』では「山城国

また安土城の石垣の積み方には、いろいろな型があること²⁹からも安土城石垣の調子庄、近州左散所、丹波国石田庄、河内国右散所、近州穴太散所」などが列挙されている。

この時点で「散所」等から発展継承した土木作業集団の中でも坂本の穴太は石垣職人としても優れていたと考えられる。また石懸普請以外にもさまざまな職種の人間が徴用されている。以下に『兼見卿記』にみられる各職能に関わる事例を挙げて比較検討を行い、石垣を積む職能としての文中における穴太の位置づけを試みた。

4-3-2 「大工」、「河原者」及び人足に関して

造園職能に携わったのは、河原者や散所以外にも挙げられる。例えば「大工」は外構関係では、天正4年(1576)4月17日の条にみられるように「東之庭申付韋(葦力)垣、大工二人」とあり、垣の作事に雇われているが、天正6年(1578)3月9日、各大工以下鍛冶などに作料を支払い、独立した職能とみなしていることがわかる³⁰。他、天正6年10月14日、「小座之庭土居付屏(塀力下同ジ)、大工四人普請」とあり土居塀等の建設にもあたっている。また、天正11年(1583)1月4日、「大工来、今朝竈神殿之餅、十疋置上、神人五人口(下力)、当所之大工五人」とあり正月の褒美を貰う等、「大工」はこの時期には既に職能として確立されていた。『兼見卿記』以外の文献からも「大工」の職能の確立が見られる³¹。

「大工」は職能を確立し、同時に造園職能的な外構工事にも携わっていた。

「河原者」に関しては以下の条が見られる。元龜3年(1572)11月30日「出京了、新井石以下悉出了、川原者三人八木老石遣之了」とあり、井戸の石を積ませてほうびに八木(米)を与えている。天正9年4月17日には「当城堀(掘)井、河原者山、相添此者急度可罷下之由申来、…」とあり、井戸に関しては「河原者」が専門的に扱っている。その他には、天正11年1月4日、「河原者五人、箒・緒太上之、各下酒」、天正12年4月10日、「普請河原者廻藪垣申付之、…」など、「河原者」は個人名の「山」と呼んだり、褒美を取らせたりしている。

人足・その他に関しては、四方築地の普請や庭之前南方築地、家君御方普請、武家御所普請之事、路次普請、山中路橋、植松、四条橋之普請、御池之掃除、新開之田地堀(掘)溝と雑多な作業に農民等が使役され専門性はなかったといえる。

4-3-3 他の事例にみられる職能としての穴太の位置づけ

穴太は、石懸普請のみに関して「召し寄せ」られて使われている。人数の記載はあるものの、個別の作料等の記述はなく、技能者の個人名もなく、或いは集団の棟梁としての作料の支払いもまだなかった。すなわち、『兼見卿記』をみる限り、「大工」や「河(川)原者」などという職能に並んで、石懸普請を行う穴太という技術職人が存在していたことが認められるが「大工」や「河原者」のように人数に対応して、独立して作料等を支払うという記述はみられない。職能の分化としては、「大工」、「番匠」や「河原者」よりも遅れていたことが考察される。井戸掘りは同じ石積みでも「河原者」に専門化している。これは「河原者」が呪術を扱ったことと関連しているものと考えられる³²。また、『兼見卿記』にみられる穴太は、安土城建設当時であるにもかかわらず、吉田家にも従事し、また勢洲に下るなど、ある程度自由に動いており、安土城専属ではなかった。「穴太下勢洲³³」とあることから、他の地域でも石垣を作成していたことが類推される。安土城には前述したように馬淵の切石が運ばれ、馬淵を含む他地域の石工も建設に参加していたと考えられる³⁴。『兼見卿記』の穴太は作料や棟梁化の確立もなされていないという点において、まだこの時点では特別に石垣を積む職能の分野で坂本の穴太が特別の地位を得ていた存在ではなかった。

4-4 他の事例にみられる穴太の発展過程

「穴太」という言葉は『兼見卿記』では坂本の石垣積みを表し、各地を渡り歩いて技術者としての地位を確立していった。鉄砲伝来も石垣の発展の契機となり、石垣積みの技術や職能を発展させた。応仁の乱以降、権門勢家の発展は技能集団の発展を促し、また衰退はそれらの自立性の一助となり且つ大津坂本の商業経済の発展もそれらに寄与した。それは権門に従属し、庇護されながら発展していた各地の座的な商工業の職人層が自立的展開を遂げるのと機を一にする。さらに小早川隆景・吉川広家宛豊臣秀吉朱印状では³⁵、「穴太三十五人返被遣候、宿伝馬事、丁送ニ可被申付候也」とあり、35人の穴太を送り返すとある。これは当時築城に従事した穴太を京都に送り届けるべく、秀吉が宿所や伝馬のことを小早川に命じている。

『駒井日記』の文禄2年(1593)の条³⁶には作料の申し立てに関して「伏見石垣去年以来作料之儀申上、穴太出雲手前相済」と、穴太の個人名と作料について記されており、また、文禄3年(1594)にも³⁷「穴太駿河」、「穴太参河」、「穴太出雲」などその棟梁化が明確になっている。これは、秀吉のお抱えとして工人から石積みの技術者としての地位を確立した時点であった。この時点で、穴太が固有名を持ち、応分の作料を取得する地位にあったことが、確認される。

「篠山日記御城御取立」では、慶長14年6月晦日の篠山城における構築の御城鋏初めの際、「江州穴田ト云所ヨリ筑後・三河・駿河ト云石垣師来テ石垣ヲ築ク。」とある。この「穴田」は「穴太」と同意と考えられている³⁸。また、御家中公儀巻一³⁹では、「北川新兵衛事、穴納伝授之事有江州大津坂本江罷越処、・・」とあり、北川新兵衛が、坂本の穴太を訪れて石垣積みの伝授を受けている。

信長の近江支配により、それまで寺社や佐々木、浅井両氏等の配下で、継承する技術力を有していた「散所」や権門寺社の庇護下から発展形態をとった座的な集団等が信長傘下に組み込まれたと考えられる。安土城構築の前後から、これらの石垣積みの職人層は各地に渡った。上述したように坂本の「穴太」が移動することにより石垣を構築したとある史料が、数多く存在する。一方で、全国の同時期の石垣普請に坂本の穴太だけが関わっていたとは考えにくく、他地域における城郭の石垣普請では当地の職人が携わったという記録もある⁴⁰。

4-5 まとめ

以上、石垣積みに携わった職能の発展過程として、史料等の分析から中世後期における「散所」等土木作業集団や戦国期の各在地における石垣積みの職人等について検討した。また石垣の遺構等を分析してその技術の変化を考察した。その結果、前段階においては、穴太法師など「散所」や寺社の従属集団が石垣積みを行う職人の前身的な階層を占めており、また後には寺社の支配下にあった座に管理された技能者などとしても各地に存在した。これらの技能者は穴太においては散所と考察されるが、金剛輪寺などにおいては、寺社に属する座的集団として捉えることは可能であるが、散所という特定はできない。小谷城に付随する石垣建設にあたった技能者も同様に、現時点では階層の特定はできないが、それぞれに技術力を形成していたことが考察される。

安土城建設時では、石垣普請に関わる職能は「大工」や「河原者」などの職能形成には遅れるものの、六角氏、浅井氏など戦国大名の居城構築などにおいて各城の建設を契機として、実務を重ねながら技術力を高めつつ発展した。また、信長の支配を契機に安土城構築を以って、それ以前の各地における石垣構築の技術が集大成された。石垣積みの技能集団としても、個々に従属性から自律性を高めて発展していく。これは、前章で「河原者」の独立性に「散所」が遅れていったことと対照的であった。地域が変われば、「散所」であってもこのような独自の職域を確立していった場合も存在したのである。彼等は時代を経て集団化し、棟梁が出現していく中で石垣を積む職人は坂本の穴太における石垣積みの職人を先導として秀吉の時代に職能として確立されることとなる⁴¹。本研究はその前夜の歴史から、近江の幅広い地域での石垣を積む職能の形成過程を明らかにした。

注・文献

- ¹ 沼田頼輔（1914）：穴太役考：史学雑誌25-1, 75-82
- ² 北垣総一郎（1987）：石垣普請：法政大学出版局、319-344
- ³ 松下浩（1996）：織豊城郭第3「特集織豊期城郭の石垣」：織豊城郭研究会、1-22・木村信幸：同左、23-24、一連の研究では安土城時代には「穴太衆」とよばれる、特定の集団は成立していなかったと論じている。
- ⁴ 一部98年度日本造園学会関西支部大会で発表
- ⁵ 明良洪範続巻5（1913）国書刊行会
- ⁶ 秋田裕毅（1990）：織田信長と安土城：創元社、102
- ⁷ 馬淵村岩倉共有文書天正11年（1583）「馬淵山石之儀、当村之者共、従前々取候て石うすをきり申之由候、如先々石之事取可申候・・・」天正11年12月9日また、「信長公記」天正7年2月8日にも「馬淵より切石 三百五十余」とあり、馬淵村の石工の存在は著名であった。
- ⁸ 森末義彰（1941）：中世の社寺と芸術：畝傍書房、282-289
- ⁹ 脇田晴子（1981）：日本中世都市論：東京大学出版会、1-45
- ¹⁰ 網野善彦（1976）：中世前期の「散所」と給免田：史林：Vol. 59, No. 1, 1-40
- ¹¹ 永原慶二（1973）：中世史ハンドブック：近藤出版社、125
- ¹² 前掲9
- ¹³ 荒木繁他編（1953）：平凡社、161-198 この愛護若は寛文10年頃（1670）刊行の天満八太夫の正本と推定される「あいこの若」を収録した赤木文庫蔵本を底本に使用している。
- ¹⁴ 大日本史料6ノ30「続正法論」応安元年（1368）8月25日にみられる穴太散所
- ¹⁵ 原田伴彦（1957）：日本封建都市研究：東大出版会、251
- ¹⁶ 森末義彰（1941）：中世の社寺と芸術：畝傍書房、244
- ¹⁷ 前掲書、丹生谷哲一：検非違使、74
- ¹⁸ 宮島敬一（1997）：戦国期社会の形成と展開：吉川弘文館、127
- ¹⁹ 田中政三（1979）近江源氏1巻：弘文堂書店、10-29
- ²⁰ 滋賀県中世城郭分布調査（1983）滋賀県教育委員会、200-239
- ²¹ 前掲2）、182
- ²² 前掲2）、184
- ²³ 近江愛智郡史 長享元年（1487）から天文5年（1536）までの支出項目一覧である金剛輪寺文書の「下倉米銭下用帳」は小和田哲男（1968）：金剛輪寺文書と観音寺城の石垣：城春9：日本城郭近畿学生研究会による
- ²⁴ 遠藤元男（1986）：古代中世の職人と社会：雄山閣出版、400-403
- ²⁵ 前掲16）の巻頭図の記載による
- ²⁶ 前掲2）、181でも同様の論述がある。
- ²⁷ 原田伴彦（1957）：日本封建都市研究：東大出版、255
- ²⁸ 丹生谷哲一：前掲書、174
- ²⁹ 小竹森直子（1996）：安土城の石垣：織豊城郭3、55-76
- ³⁰ 大工各遣作料、鍛冶・ラガ引遣之
- ³¹ 前掲22）、280 建築師の名前のある棟札が社寺に残されている例は13世紀前後からある。
- ³² 林まゆみ（1995）中世民衆社会における被差別民と造園職能の発展過程：ランドスケープ研究 Vol. 58 No. 5, 17-20

³³ 伊勢

³⁴ 田淵実夫もその著書「石垣」（法政大学出版会、1975、16）の中で近世の文書ではあるが西滝文書をあげて他地域の石工の存在をあげている。

³⁵ 天正18（1590）7月11日大日本古文書家わけ11-1

³⁶ 文禄2年（1593）12月26日

³⁷ 文禄3年3月17日

³⁸ 前掲1)

³⁹ 万治3年（1660）11月5日

⁴⁰ 木村信幸（1996）織豊城郭3：「石つき之もの共」について；織豊期城郭研究会23-34では祖式長好・森脇春貞・二宮宛吉川広家自筆書状、天正19年（1591）12月5日、広島城の築城に伴う堀川普請に当地の石つき之もの共が関わったとある。

⁴¹ 横田冬彦（1982）：日本史研究235、54 近江蒲生郡岩倉の石工も作料を請求している。

結章

本章では、第1章から第4章までを振り返って中世民衆社会における造園職能民の形成がどのような過程を経てきたものかについての総括を行うものとする。

5-1 総括

中世後期の社会構造の中では鎌倉幕府の崩壊後、動乱の世が続く。そしてその中で身分構造も動的に変遷していく。前章で述べたように、造園職能と賤民社会は相互に深く関わりを持っていた。さらに当時の社会通念上は卑賤視されていた階層でもあった人々は、今日から振り返ると、むしろ差別をばねにその職能を高めていった感さえあり、多くの先達の研究者もある種の感嘆を込めながら彼等の働きを評価しようとしてきた。しかし、本論ではその職域における到達度に関して、より客観化した分析を行ってきた。

序章の「研究の背景と本稿の課題」では本論文中で考察を深めていったものを取り出して、「中世民衆社会」、「造園職能」、或いは「職能民」といった言葉の概念規定を提示している。「民衆」といった概念は特に中世においては、在家を中心とした農耕民を指しているが、ここで扱う職人階層はその「民衆」のなかでも最下層に位置づけられていた「非農耕民」であった。その「非農業的」側面が差別を生み出したとする網野善彦などの論考もあるわけだが、そういった逆境としての環境の中でいかに彼等が「職能民」としての地歩を固めていったか、また、「造園職能」とは何かを再検討してきた。

身分社会すなわち、造園職能に関わる階層に関する研究の流れとしては、林屋辰三郎から、脇田晴子との論争、大山恭平や横井清などの論考の流れを受け、丹生谷哲一による集大成から細谷涼一による論考までを踏まえた。非人社会における階層分化の様相がいわゆる造園職能の形成と深い関係性をもち続けてきたことが理解された。最初は、造園職能にかかわる身分階層として、歴史研究の流れからも「散所」に視点を投げ、「散所」の発展過程を追いながら、「河原者」や「非人」という概念の整理を行った。⁴

第1章の「造園職能民の形成・・・北野社に見られる事例から」では北野社の史料に注目し、「散所」や「河原者」などの階層がどのように造園職能に携わったかの検討を試みた。北野社においては、北野社という神社の中での、身分的階層に応じた職能が検分されたわけであるが、数多くの史料の中で、通常では記録上に残らない散所や河原者などの賃金や清掃や造園に関わる史料の詳細が残されていたことから、これが可能になった。その根底には当時の北野社内の権力的な相克が存在していたことが、理由の一つとして挙げられる。造園土木的職能に関しては、掃除や清めの職能から始まって、穢れに触るという職能と造庭に関わる職能

が不可分に存立していたことが伺われる。河原者、散所、在家などの各階層はその身分的上下に応じて、清めの職能も分化していた。

河原者は死体処理などの穢れに触る職能に携わりつつ、尚且つ主体的に造庭に関わっている。15世紀末、造庭においては河原者の「赤」が北野社では重要な役割を果たしている。彼は、死体処理の仕事を自分達の郎党に任せるべきだと主張し、同時に朝廷に進上する梅の木の選定に関して意見を述べるといような、主体的な役割を果たしている。北野社では、樹木等は神木としても重用されていたが、燃料として、或いは造庭の要素として幅広く用いられていた。河原者はこのような植栽や樹木の取り扱いにも多用され、深く権門の中に入り込んでいた。詳細な賃金の出納を検討すると、井戸の水替えや井戸の造作など目的に応じて、階層的に使い分けられており、造園土木的職能の分担が明確に分けられていた。散所は井戸や池の水替えに、また、掃除や清めの職能、そして穴掘りや築地普請などの人夫役としても徴用されていた。一般の在家も掘り方や築地普請などの単純労働に徴用されていた。それと比較して河原者は井戸の石積みなど呪術的な作業を必要とされる部分、車などを持ち石や樹木の運搬、樹木等の検知など、より特化した技術的集団として使われていた。賃金も河原者と散所では日当的にも差がある。河原者の自立性と技術的特殊性が伺われる。

北野社に河原者の赤が出入りしていた記述が多いが、同時期に善阿弥は蔭涼軒や將軍家、そして奈良の一乗院、興福寺などに出現している。河原者は重複的な奉仕先を持っていた反面、権門専属の固定した関係も存在したことが伺われる。赤は決して蔭涼軒には出入りせず、また、善阿弥が北野社に雇われることもなかった。同時に、散所の新三郎の「閑衆」の例にも見られるように被官の重層性も当時の社会的な権門への従属性における特徴として挙げられる。一見不安定な身分的所属における多重性や、従属の不安定性などがかえって、職能における技術的上昇に対する積極性を生んだと考えることができるのではないか。このような重層的な被官制や或いは特定の権門への奉仕、服務などの中でいわゆる在家や神人という、より人身的にも従属していた階層は専ら人夫的作業に従事させられることが多く、独自の技術的発展の形成には至らなかったといえる。

第2章では、「造園職能民の完成・・・善阿弥論の再検討」の中で、職能の完成について論じた。第2章の造園職能民の完成・・・従来の善阿弥論の再検討という章では、善阿弥をもって、山水河原者の完成者或いは到達点とみて、これまでいわれてきた善阿弥論や山水河原者に関する論考を見直した。章の中でも述べたように、善阿弥に関しては、足利義政の寵愛などが特に強調されて、特別な才能による異端的存在として認識されることが多かった。特に善阿弥を始めとした、これらの階層が身分的には差別されていた階層だったこともあり、そのような差

別をばねに、高度な芸術性が開花されたという論調である。しかし、さまざまな史料にみられるように善阿弥という人物は、ある時は施食の領取として、またある時は集団の長の役割を果たし、さらに他の場合にも惣中を率いる頭領的存在であったことが伺われる。差別という言葉の中身も現在の語義とは相異なり、穢れに触る職能としての生い立ちが、一般の人間の立ち入らない領域に触る人々に対する畏敬と畏怖の念を引きおこしていたと考えられる。それが、逆に彼等が権門に直接的に出入りするきっかけともなり、また、將軍などの目にとまる存在となった。

善阿弥に関しては、その若年期を帟や帟菊(虎や虎菊)として出現すると捉え、彼の造園における主体的役割や將軍との緊張関係に着目している。これらの緊張関係を生き抜いてこそ、晩年、善阿弥と言う阿弥号を受けとるまでになった。善阿弥という称号を得とくしてからは、史料にみられるように健康を損ねては義政の加護を得、また京都のみならず奈良の各寺院にも出向いて、造庭に関わっている。

集団化という側面からも、善阿弥は他の河原者の彦六、彦三郎などと頻繁に協働作業を行い、2代目善阿弥が留守の時は左近四郎が代役を果たすなど、連携が図られている。他に赤松の次郎法師などの武家も築地などの土木作業に関わっているが、これらの人物は直接の普請の作業に携わっていたとは考えられない。被差別民でありながらも善阿弥らの河原者は集団化と組織化を進め、一代目の善阿弥が没した後、協働作業を行いながら作庭に従事していた。

第3章の「造園職能民の展開・・・京都にみられる他の事例を総合して」という章では、1、2章の展開を受けて、京都における他の事例を考証した。その結果、初期の散所の事例では、八坂神社の記録などからも、花見に対する関心が14世紀には既に高まりを見せ、散所法師が花を扱ったりもしている。「散所」はその他にも14世紀の前半まででは、清掃に深く関わる存在として見受けられ、同時に庭の泉水や前栽などに携わっている。散所法師熊の名前は、山科教言邸に従事していた史料として数多くあり、権門と散所の特定の結びつきが伺われる。しかし、一方では東寺の散所法師が個々に自らの課役の免除などを訴えたり、幕府によっても課役の免除を指示されたりしているなど、掃除に特化した形での形態が進展している。

このように、呼称に関しては15世紀の前半までは「散所」の呼称が多く見られるが、15世紀を下るにつれ、「散所」と併存しながらも、次第に「河原者」の名称が多く出てくるようになる。特に、樹木の検知など、より造園的な鑑識の必要な作業に多く従事している例が見受けられる。よく知られているように、15世紀の前半では「河原者」を不浄の者として「散所」にのみ禁中の出入りを許し

た例があるが、こういった例もすぐに打ち破られている。

散所法師の熊は後、「河原者」などとも協働している。散所の熊が呪術的な働きを持つ事例も見受けられるのであるが、徐々に混在化が進み、15世紀後半から後には、むしろ河原者の専門化が目立つようになる。河原者のこのような専門化の中でも例えば北野社に従事していた河原者の赤は決して蔭涼軒には出入りしていない。また、善阿弥は将軍や蔭涼軒などの他にも、奈良の密教系寺院である一乗院や大乘院、或いは興福寺など多数の造庭に関与しているが、これも将軍という縦軸のつながりがあっての関係性で、将軍の御成りと不可分ではなかった。一乗院や大乘院、興福寺など将軍の参詣は、善阿弥が当地を訪れ、寺院の庭園の修復などに従事する大きな根拠となったと考えられる。

このように、それぞれの権門につながる河原者や或いは散所の系列ができ、しかしながら、被官の重複性などにもみられるような柔軟な混合が存在していたことが特徴的である。

足利義政の東山山荘の構築に際しては、河原者は四方に走り回る技能者として数多くの史料にみられる。しかし、善阿弥のような固有名詞で呼ばれるよりも、技能者集団として階層的に確立しつつあった存在としてである。河原者が縦横に検知などに走りまわった際には奈良の密教系寺院の反発も受け、襲撃までされている。これは、その時代になってもやはり、卑賤な身分である河原者に対する反発が根底にあったということができ、穢れに触る職能とその時代であっても不可分であったことが理解される。

身分に対する差別は善阿弥の孫の又四郎をすら、「屠児の出」と慨嘆させていることから、近世に入り階層の再編成が行われるまで、このような穢れに触るという職能は、造園に関わる職能とも不可分であったと考えられる。しかし「屠児の出」と嘆いた又四郎であったが、その見識は後世さまざまな史学者の分析を促すほどに高いものがある。陰陽道や仏法の儀を駆使したり、或いは自然のあり方などに対する深い考察が彼の言葉から伺われたりする。今後の研究課題としてもぜひ、河原者の見識が中世後期の空間観にどの程度影響を及ぼしたかに関する分析が必要と思われる。

賃金なども徐々に河原者がその地歩を固めていき、より多くの対価が支払われている例が多くなる。善阿弥などはある意味では頂点に位置するものである。山水河原者は番匠などには遅れるものの、散所に比べてより専門化、専従化が進んでいたことが、賃金の例からも実証されている。

身分的には、前述しているように不浄の民という烙印が消されようもないところに、河原者の差別が根本的に払拭しえない要因として残ったわけである。一方で、このような穢れにさわる職能が、彼等をして権門に直接的に触穢の儀式等を通じ

て関わる接点ともなった。

中世における触穢観や差別観は現代のそれとは異なると考えられる。差別といっても身分的に固定された近世以降の差別とは異なり、穢れを畏れる感覚から来ている差別感であり、他の職能、例えば造園職能などに関する評価を妨げるものではなかったといえよう。「屠児」は「屠児」、しかしながら造園的職能として評価すべきは評価すべきとして職能民を捉えていた。

呪術性に関する史料は草戸千軒やなどにみられる井戸や石垣造成に関わる陰陽道的呪術性や、袍衣収めの儀式にみられる呪術性など多くの史料がある。実際の造園空間にこのような呪術性がどの程度反映されているかという観点も、今後の研究課題として残る。

山水河原者の最後の例としては、与四郎や賢庭が挙げられる。与四郎は醍醐三寶院の庭園づくりや、秀吉の作庭に仕えた。賢庭は、江戸時代にも活躍したが、次第に山水河原者は消滅し、植木業を営む常の者となっていった。近世の階級の固定化が、一方で河原者の賤民化を固定し、一方で常の者である庭師や植木屋を成立させたと考えられる。江戸時代の史料『京羽二重』では、庭作り、植木屋、庭石などの専門業者の名称が史料上にあらわれ、市井の民衆として職能を形成していることが理解される。

第4章の「造園職能民の発展・・・近畿に見られる石垣を積む職能」の章では、一連の散所から河原者へという流れの中で、特殊な技能と地域性が表出している事例として取り上げた。石積みや石垣の造成に関しても先行研究が数多く見られたが、本論では、その中で滋賀県の坂本を中心とした穴太と呼ばれている集団の職能形成に着目して論を展開した。穴太は従来、研究史上からも、石垣職人として安土桃山城の構築以前から、著名な職人集団として捉えられ、穴太衆という言葉が一人歩きをするような形で技能者の出自を述べる際に使われたりするようになっていた。江戸期からさかのぼって、伝承によって権威を付加されてもいた。本論では、坂本の穴太以外にも存在した石積み集団の可能性に視点をおき、近畿において、戦国大名に仕えたそれぞれの在地における技能集団の形成を論じた。資料的には文献史料以外にも、現地調査に赴き、石積みの手法の分類等を通じても諸地域の在地における技能者集団の可能性を論証した。石積みに関わる部分は中世後期を経て、近世初頭の秀吉の時代に初めて固有の穴太衆とも呼ぶべき技能者が出現したと論じた。

以上、各章において、それぞれ個別の地域に応じた分析を行う中で、中世後期における民衆社会における造園職能民の形成を論じた。以下に全体を通した本稿の主張の特徴点を挙げる。

中世後期に「河原者」として技能的な職能民が形成されたこと。彼等は権門勢

家の下集団をして形成されてきた。そこには、善阿弥のみならず、赤や又四郎、熊などの固有名詞を伴った個別的な技能者の成立が見られる。15世紀初頭から同様の土木的作業等に従事していた「散所」が技能者として個別名を有して記されることは稀であった。山水河原者として著名な善阿弥の存在からは、彼のみの特例ではなく広く職能が展開したことがその背景として理解される。その背景には集団としての彼等の成長があった。専門技能としての確立はさらに展開し、石垣積みなどへより専門化していく。おそらくこうした展開が、近世に入って「河原者」という身分を解体し、皮革職能民以外の専門技能者たちを脱賤化させた。

本論文は、造園職能民の形成過程の社会的な背景も視野に入れて、その客観的掌握につとめた。その結果、賤民社会の中でそれぞれの造園職能に関わる技能或いは技術が形成され、技術的な向上と社会的地歩の確立を目指す中、組織や集団化の発展を進めていく過程で職能民が形成されてきたことが明瞭となった。中世後期に山水河原者が造園職能民として果たした役割は大きい。これはその直前には石立て僧が宗教的立場を取りながら造園に深く関わったこと、しかしその宗教的立場ゆえに造園職能民としては自立しえなかったこと、枯山水や日本の自然観の表出した表現芸術の開花として、他の文化的開花と時期を同じく造園分野における日本化が推し進められたこと、また、被差別民でありながらも集団化と長吏の形成が職能民としての自立を推し進めたこと、そして善阿弥を筆頭とする何人かの優秀な芸能者としての作庭家が輩出されたこと、などが造園職能民としての河原者の位置を特別なものとした。河原者以外にも在家や散所などさまざまな土木的或いは造園的職能に携わった階層が活躍した。しかし、穴太の散所など地域的に特別な事例を除いては河原者ほどには職能民としての自立性は見られなかった。それはこれら在家や散所がより人夫的に権門に従属性を持ちながら使役されたことと無関係ではない。

さらに造園職能以外の土木的職能等に関連しての職能民の形成に関しては本稿では重点的には述べていない。しかし、勸進聖を始めとして、番匠や土木的職能は権門の重用な位置を占める職務として権門組織内に組み込まれていた。それは、職能集団としての自立を一方で阻害し、造園ほどには自由な職能民の形成を成し得なかった理由となる。

今後の課題としては、造園職能論のもう一つの柱として、彼等がどのような造園芸術を実践していたかを検討することが残されている。作庭者の造園空間の内容との関連については、遺された遺構や河原者等の職能民が持っていた作庭論についての知識技能の問題などとも関連させながら考えていきたい。

本論はそうした考察のための手がかりとして中世後期に作られた建造物として現存する造園空間に関して付録を添付した。それらについての考察は今後を期す

ることとして、一旦は、筆を置くこととする。

例：竜安寺(京都府)、北野神社(京都府)、金地院(京都府)、秀隣寺(滋賀県)、朝倉氏庭園(福井県)、大仙院(京都府)等

関連する論文

- ・ 林まゆみ (1995) : 中世民衆社会における被差別民と造園職能の発展過程 : 日本造園学会誌 : ランドスケープ研究VOL. 58 NO. 5、17～20
- ・ 林まゆみ (1999) : 石垣と職能について : 平成10年度日本造園学関西支部大会、9～10
- ・ 林まゆみ (1999) : 中世民衆社会における石垣積みの職能形成 : 日本造園学会誌 : ランドスケープ研究VOL. 62 NO. 5、435～438
- ・ 林まゆみ (2000) : 北天満宮と造園土木職能の形成 : 平成11年度日本造園学関西支部大会、43～44
- ・ 林まゆみ (2000) : 中世後期における北野社を中心とした造園土木職能の形成 : 日本造園学会誌 : ランドスケープ研究VOL. 63 NO. 5、353～356
- ・ 林まゆみ (2000) : 善阿弥論の再検討、平成12年度日本造園学会関西支部大会、21～22

Summary (英文要約)

The research of the people regarding landscape architecture in the medieval era

0 Beginning The background and the theme of this thesis

0-1 Main themes, the purpose of this thesis

The routes of the people concerned with gardening can be found in the late period of medieval era. Also this period, can be seen as a Japanese cultural turning point, not only in gardening but also in citizens formation, the change in rural landscape by agricultural development, formation of Shinto religion, tea ceremony, Nou performance. This thesis shows how those people could complete their professional development.

In this paper it will be shown how people could make groups and organize to perform the gardening profession, and how they had contact with authorities like nobles or temples to construct their position. Also how people could achieve the high level skill in that period.

The phrase "society and people in the late medieval era" refers to ordinary people, mainly including farmers. But in this thesis, "the people" who concerned with the profession means people not having there own land to farm and not being expected to pay the tax. Instead of paying tax, they had to offer the labor continuously. That made them to be outcasted.

About the words "gardener or landscape architect", They are not only concerned with the constructing or building gardens but also some kind of skill for dealing with cleaning matters which was thought to be taboo. At that era to touch the death was such a big taboo. It seems strange, but those people were not only cleaning roads and ponds but also dead people or animal.

The history of the people who had been outcasted had been studied for long time. They had been called Kawaramono or Sanjyo. What was the original reason for those people to appear was the big theme for Japanese historical researchers. And this subject relate directly to this thesis. The gardener or landscape architect of that erra were mainly consisted of the people who had been outcasted. That is why it took many pages to examine about this.

At the first stage, the perspective view of former research had

examined, including about outcasted people and the history of the profession. Also always examining the background of the era and the people's stage as being outcasted or being professional people.

This thesis is outlined as follows:

- Chapter 1 The formulation of the profession (as a gardener or the landscape architect) in Kitano Shrine
- Chapter 2 The completion of the profession by Zen-ami
- Chapter 3 The expansion of the profession in Kyoto
- Chapter 4 The development of the profession in stone fence constructing
- Chapter 5 Conclusion

0-1 About the former study

For the research of gardeners in the medieval period, it is important to understand the status of untouchables. At first they were mainly regarded as "Sanjyo". Hayashiya Tatsusabro explained them as a continuation of the ancient period, which had slaves in their own system. But after many logical controversy, "Sanjyo" is now recognized as a people not as the continuation of slaves. Main job of Sanjyo (those outcasted people¹) was cleaning dead animals or dead people, which was thought to be dirty thing as "Kegare" or "Kiyome". Other important job were cleaning and making roads, repairment of fence, digging ponds, and gardening.

Later, those outcasted people were recognized not only as "Sanyo" but also "Kawaramono" and "Hinin". About those people Wakita Haruko and Niinoya had revealed excellent works.

Also about the civil engineering Miura Keiichi had mentioned that between the civil engineering and the skill for imprecation there were keen relations. In the medieval era, those were inseparable.

As for the "Sansui-kawaramono" they were especially excellent gardeners. Ito Teiji and Yoshinaga yoshinobu had researched well about "Sansui Kawaramono".

The study of landscape architecture and civil engineering had done by Miura Keiichi, Endo motohiko, and other researchers. About carpenters,

¹ outcasted people: In medieval era there were certain people who had been outcasted because they touch dirty thing to clean or they did not have there own land to farm.

Endo Motohiko mentioned that those people were recognized as established engineer in the early period of medieval era. In Hineno district in the south part of Osaka, in the old map of 14th century, it can be recognized that outcasted people built a lake.

As for the Kawaramono who had made many gardens in that period, Ito Teiji estimates that the famous "Karesansui garden" of Ryoanji temple had built by Kawaramono. Also Yoshinaga Yoshinobu had researched about the culture of "Higashiyama Bunka" which is created by Ashikaga Yoshimasa. In this thesis it is mentioned that Ashikaga Yoshimasa who had keen relationship between Ze-nami was one of the great gardener in those days. Other researchers are Kawashima and Haga Yosihiko.

As a conclusion of former study, these people who concerned with gardening or civil engineering are maninly outcasted people. Former studies could be distinguished to three types. One is about the people who had been outcasted, second is about the people who had skill for the civil engineering and those cleaning business, and the last is about the people who concerned with gardening or landscape architecture. For the first group, it can be said that "Hinin" is becoming the key word about the people who had been outcasted. Still it is not clear exactly what is the main flow about those people. About the people who concerned with civil engineering, it can be said that there are keen relationship between engineering, cleaning, and prey. To research, it should be more approach about those relationships. As for the former study, main theme of Japanese historical research was the construction of the national organization or the classes of the people. It can be suggested from the point of view for the engineering or the gardening more can be cleared about the profession, and the people. About the Sansui Kawaramono, former research were tend to stand on the view of spiritual background to produce such a great gardener like Kawaramono, especially Zen-ami.

Chapter 1 The fomulation of the profession in Kitano Shrine

1-1 beginning

To analyze the development of the ability of gardening and civil engineering in the end of the medieval period Muromachi, I investigated the

diary and documents of the Kitano Shrine in this thesis.

1-2 The social background of the Kitano Shrine

Kitano Shrine played important position in that period. The feudal government believed Kitano shrine. Because of this, many generals visited this shrine so often. Diaries of the priests remained about the outcome for those fees to pay for the cleaners, gardeners, and civil engineers of those days. As a result we can guess how people were working as gardeners or engineers.

1-3 About the documents of the profession about landscape or civil engineering

It is clear, that during this period, like Sanjyo or Kawaramono, these were an oppressed people performing various kind of labor. It can also be concluded that they were not only engaged in gardening but also Kiyome which is described as the labor of cleaning streets, wells, defilements. Kawaramono had occupied special position in gardening. Zaike (farmers), Jinin. Others were also engaged in those labor for cleaning street, gardening, civil engineering.

Those days gardening or civil engineering included not only such things like constructing gardens or roads. but also cleaning things such as dead animals or human beings. Those labors were thought to touch defilement. That was the main reason for them to be outcasts and Sanjyo or Kawaramono.

One of those labors was cleaning things, as cleaning the roads, cleaning the dead, cleaning wells. Cleaning things was thought to "purify". As for landscaping, the other work was constructing things like wells, walls, and roads. Also they managed planting, cutting or moving trees. It seems Kawaramono had more skill and got more money than Sanjyo. Kawaramono insisted their right or professional position to the priests also.

Doing gardening, Kawaramono managed to drive vehicles and got much money, also managing to move big stones or trees. Kawaramono got more money than Sanjyo and sanjyo were usually used for cleaning wells or other things with little money.

1-4 Conclusion

It seems kawaramono were more free and had higher skill around Kitano Shrine. In those days people belonged to several authorities. Of course Kawaramono and Sanjyo were looked down on and had a hard life. But this matter pushed them to struggle to rise up by themselves.

Due to diversity of the tasks required, dictated by many different authorities, these people developed a high level of skill, which resulted in the promotion of their own profession.

Chapter 2 Completion of the profession(as the gardener or the landscape architect) Re-examination about Zen-ami

2-1 Beginning

Zen-ami had been examined by many researchers. But most of those researches were apt to recognize that the appearance of this person was because of his artistic character and the situation of the outcasted background. In this thesis, it is examined how he developed his position and why he could get the reliance of the General Yoshimasa Ashikaga the General of Muromachi Feudal government of that age. With the investigation of the documents it became clear that not only because of his individual talent but also with the formation of skilled groups, he could be the famous gardener.

2-2 Zen-ami and his social background

In his young age, Zen-ami was called "Tora" or "Toragiku". In the documents so called "Inryoken-nitiroku" or "Daijyouin Jisyazojiki," his name could be seen often. At first he served to The General Yoshinori who had a tyrannical character finally killed by the retainer. But from this general Zen-ami (so called Tora or Toragiku) had been trusted to concern in the gardening dealt to the core.

It is a famous episode that when Zen-ami had sickness, The General Yoshimasa sent him medicine many times. And the priest of Inryoken thought it more than one deserves about that. Because he thought Zenami was still belonged to the outcasted people. Also in these periods so called "Bon-zan", potted plants were so popular in temples. Zen-ami also dealt

with these plants so often. Zen-ami was invited to many temples even in Nara to rebuild the gardens.

It should be also mentioned specially that Zen-ami was also being the leader of the group, which had the quarrel at the mercy in the temple to feed outcasted people. Zen-ami was regarded to be a so talented gardener. It was also special thing to report that zen-ami took rather much money than usual people who were affording the labor. But it can be noticed that Zen-ami was receiving the money with the group behind him. This group was called "Sotyu" or "Tenomono".

2-3 Formation of groups

In treatment of "Bon-zan", potted plants, Zen-ami were working well with many other Kawaramono. In the documents it could be noticed that several names like "Hikosaburo", "Sakonshirou", "Hikoroku" are working together with Zen-ami. Some of them were living together and doing same jobs with in the relatives.

2-4 Conclusion

As a conclusion, Zen-ami had come out not only because of his special talent, but also because of the situation of that period which authority² offered the opportunity to build the gardens, because of the people who had the skill to concern with gardening.

Chapter 3 the expansion of the profession by outcasted people in Kyoto

3-1 From "Sanjyo" to "Kawaramono"

Even in the many places in Kyoto, Kawaramono and sanjyo people were working sometimes together and sometimes separate. Early stage in the first half of 15th century, "Sanjyo" had appeared more and later "Kawaramono" had become more professional.

At first some Kawaramono could not enter the castle of the emperor because there were thought to be dirty. But with in some years, they become well skilled engineer as a gardener. "Matashiro" the grand son of

² Authority: Syogun, nobles, temples and shrines

Zen-ami was talking about the method of how to garden. His logic is upon the Buddhism and also some Japanese old religious way of thinking.

Kawaramono could receive about one hundred Mon for one-day labor. But Zen-ami could get more, It means that he was supported by. So much money was paid to him, because he had an excellent talent and also a skillful group behind him. The carpenter could get more money but also skillful Kawaramono insisted to get more money.

Compared to Sanjo, Kawaramono could get more money, because of their professional ability and there independent position from wealthy land owners.

There were many classes in the medieval era. It can be proved to see how people were used to clean the road where the Shogun would pass by. The lowest outcasts were used to clean the longest distance from the Kitano Shrine to welcome the Shyogun.

They were forming the solid groups of skilled members. It could be estimated that they lived in the same area, having same profession, also including many relatives with in the group. There can be seen many groups of skillful people around Kawaramono.

3-2 Purify to gardening

One of the main reasons why the Kawaramono had been thought to be good engineers and gardeners is because they had some special ability for the prey³ in those religious occasion, like to put stone wall or to berry some dirty things.

Sanjyo were usually employed for cleaning the well or ponds or gardens, but Kawaramono had been employed not only for those cleaning matters but to distinguish good trees and to deliver the big stone using there own viecles. Also like Zen-ami some Kawaramono were thought to be excellent gardening designer.

Ano Sanjyo people were skilled engineers for stone fense construction, but even for about this stone wall construction engineers were growing up here and there in Kinki District. At first the outcasts lived along the

³ to prey: Kawaramono had some kind of method to prey when they dealed with dirty things or to build things.

river or on the road, which was not taxable land.

Those areas were not used for planting or housing, so outcasted people invaded those open spaces.

3-3 The last Sansui Kawaramono

In Momoyama period there were famous Kawaramono named Yoshiro and Kentei. After Shogun Hideyoshi's era, Kentei became more famous. Even in Edo period, Kentei had thought to build the garden in Konchiin with Kobori Enshu the famous tea ceremony artist in Nanzenji in 1632.

Kurokawa Douyu said that until Kentei the outcasts had build those gardens, but after that so called ordinary people had concerned themselves with gardening. In Edo period, it can be seen that there were many craftsmen concerned with gardening and they were ordinary citizens of Kyoto or other districts, as opposed to outcasts.

3-4 Conclusion

The outcasts in the medieval ages had developed their professional range and technology in civil engineering works or in gardening. This thesis is concerned with the reason why they could come out as a excellent gardener, by analysis of their social background. This social background includes the changes of wage system and their own insist as groups. Touching upon the special values=purging from uncleanness, I considered how their cleaning business could be connected with civil engineering works or gardening. I examined their relation to incantation.

The outcasted people in the medieval ages had developed their professional range and technology in engineering works or in gardening.

Chapter 4 Development of the profession . . . The profession of stone wall construction in Kinki area

4-1 Beginning

In late medieval era, those people who had the skill of building stone fence were recognized as "Ano". There are some former research about "Ano" by Numata Shin and Kitagaki Soichiro. In this thesis it is examined that those "Ano" people were not completed in the late period of medieval era,

but in the era of Hideyoshi's period.

4-2 Construction of stone fence in the documents and field survey

A question had come out with the document so called "Ano story". It says that Ano people were so famous since the castle of Oda Nobunaga was built. So they had visited anywhere in Japan to lead the skill of building the stone wall. In several stone wall that had been built in those days, it can be noticed that not only Ano people but also many people of residence could make those stone fence with high level of skill. It means not only Ano people but also many groups of constructing stone fence had been existed.

4-3 Categorization of the profession in the diary of "Kanemi-kyo"

In the diary of "Kanemi-kyou", the word "Ano" can be seen in late 16th century. They went to many places. Also records of carpenters or Kawaramono could be seen in the diary.

4-4 The development of "Ano" people.

To notice the development of Ano people, it could be noticed that "Ano" could get the individual name from Hideyoshi. At the same time it could be said that there were many groups of stone fence constructing groups in Japan here and there and they were building fence by themselves developing their own thechnology.

4-5 Conclusions

In constructing stone fence of castles and temples in the end of medieval era to Nobunaga and Hideyoshi's period, the high level technique of construction is suggested. Investigating the diaries and documents of those periods, by the method of analysis of the people in San-jyo who were working as a labor for civil engineering, and also from the field work, it is examined that the development of the stone wall making ability as profession has been obvious among many places in Oumi. Also analyzing the field survey of stone fence, the development of the stone fence constructing technique has been clear. In this era many people who belonged to the authority had developed their ability of the stone fence constructing technique. As a result, it had been clear that the professional development of constructing stone wall were

slow developing than carpenters or gardeners. With the building of castles of Rokkaku and Azai family preceding the Aduchi castle, the outcasted Sanjyo people had developed their technique and profession. Becoming master builders and making groups, they had established their ability of technique and their position in Hideyoshi's period as Ano. That means the profession was established in the certain area in Sakamoto.

Chapter 5 Total conclusion

5-1 conclusion

Finally it can be said that those outcasted people had developed their skill and position step by step making many kinds of groups.

Being outcasted, they had struggled so much to be professional. Sanjyo people had belonged more steadily to the shrine than Kawaramono, so that they could not be more independent and could not get as much money as Kawaramono. It is a topic that Kawaramono "Aka" had insisted that Kitano Shrine should hire his group for the cleaning of the dead people after the fire, but at the same time he was an excellent gardener to was able to choose trees as a present for the emperor's palace.

Zen-ami had served Shogun Yoshinori when he was young. After Yoshinori's death, Zenami had served to Yoshimasa. It is clear that Zenami had many colleagues like Hikoroku, Hikosaburo, Sakonsiro. They worked hard even without Zen-ami when he had illness or he was absent. It can be concluded that Zen-ami had come out not only with his excellent ability but also with his groups and with the cultural background of the medieval era.

In the 3rd chapter, it was clear that in Kyoto there were many Kawaramono belonged to several authorities. The people of that age were interested more and more in the garden or in the flowers. Matashiro, the grand son of Zen-ami had discussed with the priest about the method to make the gardens, he had high-level knowledge and philosophy. Kawaramono had stepped up their profession and got more fee even they were being outcasted. It seems the way of thinking of being outcasted means not the same meaning of now. They had been looked special because they could deal with the dirty matters like dead being which ordinary people

could never touch. After the Hideyoshi's period especially in Edo period, it seems that outcasted people had fixed not to be free like those people in the medieval era. In the medieval era to prey meant a lot of meaning to deal with the construction to the earth.

In the 4th chapter, the stone wall making people became more popular especially in Ano Sakamoto in Shiga. In former research that it was thought only Ano people were the craftsmen to build the special stone fence. In this thesis it becomes clear that many groups that belonged to several big houses had developed their own ability for stone fence making, and thus those people formed the gardener's ability to have to deal with the stone.

It had been cleared that in late medieval era, high-level skill had been formed and with the level up of their position in the society as a professional gardener, many groups and organization had formed and developed their professional carrier.

Final message

I first became interested in Japanese original landscape and people concerned to those landscape is from my school life in Kyoto University. We had the seminal and the theme was about the town houses in Kyoto build in the past days more than several decades or even some centuries.

In Kyoto at the period of medieval era, there was the birth of town citizens named Machi-Shyu. Mainly those people come from merchants or the manufacturing people who had been outcasted. Also in this period there came out the original culture of Japanese style including not only gardens but also performing arts and tea ceremony or ornamental display in the houses. . In the period of early ages of medieval era, most of culture and skill are from China. This is also one of the big reasons why I thought this period is important to examine. The medieval period especially at the last part of this era was the turning point of Japanese culture also for the religious point of view. .

This thesis examines those who are concerned in landscape architecture, and also their main activity. Those people were looked as outcasted people, so it is important to know how those people existed, and how they struggled to make careers.

At the beginning it should be clear what "Landscape Architecture or

civil engineering” or that era means it. From this point of view this thesis will start.

あとがきと謝辞

京都のまちを歩くといわゆる「鰻の寝床」と形容される町家が立ち並ぶ中京や下京と呼ばれる地域がある。そのたたずまいは長年の暮らしの息吹と現代との相克を表象している。変容する都市空間の中で、過去を堆積し静止した時間と現在をつなぐ空間が連続する。町家の中へ一歩足を踏み入れると、外の喧騒とはかけ離れた静けさと限られた光の集積が歴史の重さを表象している。一歩ずつ足を進めるともう一つの光差す空間が垣間見える。

町家の中庭である。緑濃い中低木、たとえば、カシの類やカエデなどが涼やかな緑陰を構成している。茶庭の影響をうけている手水鉢などは、今時は厠の手洗いとして使われている例も多いが、一服の清涼感を与えている。町家における山居の風情である。この小さな町家の中に現代もなお、さりげなく造園空間として存在する中庭はデザイン的なルーツをどこに求めるのであろうか。

いわゆる古代或いは中世前期、つまり鎌倉時代を境とするまで、庭園といえば、上層貴族の回遊式庭園や寺院に展開した浄土式庭園など中国からの影響を色濃く受けた広大な敷地のものであった。ところが、京都のまちも徐々に市街化の進む中、屋敷の敷地は狭小化した。町民社会や市井のまちかどをあらわした洛中洛外図などにみられるように、家屋やその庭は狭められた空間に凝縮した自然を表象するものとなってきたのである。

この町家の中庭は山居の体をあらわす野趣に満ちた造園空間であり、禅林の流れを受けた枯山水や後には市井の人々も参加した茶数寄の庭の影響を受けているものだ。これらの造園的空間は宗教的な影響を基盤に、日本独特の山間の風情を取り入れている。このような自然を重視する作庭の捉え方は、振り返って現代社会では日本の景観や風景といったものが、実際どのように造園空間に反映されているかという日常的な疑問を引きおこす。

旧来、島国である日本は海外の文化や文明を飽くことのない食欲さで取り入れてきた。古くは中国や朝鮮半島を経た大陸文明を。また、明治以後は欧風化の流れに沿って、西洋文化の吸収に務めてきたといえる。その結果我々は、さまざまな歴史的風土や人工的な意匠の入り交じった、一種混然としたランドスケープの中に身を置いている。歴史的変容を経たより自然に近い景観、或いはアートとしての人工的意匠に満ちた造園空間のいずれもその価値の多寡を比較できるものでは勿論ない。これらの空間を、その眼で見る構造、素材、部分的な詳細などから判断することも大切な評価の手法であるが、その創り手がどのような職能としてそれらの構築に携わってきたかを探ることもそういった空間を知る一つの切り口としてある。民衆レベルで日本の造園空間の形成に携わった人々のルーツを探り

たいと願ったのが、本論の着手に至った動機である。

以下に大学院時代に参加した共同研究「数寄町家」(1975:鹿島出版社)からの一節を引用する。

「京は町中、江戸のはじめは市井の街角、田舎より反物の仕入れに来る某男、あちらこちらと店を探しあぐねるうちに、とある結構な町家の前にたどり着き、何しろ田舎の無粋男、商いこそすれ、もともとは里育ち。いと物珍しげに町家の構えなどを、眺め回すに、ふと脇の木戸門の開かれたるに気付き、思わず内を覗きいると、水を打ちたる石敷きの露地、何やらひやりと心地よし。思わず我を忘れて奥へと入りぬれば、表通りの商いの声やら子供の姦しさやらとはうちかわり、静けさのみまさりける。あたりの木立ちに、男はふと故郷の山を思い出しける。木々のざわめき、小鳥のさえずり。進みゆくほどに足もとには石灯ろう、手水鉢のみゆるをしげしげと眺めいる。突きあたりの小さき藁屋でかすかに衣ずれの音の聞こゆるに、窓の隙から覗きいれば、身なりよろしき町人姿が改まっの茶会の最中。これが何しおう数寄の茶会か、ほう、とため息をつけば茶室の一同、音に驚き振り返りぬ。間抜け男、厚かましきに気がついて頭を下げ、あわてて表にとび出しにける。反物を仕入れず、田舎へのみやげ話を仕入れたる男の失敗談にて御座候。」

これは中の一節に挿入した、筆者創作の笑い話である。この共同研究では京都や地方、特に喜多方を中心とした蔵のある町家などを調査研究してその成果をまとめた。この研究の中で町家の庭はある意味で、どこからの外来の様式にも影響されず、むしろ日本の景観に内在する野趣、草庵、葉隠れの里といった風情を常時醸し出していた。そしてこれらの体験は私に、後に仕事をしながらもこの庭を作る背景となった技術や思想はどこから来てどこへ行ったのか。そういった疑問が頭の片隅に残ることとなった。

振り返ると、大学院時代に京都大学の上田篤先生の町家研究会に参加したが、後に私自身が長年のテーマとして「日本人の景観のルーツは、私たちや過去に存在した人間一人一人が、長年息づいてきた歴史の中で、今ある景観にどのように関わってきたか、そしてどのように関わっていけるか？」という命題を抱えることとなった、・・・なってしまったといえる。

当時、京都大学農学部の造園学研究室では中村一先生を始めとして、吉田博宣先生、諸先生方共々自由な学風の中でのびのびと学生生活を送らせて頂いたことも、このような漠としたテーマを長年持ち続けていられたエネルギーの源になっている。放任、自立、そして、それなりに各人各様の活動を評価するという教室内の雰囲気は私たちを育ててくれたことは間違いない。

中村一先生には原論を考えていく姿勢、さらには目先の事象にとらわれない研

究を続ける者としての生き方自体を学んだと思う。吉田博宣先生には、いつも暖かい励ましと、最終提出に向けての論文構成上の重用な助言を頂いた。

また、実務の合間に途切れがちな研究を続けてきた自分をご指導下さった京都橘女子大学の横田冬彦先生には、本当に感謝している。歴史という未知の分野の取り扱いに道を知るべき地図もない状態の中、イメージだけで手探りをしていた年月。古文書研究会に参加しながら、神戸大学の研究室に伺い、京都橘女子大学に転任されて後も、厚かましくお邪魔し続けた。神戸大学文学部博士課程の森田竜雄氏にも、お世話になった。

さらに、兵庫県立姫路工業大学の中瀬勲先生には、震災後の活動を共にさせて頂いた中で、実践と研究という魅力ある両者をこれからどのように自分の中で融合させていくかという新たな命題を頂いたと考えている。

このように大勢の熱意ある、そして学識と人生の経験豊かな諸先生方のご指導を受け、遅ればせながらも研究者としての歩みを進めていこうとしていける幸運に喜びを感じている。さらに、姫路工業大学(淡路景観園芸学校兼務)の先生方にも学位論文をまとめる最後の9合目あたりで、岩場を登っているかのようなつらさを感じた時には暖かい励ましを頂き感謝している。そして常時、調査への同行や論文の目的性、誤字などの見直しまで含めて、支援を惜しまず協力してくれた夫、田中充へ感謝と陳謝を述べたい。

最後に、この学位論文は、かなたの天に旅立った両親 林千博、弥生、義父 田中正次、そして今、日々の暮らしを慈しみながら健やかな毎日を送っている義母 田中博子に捧げる。

平成13年1月 林 まゆみ記

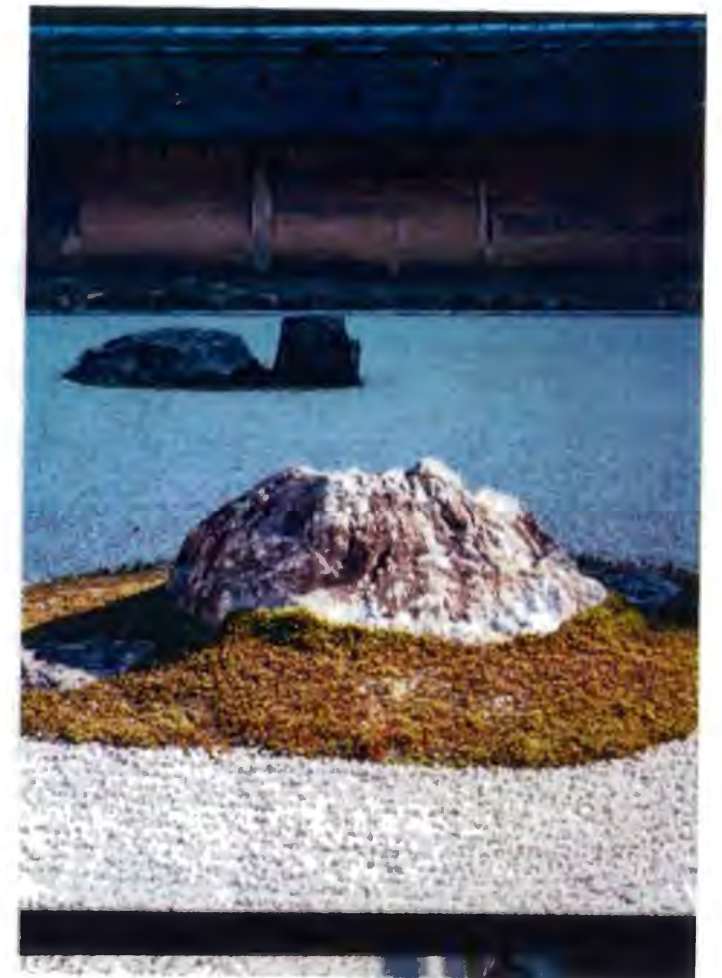
付録 中世後期に作られた庭園や施設の写真



上 右

竜安寺石庭(京都府)

細川勝元が宝徳2年(1450)建立、伊藤ていじによると石に「小太郎」など河原者の印刻があるという。





北野社参道(京都府)



北野社参道(京都府)

第1章では、北野社の参道の掃除を散所、河原者、神人、主典、宮仕などが、分担している。



北野社井戸（京都府）
第1章では散所が井戸
の水替えを頻繁に行い、
河原者が修理にあたっ
ている。





金地院庭園(京都府)



金地院庭園(京都府)

南禅寺方丈庭園 16世紀中ごろの作
小堀遠州の下で賢庭が作庭に従事した。



旧秀隣寺庭園（滋賀県）
足利義晴に供奉した細川高国の作
享祿2年（1529）～3年ころの作



旧秀隣寺庭園(滋賀県)



朝倉氏庭園（福井県）

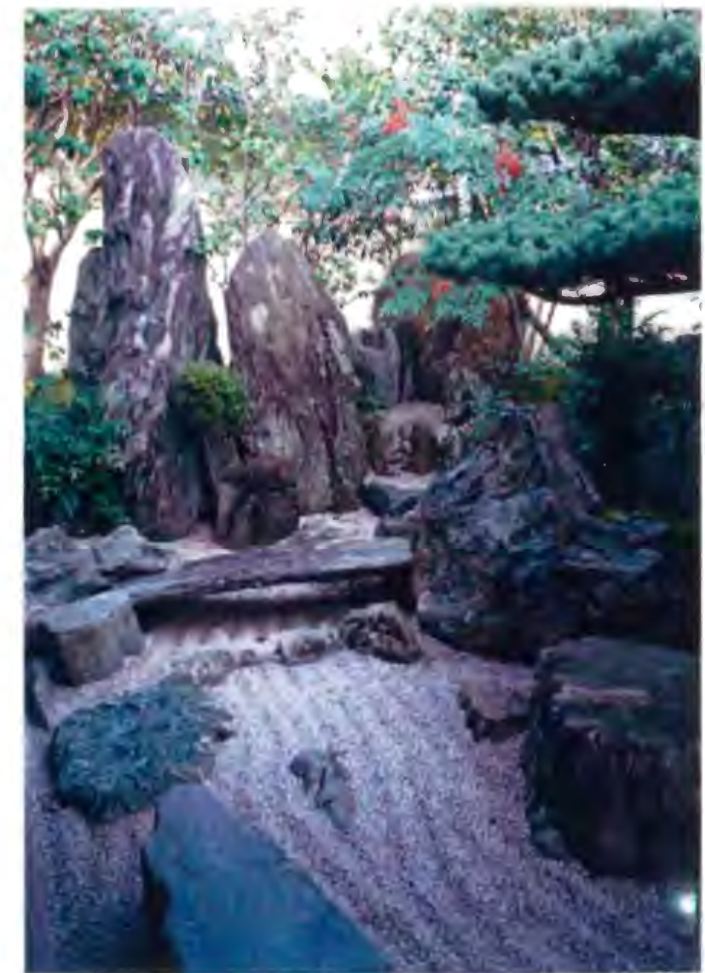
一条谷朝倉館跡庭園群 足羽川沿いの中世都市
足利敏景作 湯殿跡の庭園といわれている。



朝倉氏庭園（福井県）



上 右
大仙院庭園(京都府)



中世民衆社会における造園職能民の研究

2001年1月

著者 林 まゆみ

発行 兵庫県立姫路工業大学

自然・環境科学研究所

兵庫県立淡路景観園芸学校

製本 ㈱中村印刷所

神戸市灘区友田町 3-2-3

TEL 078-841-0911
